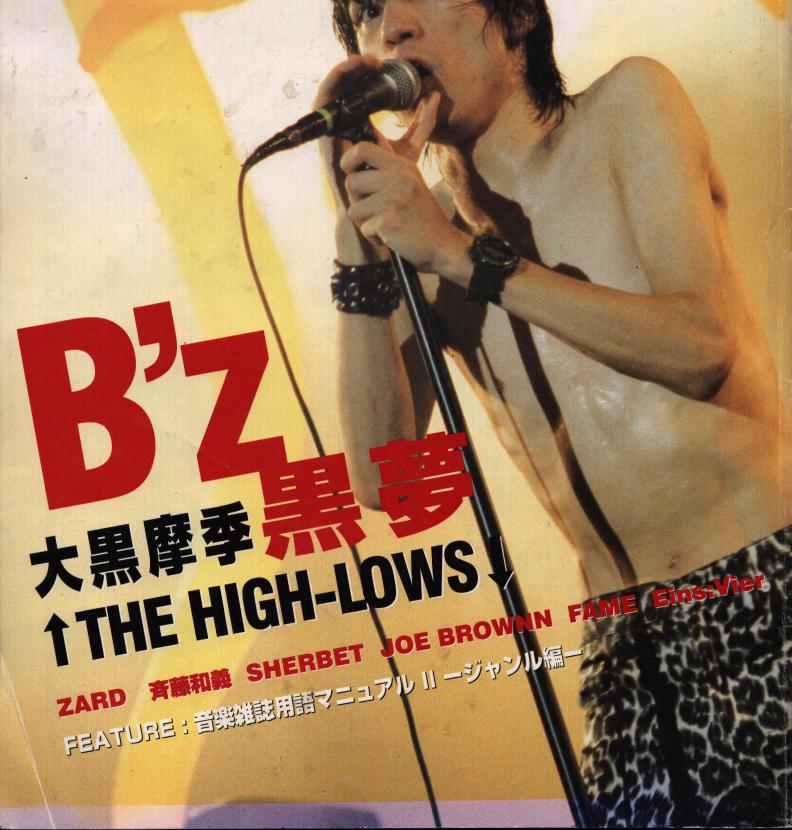
1996年8月1日発行(毎月1日発行)通巻第二四号 1995年3月13日第三種郵便物認可

JAPANESE ROCK NEWSMEDIA

J-ROCK magazine

9
400YEN
Volume 16
SEPTEMBER 1996
月刊ジェイロックマガジン

ZYYG LIVE ROCKIN' HIGH Vol.02

"Trouble Beats"

'96.8.1(THU) at 市川 CLUB GIO
OPEN 18:30/START 19:00 ¥3,090yen(tax included.) Information:フリップサイド (03)3470-9999

'96.8.4(SUN) at 前橋 club FLEEZ
OPEN 18:30/START 19:00 ¥3,090yen(tax included.) Information:フリップサイド宇都宮 (028)633-1009

'96.8.5(MON) at 横浜 CLUB24
OPEN 18:30/START 19:00 ¥3,090yen(tax included.) Information:フリップサイド (03)3470-9999

W'O MIX NIGHT SPECIAL

~ROCK of AGE vol.1~

'96.7.29(MON) 大阪厚生年金会館大ホール Information:キョードー大阪(06)345-2500
出演:ZYYG, The Space Cowboys, SIAM SHADE, CRAZE
前売り:3,914yen/当日:4,500yen チケットぴあ、チケットセゾンにて チケット発売中

ZYYG

3TRACKS INCLUDED

1.GYPSY DOLL

2.BLOOD ON BLOOD
テレビ朝日系「パワーレンジャー」エンディングテーマ

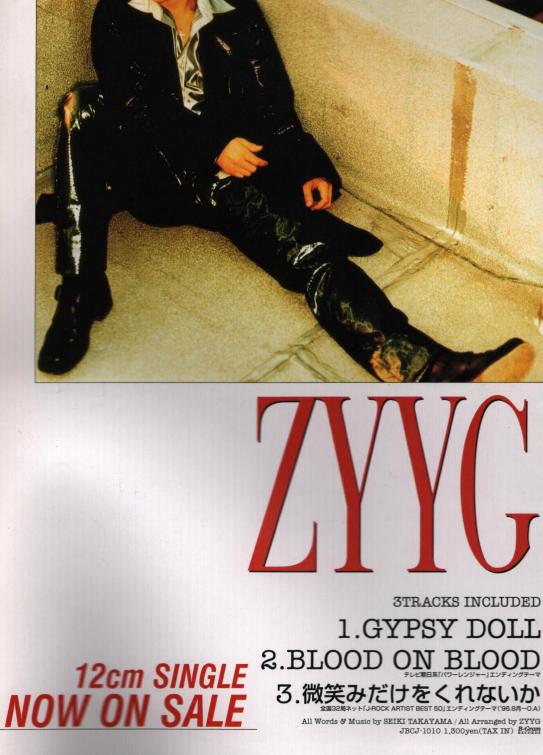
3.微笑みだけをくれないか
全国32局ネット「J-ROCK ARTIST BEST 50」エンディングテーマ('96.8月~O.A)

12cm SINGLE NOW ON SALE

All Words & Music by SEIKI TAKAYAMA / All Arranged by ZYYG
JBCJ-1010 1,300yen(TAX IN) B-Gram RECORDS

CAUTION!!!
CAUTION!!!
CAUTION!!!
CAUTION!!!
CAUTION!!!
CAUTION!!!
CAUTION!!!
CAUTION!!!

KBS京都　MODS HOUSE

ロックの今が見た〜いっ!

この番組は、視聴者からのハガキ・街頭アンケート・J-ROCK magazineの読者人気アンケートを総合的に集計し、毎週番組独自のJ-ROCK ARTISTのベスト50をいち早く紹介すると共に、ARTISTの最近の活動状況をお知らせする視聴者と一体型の音楽情報番組です。4月から番組名が[J-ROCK ARTIST COUNT DOWN 50]から[J-ROCK ARTIST BEST 50]に変わりました。

J-ROCK ARTIST BEST 50

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	23:30〜	テレビ新潟	金	26:25〜
岐阜放送	土	23:30〜	テレビ愛媛	木	24:50〜
びわ湖放送	金	22:25〜	長崎文化放送	金	24:25〜
三重テレビ	金	17:15〜	熊本朝日放送	日	24:00〜
奈良テレビ	土	23:30〜	仙台放送	火	24:10〜
サンテレビジョン	木	08:00〜	テレビ静岡	金	25:05〜
テレビ和歌山	金	17:00〜	福島テレビ	木	24:50〜
岩手めんこいテレビ	水	25:00〜	北陸朝日放送	日	24:25〜
秋田朝日放送	日	23:55〜	山口放送	土	25:25〜
群馬テレビ	木	23:45〜	日本海テレビ	木	24:45〜
北日本放送	日	24:45〜	沖縄テレビ	木	25:45〜
テレビ埼玉	金	23:30〜	高知放送	水	24:45〜
千葉テレビ	金	23:30〜	テレビ神奈川	日	23:30〜
長野朝日放送	日	23:55〜	青森放送	金	25:15〜
鹿児島読売テレビ	土	25:35〜	大分朝日放送	土	25:55〜
広島テレビ	水	25:15〜	札幌テレビ	火	25:40〜

ロックの原点を知りた〜いっ!

すべてのROCK音楽の原点である「ブルーズ」。数年前から関西を中心にブルーズのムーブメントが全国に広がってきています。この番組は、「ブルーズ」から始まりすべての音楽へ広がっていく「音楽ルーツ」を深く探り音楽の素晴らしさ・楽しさを全国へ発信する番組です。

ロック音楽ROOTS

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	24:00〜	長野朝日放送	日	24:25〜
岐阜放送	土	24:00〜	テレビ新潟	月	25:35〜
びわ湖放送	金	24:30〜	テレビ愛媛	月	25:20〜
三重テレビ	火	24:35〜	長崎文化放送	土	25:30〜
奈良テレビ	土	24:00〜	熊本朝日放送	土	24:30〜
サンテレビジョン	金	24:30〜	青森テレビ	日	24:35〜
テレビ和歌山	土	24:10〜	テレビュー山形	日	25:15〜
岩手めんこいテレビ	木	25:00〜	テレビ山梨	火	24:35〜
秋田朝日放送	土	24:40〜	テレビ高知	土	25:26〜
群馬テレビ	土	24:00〜	大分放送	月	24:30〜
北日本放送	金	25:15〜	琉球放送	日	24:50〜
テレビ埼玉	金	24:00〜	日本海テレビ	金	25:15〜
千葉テレビ	日	23:30〜	南日本放送	月	25:00〜
静岡第一テレビ	月	25:15〜	札幌テレビ	日	25:15〜
テレビ金沢	日	25:15〜	福井放送	火	25:15〜
山口放送	土	25:55〜			

Triumph number 002

CONTENTS

J-ROCK magazine

9 SEPTEMBER 1996

COVER ARTIST
↑THE HIGH-LOWS↓

COVER PHOTOGRAPHER
SHIN WATANABE

EDITORIAL DESIGN
HIROSHI SHIRAE
TOMOYUKI OHNISHI

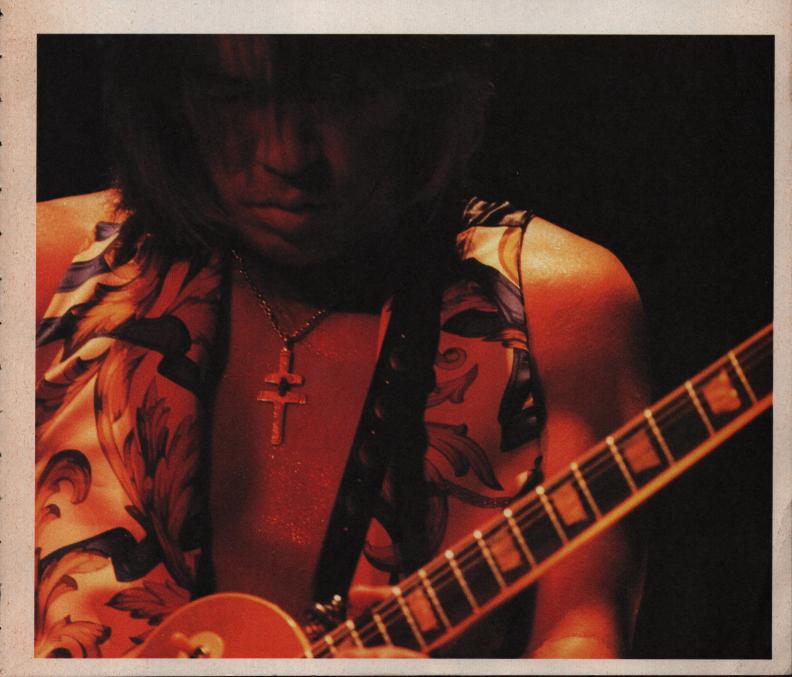
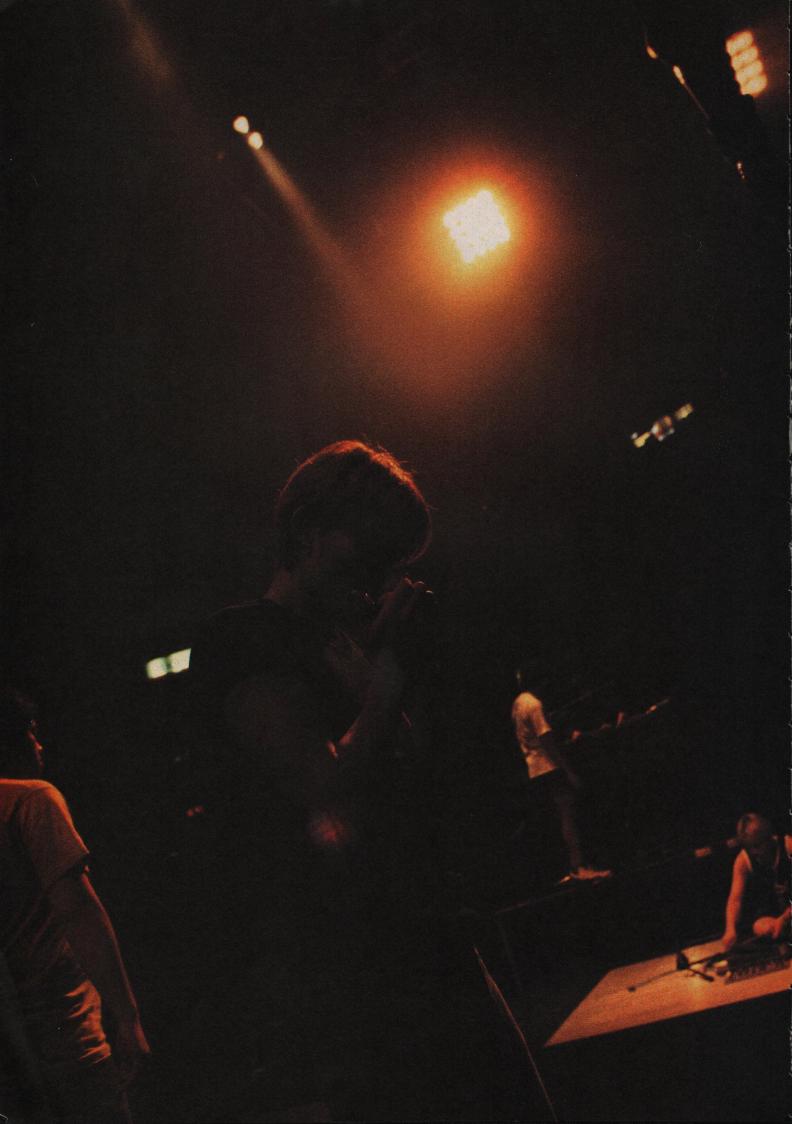
1996年8月1日発行(毎月1日発行)通巻第二四号
発行:株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 8F
PHONE:06-214-1751/FAX:06-214-1761
印刷・製本:株式会社大伸社
発行人:辻村和周　編集人:里居正裕

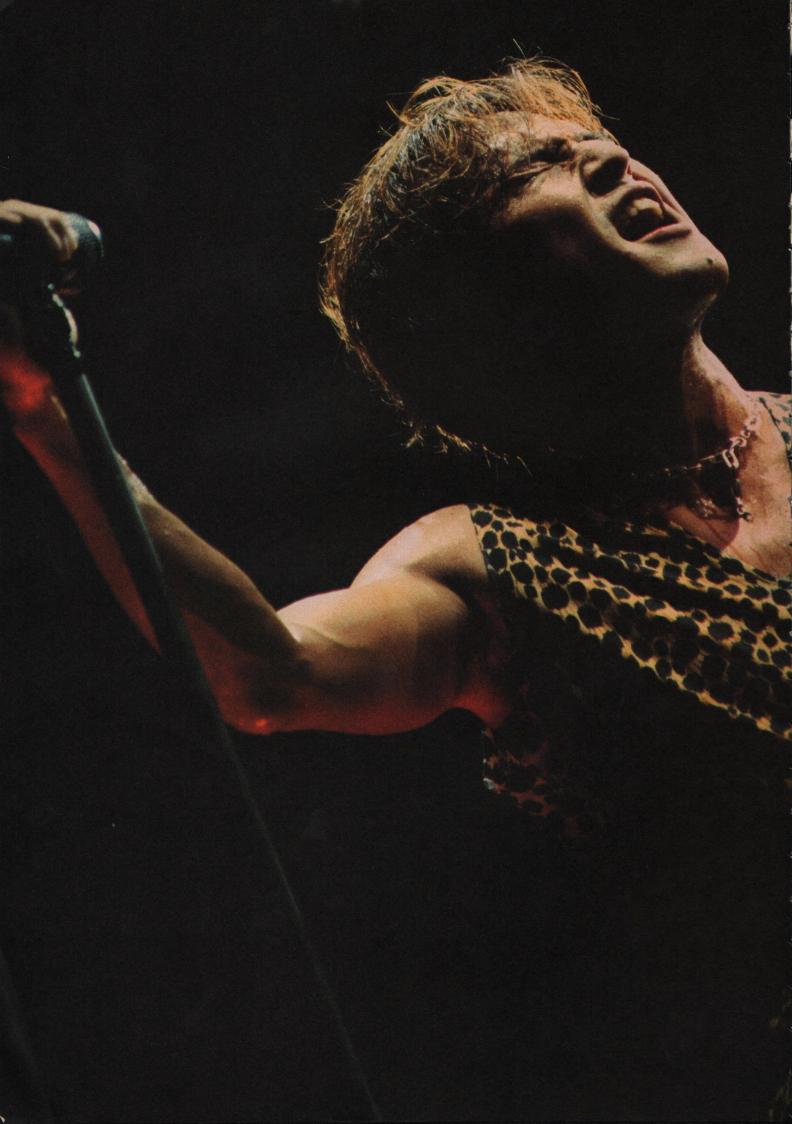
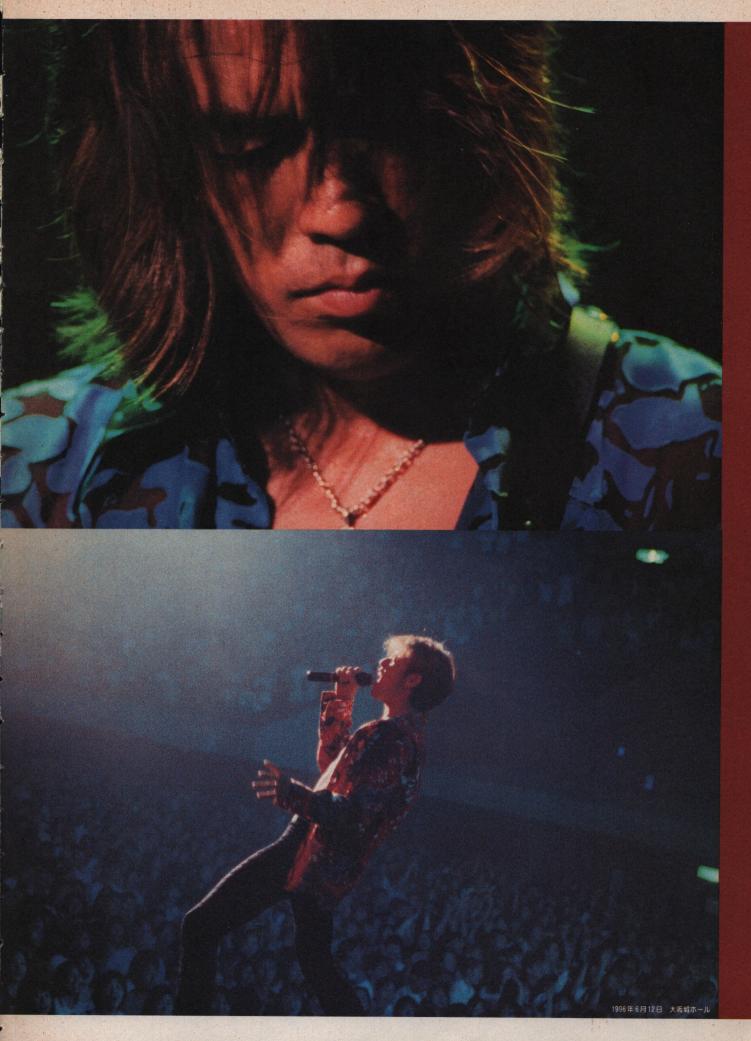
アーティストニュースを見よ。

本誌は、日本の音楽に焦点を当てていく音楽専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK ARTISTS NEWSを見てほしい。基本的に、ここでセレクトしたアーティストたちに注目していくつもりだ。このアーティストたちは、編集部が次の5つの条件を基に際限の無い論議を行い、独断と偏見のもとにセレクトしている。

1. ルーツ(ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている)
2. 実力(歌唱または演奏力がある。声に魅力がある)
3. クリエイティビティ(作詞・作曲能力に優れている)
4. パフォーマンス(カリスマ性がある。ライブパフォーマンス、ビジュアルがいい)
5. 生き様(芸能人、タレント化していない)

以上の5項目を有していれば、当然認められるべきで、そうしたアーティストを選出した。

HEAD FOCUS
B'z LIVE-GYM '96 "Spirit LOOSE"
June 12th 1996 at Osaka-Jo Hall

June 12th 1996 at Osaka-Jo Hall B'z LIVE-GYM '96「Spirit LOOSE」

B'z LIVE-GYM '96 "Spirit LOOSE"

1996年6月12日　大阪城ホール

「…自分でももうどうなるか分かりません。会場は湿度がどんどん上がってきて今日みんなが帰るころには、もうエライことになってると思うんですけど（笑）」。1996年6月12日、大阪城ホール。全国で44本のステージをこなす今回の『B'z LIVE-GYM'96 Spirit LOOSE』ツアーの終盤、34本目での稲葉の少しキレそうなMCだ。

昨年の『Pleasure '95』ツアーは、本人達が語っていたようにある意味〝お祭り〟的なアリーナツアーであっただけに、軽やかなステップで、自由にはじけたB'zをこの目にし、心ゆくまで酔ったわけだが、今夜、それがあくまでも新しいB'zの片りんでしかなかったと思えるほどの刺激的なライブが目の前で展開した。

二人であることの意味を生かし、今までの〝B'zであること〟に対する固定概念を縛り上げる頑丈なロープに思い切ってルーズな緩みを持たせた結果、出来上がったアルバム『LOOSE』。そして、その音と空気という具体的な結果を携えてスタートした、今回の『Spirit LOOSE』ツアーは、B'zの思い切った変化、そして思い切ってなお変わりようのないB'zミュージックのコアを感じる絶好の機会となるはずだ。

場内がさりげなく暗転、ヘリコプターの爆音がステージから客席後方に向かってとどろくと、オープニングのアクション・ムービーが巨大なスクリーンに映し出される。B'z主演の本格的なハリウッド型ムービーで、シリアスのカケラもないカーチェイスがそう快。あくまでも〝お楽しみ〟であることに違いはないが、客席に向かって「まあまあ、肩の力抜けよ」ってメッセージしてるようで、このツアーのコンセプト〝ルーズ〟への助走として最高に的を射ている。勧善懲悪よろしく炎上した悪玉の車から上がる炎をバックに耳に飛び込んできたのは、「Real Thing Shakes」のイントロの分厚いギターリフだ。

ステージ中央のマイクスタンドの前で、仁王立ちの稲葉。感情のリズムで身体は小さく揺れるが、気持ちが激しけりゃ動きも激しくなんて安モンとは違う、スピリチュアルなフィーリングだ。そのリズムで繰り出される歌も、激しさを内側に向けたような鋭さ。松本は客席を見渡しながら余裕の表情で存在感いっぱいのリフを刻む。いきなりヘビーな離陸を見せたライブに、裏切られることの快感を満喫している僕の身体をバスドラムのキックの音圧が後ずさりさせると…稲葉が今夜最初の、切れそうなシャウトを披露してくれた。

「I can tell you I've been aching …」。

4曲めで、ようやく『LOOSE』のアルバムナンバー「drive to MY WORLD」が登場。ハモンド・オルガンのほこりっぽいサウンドと、地に足の着いたミッドテンポが会場の空気をジワジワと熱くする。そのスローなカーブを描く熱さの上昇は、パワー・バラード「夢見が丘」に、静かに引き継がれた。そして、「MOTEL」のイントロで、ブルージーなアルペジオに絡む、波のように押し寄せる拍手に、客席サイドの〝いい

稲葉「大阪のファンは!!」観客「絶対にビッグ!!」

具合の熱さ〟と、音楽と向き合う〝ホンモノさ〟を垣間見る。その得も言われぬ感動はここからさらにどんどん加速していくのだ。

「今日は思いっ切りハメを外して大騒ぎしてめちゃめちゃになって帰って下さい」ってリラックスしたMCで始まったアコースティックな「BIG」。会場は大合唱だ。この渋いナンバーで会場中を盛り上げるB'zもすごいが、それに反応できる今夜の観客も正にホンモノ。どんなライブでもめったに感じられないことだが、今夜の会場の手拍子にはグルーブさえ感じられるほど。これでこそ、B'zもファンも今よりもっともっと絶対にビッグになれるってもんだ。会場中がいい雰囲気に漬かりきると、稲葉は「絶対にビッグ」のリフレインを観客に繰り返して歌わせ、その上で自由に自分の歌をフェイクさせ始める。「B'zのファンは」「絶対にビッグ」「大阪のファンは…」「絶対にビッグ」「TAK松本」「絶対にビッグ」…。アリーナホールごと巻き込んだ、ビッグなジャムセッション。分かるだろうか？会場のみんなはB'zとセッションしたってことだ。曲が終わった後の会場の盛り上がりは、大きな満足感にあふれ返っていた。

そんなフィーリングたっぷりで、時として危なささえ感じさせる稲葉のボーカルは、松本の繊細なギターソロ・タイムを挟んで、目に見えてどんどんトルクを開き始める。

『The 9th Blues』ツアー以降だったろうか……ことあるごとにメディアは、五人組ロックバンドとしてのB'zを評価する声を大にした。僕も実際あのツアーをそんなふうにレポートしたことがあったのだが、この中盤以降の稲葉のシャウトと松本のギターのぶつかり合い、まさぐり合いに、二人組のB'zを今までになく深く認識させられてしまった。あえて言うと、このボーカルとギターはフロントとバックというありきたりの位置関係にはなく、その二つの絡みがB'zミュージックの一番の魅力であり、個性だってこと。稲葉が次々と繰り出す入魂のシャウトのお陰で、ボーカルとギターが絡み合ってるっていう図式がハッキリ示された。ボーカルが光を見せ、その合間で違う色に輝くギターのオブリガード。そんな視線で見ていると、松本はソロ以外のリフでもアルペジオでもカッティングでも、稲葉と一緒に歌っているようにギターを弾いているのが聴こえてくる。ダサい表現はこの際許してもらおう。これこそ〝二人組ロック・ユニット〟と呼ばれるべき形態だろう。バランスを優先しての大人びた押し引きではなく、ぶつかり合うことでこそ生まれる美しい火花についつい反応してしまう、ロック好きの僕。バンドとの一体感は完ぺきだが、今年それはあって当然の世界に進化し、もうそれに縛られることなく自由にやってる二人のラフさがとにかくイイ。

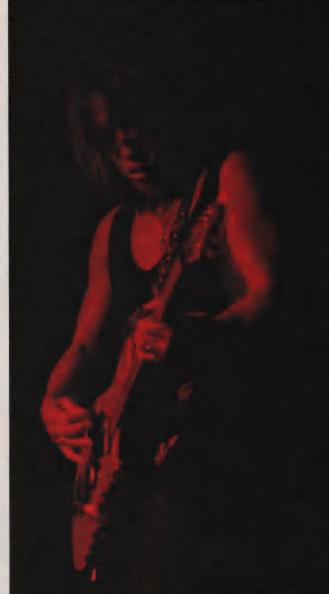
「二人であることの意味を追求する」という言葉がライブという空間で完成した。意見が変わったと僕を非難するなかれ、音楽ライターもB'z同様進化するのだ。そうだ、いい機会だから言っておこう。「ギターとボーカルの二人組ならB'z的で絶対売れるぜ…」なんて無駄なお戯れはもうそろそろやめような。

B'z LIVE-GYM '96"Spirit LOOSE"

会場がこれでもかと熱くなった所で、「アメリカンバンド」のイントロとともに、ステージの暗闇につなぎの作業服とヘルメットといういでたちの40名ほどのスタッフが登場。ヘルメットから発せられる強力なライトを不気味に振りまく。「一体何なんだ?」。コンサートで滅多にある光景じゃないだけに、何が起こるのか全く予想がつかない。「何かトラブル?」って結論を出そうとした瞬間、彼らは演奏中だというのに、ステージのセットチェンジを始めてしまう。そんな騒然としたステージで曲は「Blowin'」に転じるのに、稲葉はいない。彼に代わって松本、デニー、明石、増田の順でボーカルを取ると客席は楽しげな歓声を上げる。そこでスタッフの一人に成り済ましていた稲葉が作業服とヘルメットを脱ぎ捨てて、「これでなきゃ」というボーカルを聴かせると、歓声が大喝さいへ。ステージはその一曲の間に、謎のスタッフの手によって八本指のロボットの手のひらにバンドがいるような壮大なスケールに姿を変えた。

終盤「spirit loose～」で再びギターとボーカルが行き過ぎるほどやり合って「ザ・ルーズ」へ。感情優先でトップギアに入ったシャウトが曲中に充満。客席とのコール&レスポンスで、昇り詰めると、「ARE YOU READY TO MOVE?」の叫びから「MOVE」へなだれ込み、すさまじい威圧感のギターとオルガンのアンサンブルが観客の腰を浮かせる。ステージからのフラッシュ・ライトでステージが直視できないまま、エンディングで耳をつんざく今夜最高のシャウトが響きわたると、思わず会場の歓声が静まった。これはもう、歌唱と言うよりも本能の叫び。稲葉は…稲葉はそのままステージ上に大の字に倒れ込んでしまった。

悲鳴とも歓声ともつかない声の塊のすき間を縫うように流れて来たピアノの調べは「消えない虹」のイントロ。今度は危なさと対極に位置する優しさをまきちらし、稲葉は深い説得力で歌い上げる。観客を黙らせてしまうほどのバラードというやつに久しぶりにお目にかかった。静と動、陰と陽、優と激、こんな反目し合うたくさんの対比が、このツアーでB'zの音楽を輝かせている。

ギターソロの前に演奏はブレイクし、再び稲葉の感動的なシャウトが会場に響きわたった瞬間、ツアーごとにその一瞬の感情を即興でより的確に表現できるようになって来る彼が、次のツアーでどんなにすさまじい感情の放出を見せてくれるのか、こっちの感情は少し怖くなって鳥肌が立つところまでイってしまったようだ。

アンコールのラストナンバーが、稲葉の思惑通りの湿度でグチョグチョになった大阪城ホールの空気にさわやかな風を吹き付けている。熱かった、興奮もした、感動もした。「ミエナイチカラ」に解放された僕も、動物の本能的な快感をかみしめた2時間を、今終えようとしている。

［文・西原 朗 撮影・細野晋司／有賀幹夫］

PLAYLIST

1	Real Thing Shakes	13	FUSHIDARA100%
2	ねがい	14	spirit loose～ザ・ルーズ
3	love me, I love you	15	JAP THE RIPPER
4	drive to MY WORLD	16	MOVE
5	夢見が丘	17	消えない虹
6	Gimme Your Love	encore	
7	MOTEL	1	LOVE PHANTOM
8	キレイな愛じゃなくても	2	ミエナイチカラ
9	BIG		
10	Guitar Solo ～あなたへ…～		
11	Blowin'		
12	ZERO		

B'z Live Tour History 89 to 96

B'z LIVE-GYM #00 "OFF THE LOCK"

1989年6月　全3公演

B'z初めての本格的なライブ『B'z LIVE-GYM #00 "OFF THE LOCK"』は、89年6月、東京・名古屋・大阪の3カ所のホールで行われた。新人ユニットが、初めてのライブをホール・コンサートで飾るのは当時としては異例の出来事だった。松本孝弘はデビュー当初から「B'zのライブはオリジナル作品だけで構成したホールクラスを中心としたライブ」というポリシーを持ち、そのコンセプトを刻印するように自らのライブコンサートを"LIVE-GYM(ライブ・ジム)"と命名した。

満を持して登場したB'zは、LIVE-GYMの根幹をなす完ぺきなサウンドと演奏スタイルの上に成り立つ華やかさ、ワイルドさ、新人離れしたプロフェッショナルなライブパフォーマンスでオーディエンスを圧倒。この時の選曲は1 stアルバム『B'z』と2 ndアルバム『OFF THE LOCK』の中から満遍なくセレクトされ、当時のB'zの音楽性を凝縮した内容だった。初めてのライブという事もあってB'zの二人もオーディエンスも期待と不安と興奮が交錯したライブ体験をしただろうが、それでも、ライブのクオリティーは当時から非常に高かったと記憶する。

すべてのB'zのLIVE-GYMの原点として、この時の3千人のオーディエンスが後に続く30万人のオーディエンスとなり、3百万人のオーディエンスを獲得するに至る道の始まりという意味でも感慨深いツアーだ。

B'z LIVE-GYM #001 "OFF THE LOCK"

1989年10月～12月　全14公演

3カ所で行われた『B'z LIVE-GYM #00"OFF THE LOCK"』ツアーのアンコールツアーともいうべき内容、全国14本(追加公演3公演含む)のLIVE-GYM。このツアーに先駆けて行われたライブハウス・サーキット『BAD CLUB GYM』でLIVE-GYMの前哨戦を終え、B'z旋風がいよいよ全国に広がることを予感させるツアーだった。

このころにはすでに2 ndアルバム『OFF THE LOCK』も定着し、ツアー前にリリースされたミニアルバム『BAD COMMUNICATION』がロングセラーの兆しを見せていたため、曲構成は『B'z LIVE-GYM #00"OFF THE LOCK"』プラス『BAD COMMUNICATION』という内容。この時期のパブリックイメージとしてB'zはダンスミュージックをプレイするきらびやかなバンドとして認知が強かったが、ことLIVE-GYMにおいては松本孝弘の的確なギターワークと、稲葉浩志のヒューマンボイス&ライブパフォーマンスでよりライブのだいご味をオーディエンスに訴え、他のデジタル系バンドとは一線を画したライブユニットとしての評価を着実に積み上げていった。

B'zのステージセットではおなじみとなっているトラス(ステージ上で組まれた鉄骨)が本格的に組まれ始めたのもこのころから。

B'z LIVE-GYM "BREAK THROUGH"

1990年3月～6月　全22公演

3 rdアルバム『BREAK THROUGH』リリース直後に開始されたアルバムタイトルを冠したコンサートツアー。ちょうど、B'zの人気がブレイクに向かっていった時期に開始されたツアーだったため、各地とも熱狂的なオーディエンスに迎えられた。スター街道をまい進するアーティストの輝きと勢いはおのずと彼らのLIVE-GYMにも反映され、アルバム『BREAK THROUGH』を中心とした曲構成に「HURRY UP!」「GUITAR KIDS RHAPSODY」「BAD COMMUNICATION」といった初期LIVE-GYMの定番ナンバーが整然と配置され、LIVE-GYM全体の流れをスピーディーで飽きさせない構成に高めていた。オープニングで稲葉浩志がステージ幕を破って登場したり、「HEY! BROTHER」での観客との掛け合いなど、ショーアップされたステージングの他、照明も話題となり、オーディエンスと作り上げるLIVE-GYMの楽しみを浸透させていった。

また、この時期、連続シングルリリースを行っていたB'zは、5月リリースの「BE THERE」、6月リリースの「太陽のKomachi Angel」の新曲をいち早くライブでも披露。

以後、新曲が出来る都度そのリリース時期前後のLIVE-GYMでは、すぐにそのレパートリーに追加されることが定着した。

89

LIVE-GYM #00 OFF THE LOCK

6.1/愛知/芸術創造センター
6.2/大阪/大阪厚生年金会館(中)
6.5/東京/日本青年館

BAD CLUB GYM

10.14/愛知/名古屋ボトムライン
10.16/神奈川/川崎クラブチッタ
10.28/大阪/つかしんテントイン

LIVE-GYM #001 OFF THE LOCK

10.26/福岡/都久志会館
10.27/熊本/郵便貯金会館(小)
10.31/宮城/仙台市民会館(小)
11.5/埼玉/川口市民会館(イベント)
11.7/秋田/児童会館
11.8/青森/青森市民ホール
11.10/北海道/道新ホール
11.27/東京/渋谷公会堂
11.29/愛知/愛知勤労会館
12.2/栃木/宇都宮市文化会館(小)
12.12/大阪/大阪国際交流センター
追加公演
12.13/大阪/大阪国際交流センター
12.21/東京/渋谷公会堂
12.23/愛知/名古屋市公会堂

90

B'z LIVE-GYM BREAK THROUGH

3.16/埼玉/浦和市文化センター
3.20/千葉/千葉県文化会館(大)
3.29/神奈川/神奈川県立県民ホール
4.2/栃木/宇都宮市文化会館(大)
4.5/群馬/高崎市文化会館
4.6/長野/長野県民文化会館(中)
4.10/熊本/熊本市民会館(大)
4.11/長崎/長崎市公会堂
4.13/福岡/福岡郵便貯金ホール
4.24/新潟/新潟県民会館(大)
4.27/石川/金沢市文化ホール
4.28/大阪/大阪厚生年金会館
4.30/広島/メルパルクホール広島
5.1/岡山/岡山市民会館
5.8/東京/渋谷公会堂
5.9/東京/渋谷公会堂
5.14/宮城/仙台電力ホール
5.16/青森/青森市文化会館
5.17/秋田/秋田市文化会館
5.29/北海道/札幌市民会館
6.2/愛媛/愛媛県民文化会館サブホール
6.4/愛知/名古屋市民会館

B'z LIVE-GYM TOUR '90-'91 "Risky"

10.4/東京/調布グリーンホール
10.5/東京/調布グリーンホール
10.7/長野/長野県県民文化会館(大)
10.10/鹿児島/鹿児島県文化センター
10.11/熊本/熊本市民会館
10.14/沖縄/沖縄市民会館
10.18/埼玉/大宮ソニックシティホール
10.20/群馬/桐生産業文化会館
10.22/神奈川/神奈川県立県民ホール
10.23/群馬/群馬音楽センター
10.25/山梨/山梨県民文化ホール(大)
10.27/千葉/千葉県民文化会館
10.28/愛知/名古屋市民会館
11.2/静岡/浜松市民会館
11.8/福岡/メルパルクホール福岡
11.9/福岡/九州厚生年金会館
11.11/長崎/長崎市公会堂
11.14/兵庫/神戸国際会館
11.15/徳島/徳島市立文化センター
11.22/宮城/イズミティー21ホール(大)
11.24/秋田/秋田県民会館
11.26/北海道/室蘭市文化センター
11.27/北海道/札幌市民会館
11.29/岩手/岩手県民会館
12.3/千葉/習志野文化ホール
12.4/神奈川/川崎市教育文化会館
12.5/福島/郡山市民文化センター
12.7/青森/青森市文化会館
12.10/愛媛/松山市民会館
12.11/香川/高松市民会館
12.13/大阪/大阪厚生年金会館(大)
12.14/大阪/大阪厚生年金会館(大)
12.17/大分/大分市文化会館
12.18/広島/メルパルクホール広島
12.20/福岡/メルパルクホール福岡
12.23/石川/石川厚生年金会館
12.24/福井/福井市文化会館
12.26/富山/富山市公会堂
12.27/新潟/新潟県民会館(大)

91

1.10/栃木/宇都宮市文化会館(大)
1.14/岡山/岡山市民会館
1.15/愛知/名古屋センチュリーホール
1.17/静岡/静岡市民文化会館
1.21/東京/渋谷公会堂
1.22/東京/渋谷公会堂
1.30/東京/中野サンプラザホール
1.31/東京/中野サンプラザホール

名実ともにJロックの頂点にそびえ立つB'z。ホンモノのロックバンドはライブで育つといわれるが、彼らはその言葉通り、結成8年間で12回に渡るツアーを敢行し、現在の揺るぎないライブバンドとしての地位を築き上げた。
常識を超えた馬力でとどまることなく突き進む彼らに、過去を振り返ってセンチにひたる理由などないが、大きな飛躍を見せた「LIVE-GYM '96」の大成功をこの目にした僕たちは、もう彼らに対する自分の評価軸が古びてしまったことを痛感している。これを機会に、彼らを新しい尺度で再評価するためにも、B'z怒とうのライブヒストリーを振り返ってみたい。

B'z LIVE-GYM TOUR '90～'91 "Risky"
1990年10月～1991年1月　全47公演

B'zが目指していたダンスミュージックとヒューマンな感性の融合した音楽の集大成として、初期の最高傑作『RISKY』が完成。このツアーはそのアルバムのリリースを待たずして開始されたアルバムツアーだったため、ツアー開始直後はオーディエンスは未知の新曲と遭遇し、思わぬ驚きを体験することとなった。

オープニングナンバーからハイボルテージのボーカルで聴かす稲葉と、よりワイルドにギターをプレイする松本。それまでのオーディエンスの熱狂と正対するLIVE-GYMから、明らかにこのツアーではオーディエンスを圧倒させるライブ空間を演出し、スケールアップしたB'zのすごさを見せつけた。「星降る夜に騒ごう」での電飾、「GO! NUDE! GO!」での舞台上のセットが崩れたりといった演出にもそれは顕著であり、ここに一つのライブ空間の完成形を見た。また、B'z初のナンバーワン・シングル「太陽のKomachi-Angel」、ライブの定番となっていく「EASY COME, EASY GO!」をメインに、〝2nd BEAT〟と呼ばれるシングルのカップリング曲が数多く演奏されているのもこのツアーの特徴だ。

それまでにない大規模な全国ツアーとしてスタートした『Risky』ツアー。B'zにとって初の10万人を超える観客動員数を記録し、4 thアルバム『RISKY』も彼らにとって初のミリオンセラーをもたらすことになった。

B'z LIVE-GYM "Pleasure '91"
1991年5月～8月　全41公演

この年、B'zは通常のアルバムリリース時に開始されるアルバムタイトルを冠したツアーとは別に、〝Pleasureシリーズ〟と呼ばれるライブツアーをスタートさせる。

ツアータイトルはその年リリースされたシングル「LADY NAVIGATION」の2nd BEATに収録されている「Pleasure'91～人生の快楽～」から取られたものだが、その言葉通り快楽を追求するためのLIVE-GYM、B'zのベスト的な内容の選曲を中心に、アルバムタイトル・ツアーで演奏されなかった曲目の復活、旧楽曲を全く新しいアレンジで再生させるなど、B'zにとっても様々なアプローチを行えるライブの場となった。

初めてのPleasureシリーズでは、ミニアルバム『MARS』からの選曲を中心にそれまでのアルバムやシングルの中からよりすぐった楽曲をプレイ。「だからその手を離して」「君の中で踊りたい」など初期のシングル曲はもとより「太陽のKomachi Angel」「LADY NAVIGATION」といった最新シングル曲が絶妙の曲順で披露。「Stardust Train」や「HOLY NIGHTにくちづけを」などの楽曲にスポットが当てられたのも目新しかった。

また、このPleasureシリーズで初めてB'zは武道館でのLIVE-GYM（3日間）を実現させた。

B'z LIVE-GYM "IN THE LIFE" '91～'92
1991年12月～1992年4月　全66公演

稲葉浩志に「今まで最も過酷だった」と言わしめた全国ツアー。スケジュール的にも本数的にもタイト&ハードな内容のこのツアーは、5 thアルバム『IN THE LIFE』のリリースに合わせて組まれたものだった。が、実はこの91年という年、B'zは足掛けで三つのツアーをこなすというハードスケジュールぶり。百本を超すその内容は単純計算でも3日に一度はB'zはどこかでライブを行っていたという計算だ。

調布から始まり沖縄の最終日まで3千人クラスの全国のホールをくまなく公演するというこのツアーでは、ステージ上に数十台のテレビモニターが配置されていたのが印象的。オープニングのモノクロ映像が、メンバーの開演直前の姿をとらえ、ステージにまで引き込む演出、「GO-GO-GIRLS」では、その日撮った会場周辺の映像が流され、稲葉浩志がビデオでのぞいた映像がそのままスクリーンに投影されるなど各地の会場の観客を巻き込んだ個性あふれるものだった（最後に二人の幼少のころの映像がスクリーンに現れたのもファンの間では話題を呼んだ）。また、ハードにアレンジが施された「VAMPIRE WOMAN」、コミカルなタッチの「あいかわらずなボクら」など、メリハリのある曲構成から一気に最後まで盛り上げるLIVE-GYMの内容は、さらに洗練されたものになっていった。

91

B'z LIVE-GYM "Pleasure '91"

5.3/千葉/千葉県文化会館
5.4/千葉/千葉県文化会館
5.7/兵庫/神戸国際会館
5.8/京都/京都会館第一ホール
5.11/山形/山形県民会館
5.12/秋田/秋田県民会館
5.15/北海道/函館市民会館
5.17/北海道/札幌厚生年金会館
5.18/北海道/札幌厚生年金会館
5.21/青森/八戸市公会堂
5.22/青森/青森市文化会館
5.26/長崎/長崎市公会堂
5.28/大分/大分市文化会館
5.29/佐賀/佐賀市文化会館
5.31/熊本/熊本市民会館
6.1/福岡/福岡サンパレス
6.6/福島/郡山市民文化センター
6.8/宮城/仙台サンプラザホール
6.11/埼玉/大宮ソニックシティ
6.13/愛媛/愛媛県民文化会館
6.15/香川/香川県民ホール
6.18/高知/高知県民文化ホール
6.20/岡山/倉敷市民会館
6.21/広島/メルパルクホール広島
6.23/山口/徳山市文化会館
6.28/福井/福井フェニックスプラザ
6.29/石川/石川厚生年金会館
7.1/群馬/群馬県民会館
7.2/新潟/新潟県民会館
7.4/長野/長野県民文化会館
7.8/沖縄/那覇市民会館
7.9/沖縄/沖縄市民会館
7.12/鹿児島/鹿児島市民文化第一ホール
7.13/福岡/九州厚生年金会館
7.18/大阪/大阪城ホール
7.19/大阪/大阪城ホール
7.31/東京/日本武道館
8.8/愛知/名古屋レインボーホール
8.9/愛知/名古屋レインボーホール
8.16/東京/日本武道館
8.17/東京/日本武道館

B'z LIVE-GYM "IN THE LIFE" '91-'92

12.4/東京/調布グリーンホール
12.6/埼玉/浦和市文化センター
12.9/兵庫/神戸国際会館
12.11/福岡/福岡サンパレス
12.12/福岡/福岡サンパレス
12.14/鹿児島/鹿児島市民文化第一ホール
12.16/熊本/熊本市民会館
12.20/北海道/旭川市民文化会館
12.22/北海道/北海道厚生年金会館
12.23/北海道/北海道厚生年金会館

92

1.9/静岡/静岡市民文化会館
1.10/栃木/宇都宮市文化会館
1.14/山梨/山梨県立県民文化ホール
1.16/埼玉/大宮ソニックシティ
1.17/東京/八王子市民会館
1.20/大分/大分文化会館
1.22/山口/徳山市文化会館
1.23/岡山/倉敷市民会館
1.25/広島/広島厚生年金会館
1.26/広島/広島厚生年金会館
1.28/兵庫/姫路市文化センター
1.31/高知/高知県民文化ホール
2.1/愛媛/愛媛県民文化会館
2.3/徳島/徳島文化センター
2.5/香川/香川県県民ホール
2.6/香川/香川県県民ホール
2.10/新潟/新潟県民会館
11/千葉/市川市文化会館
2.13/秋田/秋田県民会館
2.15/青森/青森市文化会館
2.18/東京/渋谷公会堂
2.19/東京/渋谷公会堂
2.21/大阪/大阪厚生年金会館
2.22/大阪/大阪厚生年金会館
2.24/大阪/大阪厚生年金会館
2.25/大阪/大阪厚生年金会館
3.1/長崎/長崎市公会堂
3.2/佐賀/佐賀市文化会館
3.4/福岡/九州厚生年金会館
3.6/宮崎/宮崎市民会館
3.10/静岡/沼津市民文化センター
3.11/静岡/磐田市民会館
3.14/東京/渋谷公会堂
3.15/東京/渋谷公会堂
3.17/群馬/群馬県民会館
3.20/宮城/仙台サンプラザ
3.21/宮城/仙台サンプラザ
3.23/岩手/岩手県民会館
3.24/山形/山形県民会館
3.27/富山/富山市公会堂
3.28/石川/石川厚生年金会館
3.30/福井/福井フェニックスプラザ
4.1/長野/長野県民文化会館
4.3/愛知/名古屋センチュリーホール
4.4/愛知/名古屋センチュリーホール
4.6/和歌山/和歌山県民文化会館
4.8/神奈川/川崎市立教育文化会館
4.9/福島/郡山市民文化センター
4.13/北海道/北見市民会館
4.14/北海道/釧路市民文化会館
4.16/北海道/帯広市民会館
4.18/北海道/苫小牧市民文化ホール
4.23/東京/東京ベイNKホール
4.24/東京/東京ベイNKホール
4.29/沖縄/沖縄コンベンションセンター
4.30/沖縄/沖縄コンベンションセンター

B'z Live Tour History 89 to 96

B'z LIVE-GYM Pleasure '92 "TIME"

1992年7月～8月　全12公演

92年に催された「TIME」ツアーで最も話題を集めたのは、ステージ上に"スター・フィッシュ"と呼ばれた星型の巨大ムービング・トラスが登場したことだろう。演出家の市川訓由がL.A.の制作スタッフに特注して作り上げたその巨大トラスは、アリーナクラスのホールに向かうB'zのイメージを象徴する存在として、会場に足を運んだオーディエンスを驚がくさせた。特に様々に形を変えて可動するトラスを従え、「BLOWIN'」や「TIME」を演奏するB'zの二人の姿は圧倒的な存在感を放った。

このツアーでは中盤部に彼らにとって思い出深いカバー曲を披露したり、女性コーラス2名を参加させたりと様々な試みがなされている。また、この時披露された「Stay To-night～ハートも濡れるナンバー～」のアレンジバージョンは、後に「SLAVE TO THE NIGHT」としてアルバム「The 7th Blues」に収録されることになる。

そして、このツアーからより肉体的なライブパフォーマンスを追求し始めた二人は服装のスタイルも今までのジャケット・パンツ・スタイルからスポーティー&ラフなスタイルに移行。縦横無尽にステージを駆け抜ける現在のスタイルの基礎を確立。ステージ上の全角度からB'zのライブを体験できるという試みも行われ、常に新しいチャレンジがなされるのがPleasureシリーズならではの楽しみとなっていく。

B'z LIVE-GYM '93 "RUN"

1993年1月～6月　全49公演

6thアルバム「RUN」をメインとしたアルバムツアー。よりサウンドにハードさを追求したアルバム「RUN」を彷彿（ほうふつ）させるワイルドな演奏やステージパフォーマンスが彼らの生身の姿をさらけだし、よりロック的色彩を強めた「RUN」や「ZERO」といった楽曲がこの時期以後の定番となっていく。

また、このころから同じ会場で2日間ライブが続く場合の日替わりメニューが登場。このツアーでは「Wonderful Opportunity」と「恋心（KOI-GOKORO）」、「紅い陽炎」と「月光」のコンビがそれぞれ日替わりで演奏された。「NATIVE DANCE」での稲葉浩志の独特なアクションも注目を集めた。このツアーでも途中でシングル「愛のままにわがままに僕は君だけを傷つけない」や「裸足の女神」がリリースされ、すぐさまレパートリーに取り入れられている。

会場の規模も国立代々木競技場3日間や大阪城ホール3日間というように1万人以上のキャパシティーを誇る会場を複数日開催、即日ソールドアウトさせる実力を見せ、B'zのLIVE-GYMのカリスマ性を拡大させていく。

そして、「RUN」ツアーを6月30日に無事終えたB'zは、いよいよ前人未到の単独5万人2日間野外イベント「JAP THE RIPPER」へと向かっていく。

B'z LIVE-GYM Pleasure '93 "JAP THE RIPPER"

1993年7月31日、8月1日　全2公演

静岡県浜名湖渚園で行われたB'z初の野外イベントであり、彼らにとっても1カ所では最大級の動員記録を誇るLIVE-GYM「JAP THE RIPPER」。記録的に雨が多かったその夏にあって、奇跡的に2日間とも快晴の下で両日5万人計10万人を集めたこのイベントは、その規模といい、内容といいJロック史上に残る歴史的イベントと言えるだろう。

全長百メートル以上にも及ぶステージ、開演前から頭上を飛行船が旋回し、DJが会場をわかせ、巨大なトラスやクレーンが設置された中、何百人にも及ぶスタッフが、B'zのためだけにステージを組む姿は壮観。またB'zのライブを体験するためだけに集まった5万人というオーディエンスの数は想像を絶する規模。

そして、この時、B'zはオープニングに全くの新曲「JAP THE RIPPER」を演奏。「NATIVE DANCE」では稲葉は30メートルの高さのクレーンに乗り込み、「『快楽の部屋』」でブラス隊が登場、「HOT FASHION－流行過多－」で松本のギターは爆発し、「裸足の女神」で巨大な女神像の頭部が出現した。アンプラグドの「LADY NAVIGATION」が初めて披露されたのもこのLIVE-GYMだった。

スモーク、大量のライティング、巨大スクリーン、音響装置、花火、そして夕暮れから夜に向かう劇的な自然の風景の変化etc…。野外イベントに備わるあらゆる要素がこのLIVE-GYMには凝縮されていた。そして、これを機に、B'zはJロックシーンに誇る孤高の存在に昇り詰めていく。

92 B'z LIVE-GYM Pleasure '92 "TIME"

7.18/神奈川/横浜アリーナ
7.19/神奈川/横浜アリーナ
7.25/大阪/大阪城ホール
7.26/大阪/大阪城ホール
8.4/愛知/名古屋レインボーホール
8.5/愛知/名古屋レインボーホール
8.11/愛知/名古屋レインボーホール
8.12/愛知/名古屋レインボーホール
8.19/神奈川/横浜アリーナ
8.20/神奈川/横浜アリーナ
8.27/大阪/大阪城ホール
8.28/大阪/大阪城ホール

93 B'z LIVE-GYM '93 "RUN"

1.30/埼玉/浦和市文化センター
1.31/埼玉/浦和市文化センター
2.4/大阪/大阪フェスティバルホール
2.5/大阪/大阪フェスティバルホール
2.9/愛知/名古屋センチュリーホール
2.10/愛知/名古屋センチュリーホール
2.15/広島/広島厚生年金会館
2.16/広島/広島厚生年金会館
2.18/福岡/福岡サンパレス
2.19/福岡/福岡サンパレス
3.6/東京/中野サンプラザ
3.7/東京/中野サンプラザ
3.16/埼玉/大宮ソニックシティ
3.17/埼玉/大宮ソニックシティ
3.22/新潟/新潟県民会館
3.23/新潟/新潟県民会館
3.25/石川/石川厚生年金会館
3.26/石川/石川厚生年金会館
4.3/愛媛/愛媛県県民文化会館
4.4/愛媛/愛媛県県民文化会館
4.6/香川/香川県県民ホール
4.7/香川/香川県県民ホール
4.15/青森/青森市文化会館
4.16/青森/青森市文化会館
4.22/北海道/札幌厚生年金会館
4.23/北海道/札幌厚生年金会館
4.26/岡山/倉敷市民会館
4.27/岡山/倉敷市民会館
5.1/長野/長野県県民文化会館
5.2/長野/長野県県民文化会館
5.7/北海道/札幌厚生年金会館
5.8/北海道/札幌厚生年金会館
5.11/宮城/仙台サンプラザ
5.12/宮城/仙台サンプラザ
5.20/沖縄/沖縄コンベンションセンター
5.21/沖縄/沖縄コンベンションセンター
5.27/福岡/福岡サンパレス
5.28/福岡/福岡サンパレス
5.30/鹿児島/鹿児島市民文化第一ホール
5.31/鹿児島/鹿児島市民文化第一ホール
6.8/愛知/名古屋レインボーホール
6.10/愛知/名古屋レインボーホール
6.11/愛知/名古屋レインボーホール
6.15/東京/国立代々木競技場第一体育館
6.17/東京/国立代々木競技場第一体育館
6.18/東京/国立代々木競技場第一体育館
6.28/大阪/大阪城ホール
6.29/大阪/大阪城ホール
6.30/大阪/大阪城ホール

B'z LIVE-GYM Pleasure '93 "JAP THE RIPPER"

7.31/静岡/渚園
8.1/静岡/渚園

94 B'z LIVE-GYM '94 "THE 9th BLUES" part 1

2.9/埼玉/川口リリアホール
2.10/埼玉/川口リリアホール
2.14/岡山/倉敷市民会館
2.15/岡山/倉敷市民会館
2.17/島根/島根県民会館
2.18/鳥取/鳥取県立県民文化会館
2.22/兵庫/神戸国際会館
2.23/兵庫/神戸国際会館
2.25/和歌山/和歌山県民文化会館
3.2/愛知/名古屋センチュリーホール
3.3/愛知/名古屋センチュリーホール
3.9/千葉/市川市文化会館
3.10/千葉/市川市文化会館
3.15/三重/四日市市文化会館
3.17/京都/京都会館第一ホール
3.18/京都/京都会館第一ホール
3.24/新潟/新潟県民会館
3.25/新潟/新潟県民会館
3.27/群馬/群馬県民会館
3.29/長野/長野県県民文化会館
3.30/長野/長野県県民文化会館
4.5/徳島/アスティとくしま
4.7/高知/高知県民文化ホール
4.8/高知/高知県民文化ホール
4.12/熊本/熊本市民会館
4.13/長崎/長崎公会堂
4.15/大分/大分文化会館
4.16/福岡/九州厚生年金会館
4.21/神奈川/神奈川県立県民ホール
4.22/神奈川/神奈川県立県民ホール
4.27/茨城/茨城県立県民文化センター
4.28/栃木/宇都宮市文化会館
4.30/山梨/山梨県民文化ホール
5.6/北海道/釧路市民文化会館
5.7/北海道/帯広市民文化ホール
5.9/北海道/北海道厚生年金会館
5.10/北海道/北海道厚生年金会館
5.14/山形/山形総合スポーツセンター
5.15/福島/郡山市民文化センター
5.17/秋田/秋田県民会館
5.18/岩手/岩手県民会館
5.26/福岡/福岡国際センター

TEXT by SAIDA SAI

B'z LIVE-GYM '94 "THE 9th BLUES"

1994年2月～12月　全87公演

記録的な動員数を誇った野外イベントから半年、次にB'zが提示したライブのスタイルは足掛け1年にも及ぶロング・ライブツアーだった。海外のアーティストでは1～2年のロングタームでワールドツアーを続けるアーティストもいるが、Jロックアーティストで1年をライブ活動だけに専念して行うアーティストはまれだ。

そして、この時期彼らが作り上げたアルバムはB'z初の2枚組大作、7枚目のオリジナル・フルアルバムとなった「The 7th Blues」。ツアータイトルは9番目のツアーである『THE 9th BLUES』。ブルースという響きに込められた彼らの音楽的原点に立ち返る姿勢とストイックな信念は、余計な虚飾を一切そぎ落としたステージングや演出にも現れ、この時のツアーはまさにB'zの存在を聴かせ観せるためだけにあるようなLIVE-GYMとなった。『part 1』と『part 2』に分けて行われたツアーは多少の選曲の変化はあったが基本的には「The 7th Blues」というアルバムのエッセンスを貫き、どんなギミックや会場の大きさも彼らにとっては手段であって目的にはなり得ないということを示した。このツアーを通して彼らは何物にも左右されない確固たる"余裕"と"自信"を獲得していったに違いない。

B'z LIVE-GYM Pleasure '95 "BUZZ!!"

1995年7月～8月　全12公演

ほとばしる汗が快感を呼び寄せるようにB'zのPleasureシリーズもいつしかサマーシーズンに行われるのが通例となっていった。4回目のPleasureとなる『Pleasure '95 "BUZZ!!"』は夏の野外球場ツアー。8回目のツアーとハチのごろを合わせて蜂の羽音である"BUZZ"をツアータイトルに持ってきたB'z。そんな遊び心とは裏腹に、この時のLIVE-GYMの選曲は現在のB'zのベストそのもの。オープニングの「BLOWIN'」に始まり、時の流れと共に歌詞の内容も変わった「Pleasure '95」、久しぶりに振り付けが復活した「恋心（KOI-GOKORO）」、稲葉がギターを抱える姿もおなじみになった「EASY COME, EASY GO!」、そして定番「JAP THE RIPPER」「ZERO」、夏を意識した「太陽のKomachi Angel」「裸足の女神」などなど…。もちろん大ヒットした新曲「ねがい」「love me, I love you」なども惜しみなく披露、新旧取り混ぜてのゴージャスな内容は、B'zが多くの曲のヒットメーカーであることを証明した。また、派手な演出も復活し、このツアーのために作られた「LOVE PHANTOM」でのシアトリカルかつ目を奪うダイビングシーンは圧巻。オーディエンスをほんろうし、巻き込み、同化させるB'zのLIVE-GYMが一度見たら病みつきになってしまうことを納得させる内容だった。

B'z LIVE-GYM '96 "Spirit LOOSE"

1996年3月～7月　全44公演

"B'zは二人である"という原点に立ち返り制作された8 thアルバム『LOOSE』。様々なエッセンスに彩られ、瞬く間にミリオンセラーを記録したアルバムリリースから4カ月のインターバルをおいて今回のツアーは開始された。

このツアーはアルバムツアーであると同時に彼らのスピリットが封じ込められている。だから、どんな事が起ころうが、何をしようが、何が光ろうがB'zのLIVE-GYMも基本はB'zの二人なのだ、という簡単で明白な事実が存在した。

オープニングに映し出された、オールL.A.ロケ、ハリウッドの撮影チームを従えて制作されたオリジナル・ムービーのゴージャスな演出もB'zなら、1曲目に全編英語詞の新曲である「Real Thing Shakes」をぶつけてくるのもB'z。そして「MOTEL」で彼らのルーツを再び呼び寄せ、「BIG」でオーディエンスとフランクな関係を作り出し、「BLOWIN'」では再びあっと目を奪われるムービング・トラスを出現させ、後は一気にハードなナンバーをたたみ掛け疾走し、2時間のライブ空間をあっという間に感動と熱気で包み込んだ。このLIVE-GYMは、まさに超一級のエンターテイメントであり、芸術だった。

94

5.27/福岡/福岡国際センター
5.31/沖縄/沖縄コンベンションセンター
6.1/沖縄/沖縄コンベンションセンター
6.9/愛知/名古屋レインボーホール
6.10/愛知/名古屋レインボーホール
6.16/東京/日本武道館
6.17/東京/日本武道館
6.21/大阪/大阪城ホール
6.22/大阪/大阪城ホール
6.25/広島/広島サンプラザ
6.26/広島/広島サンプラザ
7.1/神奈川/横浜アリーナ
7.2/神奈川/横浜アリーナ

B'z LIVE-GYM '94 "THE 9th BLUES" part 2

9.28/青森/青森市文化会館
9.29/青森/青森市文化会館
10.4/愛媛/愛媛県民文化会館
10.5/愛媛/愛媛県民文化会館
10.7/香川/香川県民ホール
10.8/香川/香川県民ホール
10.12/宮崎/宮崎市民会館
10.14/鹿児島/鹿児島市民文化ホール
10.15/鹿児島/鹿児島市民文化ホール
10.20/埼玉/大宮ソニックシティ
10.21/埼玉/大宮ソニックシティ
10.28/北海道/北見市民会館
10.29/北海道/旭川市民文化会館
10.31/北海道/函館市民会館
11.8/福井/福井フェニクスプラザ
11.10/石川/石川厚生年金会館
11.11/石川/石川厚生年金会館
11.17/静岡/静岡市民文化会館
11.18/静岡/静岡市民文化会館
11.22/神奈川/横浜アリーナ
11.23/神奈川/横浜アリーナ
11.28/愛知/名古屋レインボーホール
11.29/愛知/名古屋レインボーホール
12.6/大阪/大阪城ホール
12.7/大阪/大阪城ホール
12.10/東京/国立代々木競技場第一体育館
12.11/東京/国立代々木競技場第一体育館
12.13/東京/国立代々木競技場第一体育館
12.19/宮城/仙台市市民体育館
12.20/宮城/仙台市市民体育館
12.23/北海道/月寒グリーンドーム
12.24/北海道/月寒グリーンドーム

95

B'z LIVE-GYM Pleasure '95"BUZZ!!"

7.7/山形/山形市総合スポーツセンター
7.8/山形/山形市総合スポーツセンター
7.15/大阪/舞洲スポーツアイランド
7.16/大阪/舞洲スポーツアイランド
7.22/神奈川/横浜スタジアム
7.23/神奈川/横浜スタジアム
7.29/愛知/ナゴヤ球場
7.30/愛知/ナゴヤ球場
8.13/福岡/福岡ドーム
8.19/北海道/真駒内オープンスタジアム
8.24/千葉/千葉マリンスタジアム
8.25/千葉/千葉マリンスタジアム

96

B'z LIVE-GYM '96 "Spirit LOOSE"

3.15/群馬/グリーンドーム前橋
3.16/群馬/グリーンドーム前橋
3.20/静岡/浜松アリーナ
3.21/静岡/浜松アリーナ
3.25/広島/広島グリーンアリーナ
3.26/広島/広島グリーンアリーナ
3.29/兵庫/神戸ワールド記念ホール
3.30/兵庫/神戸ワールド記念ホール
4.6/徳島/アスティとくしま
4.7/徳島/アスティとくしま
4.9/愛媛/愛媛県民文化会館
4.10/愛媛/愛媛県民文化会館
4.17/神奈川/横浜アリーナ
4.18/神奈川/横浜アリーナ
4.23/新潟/新潟市産業振興センター
4.24/新潟/新潟市産業振興センター
4.27/石川/石川県産業展示館
4.28/石川/石川県産業展示館
5.2/愛知/名古屋レインボーホール
5.3/愛知/名古屋レインボーホール
5.8/宮城/仙台市体育館
5.9/宮城/仙台市体育館
5.11/岩手/盛岡アイスアリーナ
5.12/岩手/盛岡アイスアリーナ
5.18/東京/国立代々木競技場第一体育館
5.19/東京/国立代々木競技場第一体育館
5.21/東京/国立代々木競技場第一体育館
5.22/東京/国立代々木競技場第一体育館
5.28/大阪/大阪城ホール
5.29/大阪/大阪城ホール
6.1/北海道/真駒内アイスアリーナ
6.2/北海道/真駒内アイスアリーナ
6.11/大阪/大阪城ホール
6.12/大阪/大阪城ホール
6.15/愛知/名古屋レインボーホール
6.16/愛知/名古屋レインボーホール
6.20/東京/日本武道館
6.21/東京/日本武道館
6.25/福岡/マリンメッセ福岡
6.26/福岡/マリンメッセ福岡
6.29/鹿児島/鹿児島アリーナ
6.30/鹿児島/鹿児島アリーナ
7.5/沖縄/沖縄コンベンションセンター
7.6/沖縄/沖縄コンベンションセンター

黒夢
KUROYUME
are kiyoharu on vocal / hitoki on bass

FAKE STAR'S CIRCUIT

June 15th 1996 at Akasaka BLITZ

PHOTOGRAPHED BY SHIN WATANABE

DAY THIS DAY IS BOYS ONLY

FAKE
STAR'S
CIRCUIT
DAY
June 15th 1996

会場の隅々にまで充満した熱気が物語る黒夢とオーディエンスとの熱い絆

「これからも僕らは非常に憎まれっ子で行くので、何かあったら助けてね(笑)。…これからずっと黒夢をやっていく上で、今日初めて男の前だけでライブをやったことは忘れません。本当に、またやろうな。最後です――」。

ドラムのカウントが入り、ウエット感のあるムーディーなイントロが場内に全体に広がる。ラストナンバーは「BEAMS」。大ヒットしたナンバーはたちまちオーディエンスの声を誘い、大合唱を巻き起こす。何度も「サンキュー」と愛情を込めて叫ぶ清春。それに汗だくになりながらも応え、腹の底から声を張り上げ歌うオーディエンス。激しくぶつかり合っていたパワーとパワーが融合し、最後に強大なエナジーを爆発させた。そして両者がその中で、同じ瞬間を、同じ感触を、同じ興奮を、同じロックンロールを全身で感じ合っている。この連帯感がダサイ言い方をすれば"男同士の絆(きずな)"というものなのだろうが、そんな表現さえカッコ良く思えてしまうのが現在の黒夢の許容範囲であり、彼らを支えるボーイズファンの熱意なのだ。

BOYS DAY…男性限定ライブ。しかし、会場の周りにはGIRLSの姿もチラホラ。ツアーグッズを買い求めに来ただけなのか、自分たちには参加資格がないライブを会場からこぼれる音で我慢しようとしているのかは分からないが、とにかく今日は女子禁制ライブで彼女たちはフロアへは入れない。と言うことは、今日のライブにはミーハーチックな黄色い歓声や、非常識なラブコールなど発生しないのだなと確信しながら僕は、フロアへの重い扉を開けた。楽器関係の他にはベースアンプとキーボードの前にアルミ製のゴミ箱があるだけで、バックの壁もレンガ模様が描かれているだけというほとんど飾り気のない無人のステージが威圧感もなく静けさを保っている。開演の時を待つ野郎たちもまた、緊張感を押し殺しながら平静を装っているものの、場内には"嵐の前の静けさ"というべき緊迫した空気が漂っていた。

予定時刻を15分ほど過ぎてBGMがSEに変わると、保たれていた静粛が一瞬にして破られ、「清春ー」「人時ー」と怒鳴るような叫び声がフロアのあちらこちらから噴き上がった。さらにメンバーがステージに現れ、最後にタバコを手に爆発したような青い髪の清春が登場すると、歓喜と驚嘆が合わさった歓声が一段と大きく場内に響き渡る。オープニングナンバーは「FAKE STAR」。ノドを破って出てきたようなすさまじい声で清春はボーカルをとり、人時は髪を振り乱しながら存在感ある音をはじき出し、アグレッシブなサウンドで、前方から迫ってくる図太い歓声の音圧と熱波を次々と撃破粉砕する。目の前で気合いの入った野郎達が暴れ狂っている光景は、きっと二人のテンションをどんどんエスカレートさせていることだろう。客席から返って来る巨大なパワーとせめぎ合うようにプレイするメンバーからも気迫が感じられ、初っぱなからエネルギッシュでそう快なライブが繰り広げられていく。

中盤で静かなナンバーを聴かせ、フロアをいったん落ち着かせた後、そうる透によるド迫力のドラムソロを迎える。複雑なリズムでも難なくたたきだし、タップダンサーのステップのようにツーバスを軽快に操り、さらにはオーディエンスのリアクションが追いつかなくなるほどのハイパー三三七拍子を披露。そして、人時が加勢し「Noise Low³」を聴かせたあと、ディストーションを効かせたベースとパワフルなドラムの激しいバトルが繰り広げられた。

「いやーいいじゃん。黒夢もニセモノだけど、お前らもニセモノだ」とうれしそうに語る清春。そして、そんな愛しき野郎達へ向けての、パンキッシュなナンバーの攻撃が開始される。懐かしいナンバー「十字架との戯れ」の過激なサウンドは、現在の黒夢がプレイしても全く違和感を感じさせず、インディーズ時代から繰り返された彼らの変化が、過去を捨て去るのではなく、新しいものをどん欲に吸収して存在感や可能性を増幅していったものであることを見せつけ、本編ラストの「sick」が限界を越えてヒートアップするオーディエンスを完全にトランス状態へと導いた。

清春が「サンクス」と残しステージから去り、他のメンバーの姿も消えると、即座に沸き起こったアンコールの声。少し長めのインターバルの間にステージ上ではスタッフがせわしなく機材のセットを行っている。そして再びステージに現れたメンバーに加えて、ゲストプレイヤーに最新アルバム『FAKE STAR』のレコーディングにも参加した原田喧太を迎えるのだった。激しいナンバーをプレイする彼のステージングもかなり暴力的で、暴れる野郎達のテンションをさらにあおり立てた。二度目のアンコールでは黒夢のポップチューンとは、また違った盛りパンキッシュなナンバーを連発し、上がりを見せ、図太い声で一緒になって歌う声が場内の壁を震わせる。清春に「今日ほどドキドキしたことはなかった」と言わせたほど、オーディエンスが返すエナジーの威力はすさまじく、当然のことながらMCを遮るような奇声もなく、彼らが黒夢のサウンドを浴びるためにライブに参加していることを証明している。上半身ハダカになってノリまくっている野郎も、アクションは地味ながらも一生懸命に歌っている男の子も…もちろんステージ上のメンバーもすべてが一体となってライブを楽しんでいたことを、息苦しくなるほど会場の隅々にまで充満し、二階席の床までも湿らせていた熱気が物語っていた。

［文・毛刈松佳　撮影・渡部 伸］

PLAYLIST

1	FAKE STAR
2	GOSSIP
3	Walkin' on the edge
4	ピストル
5	カマキリ
6	意志薄弱
7	REASON OF MYSELF
8	HYSTERIA'S -DRUM SOLO - Noise Low³ - BASS SOLO
9	「H・L・M」 is ORIGINAL
10	自閉症
11	S.A.D
12	十字架との戯れ
13	棘
14	sick
encore	
1	BARTER
2	SEX SYMBOL
3	S.O.S
encore	
4	Miss MOONLIGHT
5	SEE YOU
encore	
6	BEAMS

FAKE STAR'S CIRCUIT

June 16th 1996 at Akasaka BLITZ

DAY THIS DAY IS GIRLS ONLY

PHOTOGRAPHED BY MACHIKO NISHIHARA

FAKE
STAR'S
CIRCUIT
♀
DAY
June 16th 1996

女性心理を的確にとらえた “ガールズ・デイだからこそ”のメニューを披露

「昨日ね、ボーイズ・オンリーでやったんだけど、これがすごく良くてね…。もう、ずっと忘れられないようなライブをしたなっていう感じがして。今日、あんまりみんなが騒がないようだったら、ボーイズ・オンリーはあってもガールズ・オンリーはナシになるらしいので…」。アグレッシブかつダンサブルな「ピストル」が披露され、観客の歓喜に満ちた声が沸き起こる中、ライブ後半へと向かうMCで清春がこんな皮肉めいたあおりの言葉を口にすると、集まった女性ファンの「エーッ!」という半狂乱の悲痛な叫びが場内を支配する。彼の言葉で男性に対するライバル意識がメラメラと燃え始めたのか、清春の作戦にまんまと引っ掛かったのか、官能的とも言えるセクシャルでハードなナンバー「Cool Girl」「SEX SYMBOL」で、彼女たちは叫びと化した歌声で、エスカレートするリアクションをステージに返し、両者はようやくヒート寸前の一体感に包まれていった。

レンガ造りの壁の絵がステージの背景を覆い、ゴミ箱やドラム缶が置かれただけのシンプルすぎるほどシンプルなステージは、さながらロンドン辺りのダウンタウンの裏通りといったところ。

今夜は女性だけに届けられるライブ…。”女性“に限定したライブだけに、ノリ的に若干の不安がないわけではないが、それより彼らが女性相手だから”どの曲をどう聴かせてくれるのか“に非常に興味がわく。

客電が落ちた途端、観客の気の遠くなるような歓声があふれ出した。それは人時とサポートメンバー、少し後にサングラスをかけた清春がリラックスした様子でステージに現れると一層膨れ上がる。ライブのスタートを告げるSEは、その存在さえかき消されてしまったようだ。アルバム『FAKE STAR』のタイトルチューン「FAKE STAR」が荒々しく吐き出されると、観客はその音と共に激しく体を揺らし、まるで津波が押し寄せて来たような盛り上がり。さっきまでの歓声が歌声に変わり勢いよく聴こえて来ると、さすがにこちらまで熱くなってくる。間髪入れずにドライブ感あふれる「GOSSIP」で人時のベースが力強くはじかれると、どっと上がる人時コール。初っぱなから興奮気味の会場はすでに熱気ムンムンだ。

「ヨー、ヨー、ヨー。今日は…、あのー、女!女だけ……、あー……」。鳴りやまない歓声を前に清春がしゃべりにくそうに口を開き、何か言いたげにそのタイミングを待っている様子だが、なかなか治まりそうもない。「黒夢でーす」とだけ言って、「COMICAL」へ。スカのリズムがポップにはじけるサウンドで気持ち良さそうに踊っている観客、しかしなぜかアコースティックギターの切ないアルペジオが流れる間奏の部分でムードを壊す意味のない叫び声を巻き起こす。私の不安は早くも的中してしまったようだ。

「NITE&DAY」「Walkin' on the edge」と軽快なポップナンバーが放たれ、体に気持ちいいほてりが出てきたころ、それまでの派手な照明がステージ下手上部からの清春を照らすスポットだけになり、会場には一転して静寂が漂う。しっとりと流れるようなサウンドが会場を包む中、『FAKE STAR』で異色のスタイルを打ち出したスローバラード「夢」。清春の悩ましげな歌声が切なく響き、観客はその世界に静かに酔いしれ聴き入る。追い打ちをかけるように優しいメロディーが耳をくすぐる「KISS」。愛しいほど情感の込もった清春の真っ直ぐな歌声は、きっとここに集まったすべての女性の心をとりこにしただろう。観客は身動き一つせず、ただ立ち尽くしている。そんな陶酔し切った体に「REASON OF MYSELF」のレゲエのリズムが心地良さを与え、ミドルテンポのポップナンバー「眠れない日に見る時計」へと続き、「Happy Birthday」で軽快にはち切れた。観客は流れるように静から動へと移り変わっていくナンバーに自然に反応し楽しむ。ドラマチックな展開が好きな女性心理を面白いほど的確にとらえたガールズ・デイだからこその曲順にしばし脱帽。

ステージと客席が絶頂を迎えた「SEX SYMBOL」の後は、上昇し切った熱い空気を優しくクールダウンさせるようにブルーとグリーンのライトがステージを照らし、再びポップチューン「優しい悲劇」「Love Song」、そして本編ラストは客席にマイクを向ける清春に応えて起こった大合唱と、ひざまずき上半身を屈めて熱唱する清春の感動的な場面が登場する「SEE YOU」で幕を閉じた。

”ガールズ・デイだから“というポイントがしっかり押さえられたメニューであることを痛感させられるライブだった。しかも『FAKE STAR』で聴かせた多彩な楽曲がその流れの中で生き生きと存在をアピールしていたのである。ただ、会場に集まった観客すべてがそんな黒夢の思いを理解していたのだろうかという疑問は残った。ライブ後半のMCで清春の素直な気持ちとして出てきた「昨日のボーイズ・デイはすごく良くてね」の言葉がそれを物語っているように思う。ボーイズ・デイにはきっとステージと客席が一つになる数々の瞬間があったのだ。ガールズ・デイにその場面がなかったわけではないが、曲中に発せられる意味のない歓声やMCでのちぐはぐな反応はやはりお互いの気持ちがかみ合っていない証拠。しかもそれによってステージ側のテンションが下がってしまうことは否めない。

ライブは様々なシーンで想像もつかない感動を味わえる場所。それはファンである観客がライブに挑むアーティストと同じ気持ちにならないと生まれないものなのだ。

［文・村田圭子　撮影・西原麻知子］

1	FAKE STAR
2	GOSSIP
3	COMICAL
4	NITE&DAY
5	Walkin' on the edge
6	夢
7	KISS
8	REASON OF MYSELF
9	眠れない日に見る時計
10	Happy Birthday
11	HYSTERIA'S -Bass Solo-Noise Low³- ets
12	ピストル
13	Cool Girl
14	SEX SYMBOL
15	優しい悲劇
16	Love Song
17	SEE YOU
encore	
1	「H・L・M」is ORIGINAL
2	EITHER SIDE
3	カマキリ
encore	
4	S.O.S
5	sick
encore	
6	Miss MOONLIGHT
7	BEAMS

X CROSS TALKING

SHERBET KENICHI ASAI

インタビュー・山田純子
interviewed by JUNKO YAMADA

撮影・渡部 伸
photographed by SHIN WATANABE

ブランキー・ジェット・シティのボーカリスト&ギタリストである浅井健一のソロプロジェクト、シャーベット。完成したアルバム『セキララ』の温かく力強い音色と歌声には、彼の素直な感情が染みわたっていて、言葉には出来ない、説明出来ない何かを聴く者の心に伝えてくる。

そんな音楽を生み出す彼が、困りながら、笑いながら、怒りながら話すストレートな言葉の一つ一つからは、「なぜ説明できないのか」その理由が伝わってくるはずだ。だから音楽って素晴らしい…ってことを、このインタビューから読者が感じてくれたらと思う。

音楽やっとる人で、心のきれいな人だったらだれでもいいんだよね

●シャーベットのアルバム『セキララ』を聴かせてもらったんですけど、もうすっごく良かったんですよね。

浅井(以下A):ありがとう。やった〜。

●とにかく気持ちに来るって感じで、音楽を聴くのに脳ミソはいらないってことを改めて感じさせられたんですよ。それと、とにかく聴いてて飽きないんですよね。

A:へえ〜、それはめちゃめちゃうれしいなあ。

●だからたくさんの人に聴いてもらいたいなあって。

A:うん。

●シャーベットはかわいくて甘い名前なんですけど、この名前には何か由来が?

A:分からないけど、自然にそうなった。

●今回は、ピアノやパーカッションという編成がすごく面白いんですが、最初はドラムやベースもいたんですか。

A:ドラムとベースも探してたんだけど、今回はなしでいこうと思ってさ。

●じゃあ、どういう流れでこの編成に?

A:友達の友達が福士(久美子)さんで、その彼氏が水政(創史郎)くんで。スティーブ(・エトウ)さんをステージで見て、ほんで決めた。

●この形になったのは、浅井さんの歌が伝わるのに一番ベストな形だったからかなと思ってたんですけど。

A:な〜んも考えとらんよ、そんなもんは。福士さんがたまたまピアノやってたからさ。例えば福士さんがウッドベースやっとりゃあ、ウッドベースと歌があったし。

●楽器じゃなくて人に引かれたという。

A:うん。楽器やっとる人で、心のきれいな人だったらだれでもいいんだよね。で、福士さんはピアノやってたから。楽器は何でも良かった。音楽が出来りゃ。

●この編成にして、刺激を受けたことはありますか。

A:忘れたなあ。言えるのは、ハートがありゃ何でもいいやって思っててさ。それが今回のアルバムだと思う。いつもハートしかないんだけど、今回音楽はやっぱりハートがあるかないかによって全然違うってことにホント気付いてさ。それだけ、今回のアルバムは。そう思って作った。

●例えば今回はブランキーの激しい音とは違う、ピアノやバイオリンというすごく繊細な音に歌やギターを乗せたんですけど、音楽だから一緒って感じですね。

A:うん、同じ。音楽するのは、同じだと思うよ。

●アルバムはとにかく歌が伝わってくるんですけど、それと同時にギターが作り出してる空気間がすごくいいなあと思ってて。ギタリストがいるシャーベットでも、浅井さんは歌だけに集中しようとは思わなかったわけですよね。浅井さんにとってギターってどういうものなんですか。

A:知らん。…ッハハハハハ、ってインタビューにならんね。

●(笑)ギター弾いてる時はどんな気持ちですか。

A:音色が好きだな。楽器が好きなんじゃないかな。

●ギターと言うよりも。

A:うん、音って目に見えんがねえ。う〜ん、知らん(笑)。

●(笑)浅井さんってピアノとギターで曲を作るんですか。

A:ギターで歌いながら作る。

●あれ? ピアノが弾けるのかなと思ってたんですけど。

A:ちょびっとだけね。

●曲を作ったりはしないんですか。

A:5年がかりの作っとる曲があるんだけど、まだ出来ん(笑)。ピアノの曲。すっげえカッコいいんだけど、まだ出来ん。

●どうしてなんでしょう(笑)。

音楽はハートがあるかないかによって全然違うってことに気付いてさ

A:めちゃくちゃ難しいもん。弾きたいことは決まっとるんだけど、弾けねえんだもん。

●それ楽しみですね。出来そうですか。

A:頑張るわ(笑)。

パリで路上演奏やったらアメ玉入れた人とかおったけどね

●シャーベットの曲って、詞はやさしいこと言ってるけど、曲は激しかったりして、一曲を聴いてると自分の中にいろんな感情がわき出て来て不思議な気持ちになるんですよね。

A:何が好き?

●「水」と「きせき」が特に好きですね。

A:オー・マイ・ガブリエルって書いといて(笑)。

●何ですか、それは(笑)?

A:ハハハハハ。いや、うれしいなと思って。

●「きせき」は特に聴いた後の感じがいいなあって。

A:本当? 「きせき」人気高いね。オー・マイ・ガブリエルってちゃんと書いといてよ(笑)。

●前に京都でインタビューした時にね、今後浅井さんが一番やりたいことは何ですかって聞いたら、「路上で演奏したい」って。

A:パリでやったよ。

●そう、それを聞いてホントに実行してるなあって思ってたんですよ。で、弾き語りって一番シンプルな形と曲じゃないですか。だからその時の魅力がシャーベットにつながったんじゃないかなと思ってたんですけど(笑)。

A:ビンゴ!!

●やったあ〜(笑)。パリはそんなに良かったんですね。街の路上でやったんですか。

A:バスティーユっていう所の地下鉄の通路。

●聴いてくれてる人の反応が肌で分かるって良かったですか。浅井さんのことを全然知らない人ばっかりだったわけでしょ。

A:お金もらえたよ、ちゃんと。一番初めアメ玉入れた人とかおったけどね。

●そうなんですか。

A:初めアメだったもんなあ、あの時。俺の実力はアメなのかなあと…(笑)。

●でもショックじゃないでしょ。

A:うれしかった、すごい。初めだれも入れてくれなくって、「ああ、やっぱ厳しいなあ、世の中は…」とか思いながら弾いとったんだけどさあ。したら、少年がアメをポンとか入れてって、初め気がつかんかったんだけど、「メルシー」とか言ってフッと見たらギターケースの中にあった。まだ取ってあるけどさあ(笑)。

●へえ〜。そういうのうれしいですね。

A:めちゃめちゃうれしかったって。

●じゃあ、そういううれしさとかもシャーベットにつながったんでしょうね。

A:う〜ん、来たっていうことにしとこうかな(笑)。

●やっぱりシンプルな音楽や気持ちに響く音楽っていいなあって思った?

A:うん!

●パリではどういう曲をやったんですか。

A:「ソリ」。

●その時に「ソリ」は出来てたんですね。ブランキーの曲もやったんですか。

A:やらなかったかなあ。他にもいろいろ歌ったよ。適当にジャンジャンジャンジャン弾いとるんだって。即興で。

●でも、やりたいことをすぐやるってすごいですよね。あの時も冗談で言ってるのかなと思ってたんですけど。

A:ジミヘン(ジミ・ヘンドリックス)のライブ中の言葉でさあ、〟どんだけ有名になったりすごい音楽作っても、心はいつまでも路上のギター弾きでいたい〟とかいう言葉があってさ。だいぶ言葉が違うと思うけど、それってすごい感動的なんだよね。「おお〜」とか思って。昔それで心打たれたことがあって。実際やってみようと思ってやってみた。

●やってみてどうでした?

A:何かすごいねえ、やっぱ初め度胸がいる。ギター持ってってさあ、帰ろうかなとか少し思ったもん(笑)。

●日本発つ時から「やるぞ!」って思ってたんでしょ。

A:向こうに恋人がおって、日本人だけど、その子を迎えに行ったんだわ。その時にチャンスだからやろうと思った。で、ギター持ってった。

●そこに偶然出くわしてみたいですね(笑)。

A:日本人の女の子が通って、一回素通りしたんだけど、Uターンして帰ってきてお金入れていってくれたね。「ありがとう」って日本語で言ったけど(笑)、そのままどっか行っちゃった。そんなみんな曲に聴き入るって人はいなかったもんね。何かすぅ〜って通っていく時につい

でに入れるって感じ。

●でも、そんな感じだと余計にお金を出そうと思わないとわざわざ出さないですよね。

A:パリの方とかの人はすごくシビアでいいと思わないとお金入れないから、そんだけお金もらえたってことはやっぱり良かったんだよって言われて喜んだけどね。

●次の夢っていうか、何かやってやろうと思ってることはありますか。

A:別にそれは夢じゃないもん。しょっちゅうやらなあかんなあとか思ってる。やらないかんなあって言うか(笑)、楽しいと思うんだね。

説明出来ないんだよね 結局は何一つ

●シャーベットのレコーディングは一発録りだったんですよね。

A:うん。

●それって初めてですか。

A:歌も全部一発録りはね。

●「やって良かった」ってことは何かありました?

A:うん、このやり方が自分は一番好きだっていうのが分かった。

●以前『SKUNK』のレコーディングの時に「デモテープを一発で録ったらすごくいい感じに出来た」って話でしたけど、それを今回生かそうと思ったとか。

A:そうだよ。それまでちょっと忘れてたんだよね。音楽の本当の録音の仕方を。

●浅井さんは、ライブで気持ち良く歌えた時に観客に伝わってると感じるんでしたよね。『セキララ』もすごく伝わってくるアルバムなんで、レコーディングは気持ち良く歌えたんじゃないかと思ってたんですが。

A:うん、気持ち良いのがやっぱりいいテイクだったかな。

●やっぱり歌には気持ちが出るんですよね。

A:そりゃ、そうだ!

●歌ってる時はどんな気持ちですか。

A:気持ち? 何だろ? 分からんなあ。音楽家だでねえ、音楽を説明出来んのだわ。

●音楽の中に入り込んでいくとかよく分からない?

A:何のことだかさっぱり分からん。…正直に言っちゃうとね。この間気付いたんだよね。いろいろ聞かれるけど、いつも困るのは何でかなとか思って。説明出来ないんだよね、結局は何一つ。だから今まで説明したのも全部アテにならんと思う。今まで五年間ぐらいいろんなインタビュー受けたけど。

●う~ん……。でも、それがシャーベットの音だと言われればすごく分かるような…。気持ちでしか分からないものってありますもんね…。

A:だから感じることは言葉に出来ないんじゃないかな。

●うん。……って言いながら質問するんですけど(笑)。いや、分かるんですよ、それってすごく。

A:ハハハハ、いいよお。答えるで、素直に。

●(笑)で、さっきパリで歌ったっていう「ソリ」が、途中でボーカルがかすれて来ていい感じじゃないですか。あれこそ一発録りの効果ですか。

A:一発録りだね、あれ。

●途中で声がかすれてくるでしょ?

A:そうなんだわ。ガラガラで「あっ、まずい。もう今日レコーディング出来んかなあ」とか思ってたんだけど、エンジニアがさあ「何か今のすごくいいと思った」って。

●そう、かすれて来るけど自然なんですよね。

A:うん。で、その後にショウガ食べてさあ。ショウガ食べるとノドが復活するんだわ、俺(笑)。で、レコーディングスタジオで俺がショウガすって(笑)、しょうゆかけて食べて。そしたらノドが復活して、すごいきれいな声で録れたやつがあって。あと3テイクぐらい録ったのかなあ。でもね、何かね、初めに録ったそのノドがかれとるやつの方がね、何かがあったんだよね。だからそれを使った。

●すごく響いてきますよ。きれいにすることなんか機械でいくらでも出来るけど、それっておかしいんだなって私も改めて気付きました。浅井さんはシャーベットをやって感じたことや、気付いたことってあります?

A:何だろうなあ。イキイキと生きようって感じかな。あっ、やっぱりねえ、自分の心に正直に素直にやるっていう風に思ったかな。それが一番だと思った。年上の人の言うことはね、聞かん!!

●年上の人?

自分のハートで生きていかなきゃあかんと思った

A:おじいさんの言うこともたまにはいいこともあるけど、自分の心で進んでいかないかんと思った、やっぱし。

●今まではおじいさんの言うこと聞いてたんですか。

A:おじいさんっていうか、目上の人ね。おじさんとか。音楽に精通した人とかさ。いろんな人がいるじゃん。

●「こうした方がいいよ」とか言ってくれる人ですね。

A:うん。すごくためになることもあるけど、ためにならん部分も多い。

●それが自分に正直にシャーベットをやったことで分かった。

A:うん。自分のハートで生きていかなきゃあかんと思った、やっぱ。じゃないと生きとる意味がないと思った。死んだも同然。

●でも、それを思えたってことは、シャーベットやって本当に良かったですよね。

A:もちろん!……(本誌をめくりながら)本売れてますか。

●ぼちぼちです(笑)。

A:売れるといいねえ。

●ねえ(笑)。浅井さんは読んでくれてます?

A:自分が出た時だけ(笑)。だって俺読まんもん、音楽雑誌。

●音楽雑誌っていうのは、あんまり好きじゃないですか。

A:うん。

●どうしてですか。

A:つまらん。

●音楽を説明してるから?

A:だって音楽がつまらんから、音楽雑誌がおもろいわけないもんね。

●浅井さんは今の日本の音楽ってつまらないなって思う?

A:つまる音楽やってる人もいると思うよ。でもねえ、知らん(笑)。カッコいい音楽やってる人どっかにいるんじゃない? 全然おらんかったりしてね。シーナ&ザ・ロケッツとかは好きだけどね。鮎川さんはカッコいいと思う。昔のルースターズの「ロージー」とかも好きだったね。ロッカーズも好きだったな。昔のスタークラブも好きだった。

●「昔の」って付くのが多いのは悲しいですね。じゃあ、浅井さんはシャーベットを聴いてどんな気持ちになったんですか。私はさっきから言ってるようないろんな気持ちになったんですけど。

A:すごいいい音楽だなあとか思う。

●飽きないでしょ?

A:うん。

●でも、シャーベットのこの良さを説明出来ないのが悔しいんですよね。

A:説明しんでいいよ。

●でも、いろんな人に聴いてもらいたいじゃないですか。

A:説明できんって書いときゃいいんだわ(笑)。

●「説明できんから、聴け!」って(笑)?

A:そう(笑)。

ブランキー・ジェット・シティは すっごいんじゃないかな

●シャーベットは浅井さんにとって新しい挑戦ですか。それとも心の中のものを確認したって感じ?

A:別に何でもない。音楽作ったから、それ録音してみんなに聴いてもらおうと思ってるだけかなあ。

●じゃあ、ソロだからこその良さってありました?

A:俺はソロっていう意識ないけどね、別に。

●じゃあ、ブランキーとは違うシャーベットの良さは?

A:だって、みんないいもん。

●今回シャーベットをやって初めてブランキーを外から見ることが出来たと思うんですけど、ブランキーはどんなバンドでした?

A:何だろ? 知らんとか言ったらイヤかな(笑)?

●ちょっとイヤ(笑)。ブランキーでしかこれは出来ないなあとか、ブランキーでこれやりたいなあっていうのがハッキリしたとかないですか。

A:ブランキーは多分すっごいんじゃないかな。今度外国行くけどさあ、今度の外国のツアーはきっとすごいことになるような気がするなあ。

●レコーディングも早くやりたいでしょ。

A:うん。

●曲とかどんどん出来てるんですか。

A:あるよ、もう40曲ぐらい。

●ソロ活動をするとすぐ解散か?って言われ

ますよね。きっとブランキーのファンの子達も今回ソロ活動が決まった時ビビったと思うんです。そのへんどうですか。

A:解散はしないと思う。何かやっぱりライブやってお客さん見とるとやりたいな、続けたいって気持ちになる。何でか知らんけど。お客さんが好きなんじゃないかな。

●ライブがホント好きなんですね。

A:もちろん好きだよ。ライブが一番好きだもん。レコーディングもおもろいけどね。ホント面白かったあ、今回のレコーディング(笑)。

●今回はプロデューサーじゃないですか。その重みとかってなかったんですか。

A:え〜と、どうしようとか。どっちにしようかなとか。

●どのテイクにするかは、すべて自分で判断して。

A:うん。「やっぱり止めた」とか言って(笑)。それでいろんな人にたくさん迷惑かけたから。やっぱりやろうとかさ。

●ブランキーとは全然雰囲気が違いました?

A:そうだね。一番の司令塔が俺だからさあ、面白かった。

●そういう面白さっていうのは、ブランキーではないんですか。

A:いや、いつも面白いよ、すっごい。ギャグがさえるとね。

●ブランキーのレコーディングって、日によって結構波があったりする?

A:う〜ん、いろいろあったと思うよ。ただ、リズム録りからやっていくから…、何て言うんだろう? (中村)達也とか芸術家だからさ、理屈じゃないんだよね。でも一個一個作っていくレコーディングやると、達也がすごいかわいそうで。そういう作り込んで行くタイプのドラマーじゃないもんだで。俺はどっちでも大丈夫なんだけど。だから今度から自分がプロデュースする時は、達也の芸術面をもっとフィーチャー出来るようなやり方でやろうかなと思って。

何にも考えずに音聴いて感じたままにやる
それがいいと思うんだよね

●中村さんのドラムは一発で表現できる芸術って感じなんですね。

A:何か曲の中に決めごととかさあ、作り始めるとダメなような気がする。自分でも。もう何も考えずに音聴いて感じたままにやる、それがいいと思うんだよね。だから今度秋に、もしブランキーのレコーディングしたら、すごい素晴らしいレコードが出来るか、全然すごくないかどっちかだわ(笑)。

●ブランキーでもぜひ一発録りはやってほしいですけどね。

A:それだけを声を大にして言いたくないけどさ。いっぺん自分ら流にレコーディングしてみます。今度やるとしたら。

●やってください。楽しみ!…って言ってもプレッシャーにはなりませんよね(笑)。

A:ならないよ……と思う(笑)。

X CROSS TALKING

JOE BROWN
TOSHIYUKI TERUI

インタビュー・西原 朗
interviewed by AKIRA NISHIHARA

撮影・渡部 伸
photographed by SHIN WATANABE

初めてのプロデュース、作詞で自らのフィールドを広げ、ジョー・ブラウンというソロプロジェクトの作品『ido-est』を完成させたブランキー・ジェット・シティのベーシスト照井利幸。ふだんブランキーという強烈なバンドの中で音楽をクリエイトしている彼だけに、様々な点において満足いかないところもあったようだが、試行錯誤を繰り返しながら、改めて自分自身を見つめ直した。ジョー・ブラウンのサウンドからは、そんな彼の音楽に対する愛情や思いが、突き刺さるように伝わってくる。

どっちかっていうと俺の場合 モノを作る人間の方が近いからさ

●これはいろんな雑誌で聞かれてると思うんですけど、今回どうしてソロをやることになったんでしょう？　それが決まる以前から照井さん自身の中にはそういう気持ちがあったんじゃないのかなという気も、僕は勝手にしてるんですけど。

照井（以下T）：そういうのはなかったと思う。ただ「ソロをやろうか」っていう話が出たら、別にためらいもなく「面白そうだなあ」とかさ。やったことがないことだから、興味深いなって。

●「ソロをやる」って話を聞いた時、照井さん自身はその瞬間に「ああ、面白いよ」っていう反応だった？

T：ベンジー（浅井健一）が「ソロで一枚出そうと思う。やりたい」っていうようなことを言ったから…別に言ったからってこともないけど（笑）、やってる間何もしてないって無理だから。そういう時間があるんだったら、俺もやろうかなっていう。そんな重い話じゃなかった（笑）。

●重くない（笑）。

T：どうしてもソロがやりたいとかさ、そういうんじゃなかった。

●まず、ジョー・ブラウンっていう名前ですよね。これはナゾっていうか、ちょっと僕には分からないんですけど。

T：それに関してはね、あまり意味ない。

●そうなんですか。僕、結構探求心おう盛な方なんで（笑）、アルバムの『SKUNK』のスタジオのクレジットを読んでると、ラックスタジオのアシスタントエンジニアの人にJ.R.BROWNっていう人がいたんで、その人が照井さんと仲良かったのかなとか思って（笑）。

T：へぇ～、そんな人いた？　J.R.BROWN？

●J.R.BROWNだったと思うんですけど。じゃあ、関係ないですね。

T：いやあ～、全然関係ない（笑）。

●ちょっと深読みし過ぎましたね（笑）。

T：一つのネーミングを付けるにしてもさ、その言葉で意味がガンって定まっちゃうものは、あまりいいとは思わなかった。ジョー・ブラウンだったらほとんど人の名前じゃん。

●聞いた人が、それぞれ勝手に想像力っていうか、イメージ持ってくれるような。

T：う～ん、でも俺もそんなに真剣に考えたわけじゃないから（笑）。

●僕が真剣すぎるんですかね（笑）。今回は、メンバーが渡部充一さん、高橋敦さん、レコーディングドラマーがドッグ・ファイトのKI-YANっていう形なんですけど。それぞれの出会いは、どういう形だったんですか。

T：KI-YANはね、ブランキーのツアーを回ってる時に、たまたま大阪で一緒になって、飲む機会があって。そこで「ソロの時にKI-YANに頼もうかなあ」って。そういう口約束が何となくあって。

●渡部さんと高橋さんは？

T：初対面だよ。

●紹介されて気が合ったとか、音が気に入ったとか？

T：出来るかなっていう（笑）。切羽詰まった状態だったからね、時間がないっていうのもあったし。でも感触は、それまでにいろいろな人に会ってやってみた中で良かったから。

●メンバーが決まるまでに時間がかかった。

T：うん、かかったね。

●最終的にこのメンバーに決定するまで、かなりの数の人と一緒にスタジオに入ったりしたんですか。

T：スタジオに入る前にね、だいたい自分の家に呼んで。俺、話すの苦手だからさ。説明したりするのは。だからすぐ自分の作った曲を聴かして、最初に感じたようにやってみてとかやったんだけど。でも、結局みんな「あーだこーだ」言わないと出来ないからね。

●照井さんの中では、メンバーを探してる時ってどういう人を求めてたんですか。

T：最初ね、ボーカルを女の人にしようかなと思ってたんだ。でも、理想が高すぎるんだよね（笑）。シャーデーみたいな人がいいなと思ってさ。ああいうジャズボーカリストっていうか。そういう人とやりたかったんだけどね、なかなかそんな人いないし。日本で有名な人とかさ、そういう人とやっても別に面白くなさそうだしさ。無名なところで、すごい人がいるんじゃないかなと思ってたけど。巡り会えないよね、そんな滅多にね。

音楽に対するエネルギーがなさすぎると思う、みんな（笑）

●それって音楽界っていうか、周りの音楽の状況って結局こんなレベルか…みたいなことを感じたんじゃないですか。

T：ああ、そういうのはあるかなあ。テクニックがどうのこうのじゃなくてさ、音楽に対するエネルギーがなさすぎると思う、みんな（笑）。今までは自分が、ブランキーのメンバーが、音楽に取り組んでる姿が普通だと思ってたけど。でも、そういうのが普通みたいだよ（笑）。知らないけど（笑）。

●ちょっとガッカリしてしまったわけですね。そんな中で出来上がったジョー・ブラウンの音はどうですか。まだ冷静には聴けないかもしれないですけど。

T：一番大きいのは、何て言うのかなあ…プロデューサーとしてバンドを見てるだけの立場とさ、自分が曲も詞も全部書いて、その中でプレイもして、それでプロデュースもやってるって立場とは全然違うじゃん。どっちかっていうと俺の場合、モノを作る人間の方が近いからさ。だから最初にこういう風にしたいっていうのはあったんだけど、出来上がったのはその形とは違う。

●それはさっき話に出た、もう少しジャズ的な感じにしたかったという。

T：それは最初の理想としてあったんだけど、それは物理的に無理になったじゃん。で、このメンバーでやっていこうって決めた時から、また別のイメージがあるじゃん。そのイメージが頭の中にあるんだけど、それをうまく出来なかったね。

●初めてのプロデューサーっていう立場は、かなり大変だったんですね。

T：客観的に見られなかったかな。

●結構辛かった。

T：辛いっていうか（笑）、すごく勉強になったとは思うね。それで反省点とか、改めて分かったこととかもあるし。こういう風にすれば良かったとかさ、言い出したらキリがないけど。この先、俺が音楽やってく上で、これはダメだってのがちゃんと提示されたわけだからさ。だから良かったんじゃないかな。

●音的に聴かせてもらうと、ハードなギターの音があったりするんですけど、全体にリラックスしたような感じがするんですよね。だからレコーディングの雰囲気が、割と和やかだったのかなって気がしてたんですけど。

T：和やかではなかったね。

●寒い空気が（笑）？

T：どっちかっていうと、そうかな。やっぱりコントロールルームにいて、プロデューサーとしての自分が求めてる音がスピーカーから返ってこないと、不機嫌な顔になるからね（笑）。

こういう風に思ってもらいたいとか そういうのはないね

●ブランキーの二人以外と、今回やったわけなんですけど。当然新鮮で、かなり刺激もあったと思うんですが、逆にあの二人の音とか存在がないことでさみしいなあと思った瞬間ってありました？

T：……ジョー・ブラウンでやってる以上、眼中にないね。それは絶対にないって、頭の中で分かってるじゃん。だからそれは思い浮かべないね。

●ソロ活動をやった人に対して無責任な外野の意見としてよく出てくるのが、例えばブランキーと同じ音を出すと「ブランキーと一緒だ」って言われ、ブランキーと違う音を出すと「バンドでは自分を抑えてるのか」ってやつなんですけど。だから照井さんの場合は、今回のソロに対してどういう気持ちでやったのかなと。

T：でもね（笑）、みんな今回のジョー・ブラウンの楽曲とか、やったことが俺のやりたいことのすべてだと思っちゃうじゃん。モノを作ってる人間なんて絶対そんなのあり得ない。ただのほんの一面。ほんの！

●なるほどね。でも一般にCD買って聴く人って、そう思いがちですよね。

T：うん。俺はもう、これを作ったわけじゃん。これに関しては、もう過去のもんだからさあ。もうここは見てないんだね。前しか見てないから。次にやりたいことは、もうあるわけだからさ。

●それはよく分かります。だから仮に、今からもう一度ソロでやることになったら、全くジョー・ブラウンとは違うものが出来るってことですよね。

T:もう全然違うと思うよ。今度は全部一人でやろうと思うもん。人に求めるのは大変だからね。

●そういう話を聞いてると、ジョー・ブラウンのレコーディングがプロデューサーとしていかに大変だったかが、こっちには伝わってきますけど。

T:ハハハハハ。それなりのクオリティーには、仕上がってると思うよ。ただ自分のやろうとしてた構想とは、ちょっと違う形になっちゃったかなっていうのはあるけど。

●今回のアルバムを聴いた反応としては「予想外に繊細でポップだ」というものが多いみたいなんですけど、そういう反応に対しては照井さん自身納得してますか。

T:いや別に、そういう反応はあんまり気にならない。

●逆に「予想外だった」って言われることに対して、快感を覚えたりとか。「ほら見ろー」みたいな(笑)。

T:(笑)それもないね。

●ブランキーの音をずっと聴いてきたファンには、どんな風に迎え入れられるかなとか、どんな風に聴かれるのかなとかってことは考えないですか。

素直なことを言ったって全然恥ずかしくないじゃん

T:う〜ん…。ある友達がこれを聴いて。そいつが言ってたんだけど、これを聴くとブランキーの楽曲で、だれがこういうところを醸し出してるかってのがよく分かるって言ってたんだね。それを聞いて「おお、なるほど」って思って。

●じゃあ、ブランキーのファンの人達も、そういうことを感じる人もいるだろうと。

T:う〜ん。…でもやっぱり聴いた人にこういう風に思ってもらいたいとか、そういうのはないね。

●当然ものを作ってる人って自分が作った音とかについて、とやかく説明したくないってのが本音だと思うんですけど、逆に聴いた人に率直な感想を言われるのって面白いものなんですか。

T:そうだね、自分が思ってもいないような意見とか出てきたりするから。そういう見方もあるのかとか思うけど。

感情を表現できる楽器は自分がやらないと

●僕もジョー・ブラウンを聴かせてもらって、その後ブランキーのアルバムを全部聴き直してみたんですよ。特に照井さんの作った曲を集中的に聴いてみたんですけど、サビがきっちりしてるって印象があったんですよね。それはごく自然になってることなんですか。

T:(笑)あんまり考えてないけど、出来るとそうなってるね。

●メロディーに対するこだわりが、照井さんの中にあったりするのかなあと。

T:メロディーは好きだからね。

●メロディアスなものに引かれるルーツ的なものって何かあるんですか。

T:ビートルズとかのメロディーは、すごい好きだから。

●かなり聴き込んだ。

T:聴き込んでるっていうか、みんなみたいな聴き込み方はしてないと思う。ただその世界観。ミュージシャンって音楽とか聴いてさ、ギタープレイとか、ボーカルのメロディーラインとか、そういうところを聴くわけでしょ。俺は、そういうところは聴いてないもん。曲全体を聴いて、頭に浮かぶ風景とかそういうものしか残ってない。

●今回はソロアルバムってことで、「ベースをもっとフィーチャーしよう」とか「ベースのソロを入れちゃえ」とか、照井さんってそういうことを考える人ではないんですね。

T:ないね(笑)。

●ということはブランキーだから、ジョー・ブラウンだからっていう、ベースのプレイの変化もほとんどない。

T:う〜ん、ちょっと弾き過ぎるのを抑えたかな(笑)。ブランキーの時より。これは意識的に。

●それは、ギタリストとの相性を考えてという。

T:いや、その曲を作った時点で。

●ブランキーでは「最近弾き過ぎたなあ」という気持ちがあった(笑)。

T:って言うかメロディーを弾くでしょ、俺。で、ついつい弾き過ぎる(笑)。今回はプロデュースも自分でやるじゃん。だから、余計な部分はどんどんそいでいこうって。

●今回ほとんどの曲でアコースティックギターを弾いてますよね。あの音は全体の雰囲気の中ですごく大事な音だと思えたんで印象に残ったんですけど、あれは照井さん自身がアコースティックギターの音が好きだからとか、そういう理由があったからなんですか。

T:もちろんそれもあるし。自分で曲を作ったわけで、その気持ちってものがあるじゃん。その気持ちを表現することを他のメンバーにも託してるんだけど、やっぱり百パーセントは難しいからね。だから、そういう感情を表現できる楽器は自分がやらないと。

●じゃあ、今回入ってる曲ってアコースティックギターで作った曲が多かったんですね。

T:うん、そう。

●アコースティックギターは、ずっと昔から弾いてるんですか。

T:ううん、全然(笑)。…2~3年ぐらい前からかな。

●ブランキーでは、弾いたりはしないですよね。

T:してない。弾く必要ないじゃん(笑)。

●そうですね、ライブで弾くとベースがいなくなるし(笑)。今回は、曲と同時に詞も書いたってことが話題なんですけど、これはやっぱり自分が中心でやるアルバムだから、詞も書くのは当然だろうみたいな意識なんですか。

T:うん。やっぱり人に任せるのはね(笑)。

●自分の作品で自分のイメージと違うものが出来るのはイヤだと。

T:やっぱり自分のイメージとは絶対違うでしょ。

●ええ、それはね。詞を書くのは初めてってことで、苦労しました?

T:そんなに苦痛でもなかったよ。自分のコツってあるじゃん、何やるにしても。最初はどうやってやるのかなって試行錯誤しながらやるんだけど、やってるうちにこうやって作るんだっていうのが見えてくるじゃん。そんなのが見えてから、曲作るのと同じですごい楽しかったけどね。

●アルバムの中で一番最初に書いた詞は、どの曲なんですか。

T:「GENUINE GUILTY」かな。

●やっぱり最初に書いたのと、最後に書いたのだと、自分の表現とかも成長してるなみたいな感じがありました?

T:でも一週間ぐらいで全部書いたからね。だからそんなに差はないと思うよ(笑)。

●すごいスピードですね、それ(笑)。僕はそういうことに素人なんで思うんですけど、初めて詞を書く時って気恥ずかしさはありました?

T:昔はあったけど、今はないね。

●それはどういうことがきっかけで?

T:それはね、人生経験っていうか(笑)。音楽だけにこだわらずにさ、人生の中で素直なことを言ったって全然恥ずかしくないじゃんっていう風になってきた。やっぱり若いころって、カッコつけたりとかさ、いろいろあるじゃん。今はそういうのがあんまりないからさあ。

●逆に自分に対する自信が昔より大きくなったとか、そういう部分はないですか。

T:もちろん自信がないと出来ないのかもしれないね。

●ブランキーでは曲は作って来たけど、詞を書きたいと思ったことはなかったですか。

T:なかったね。

●それはもう、浅井さんの世界がすごいものだと。

T:天才がいるからね、うちには(笑)。

●太刀打ちもできないって感じですか(笑)。長年浅井さんとバンドやってて、ずっと浅井さんの詞に触れているわけじゃないですか。影響を受けた部分ってないですか。

T:あると思う。人生においても。すべてにそれはお互いあるんじゃないかな。(中村)達也に対してもあるだろうし。

●じゃあ、同じ詞を書くってことでライバル意識みたいなものはないですか。今、照井さんは、浅井さんが天才だと言われましたけど、やるからにはタメを張れるぐらいの詞を書きたいという思いがあったとか(笑)。

何のためにソロやってるのかって言ったら
この先ブランキーでどれだけ素晴らしい音楽がやれるかっていう

T:(笑)タメを張るっていうかさ、自分が作った詞で、自分の基準だし。ベンジーよりすごい詞が出来たっていう基準がだいたいないからさ。張りようがないよね。

より純粋に音楽に溶け込めるんじゃないかな

●これはファンからしても、プレスからしても思うことなんですけども、バンドがソロ活動ってことになると、すぐバンドの状態が危ないなんてことを言われるじゃないですか。ブランキーの場合、解散って言葉がよくインタビューの中で出てきたりするんですけど、今はどういう状態ですか。

T:ブランキーやりたいよ、早く。

●それはソロをやったからこそ、そういう気持ちになったという。

T:そうだね。こんなカッコいいバンドいないと思うよ(笑)。

●ソロ活動は、改めてブランキーを見直せた良い機会だったと。

T:でもきっとソロってそういうもんだと思うんだよね。ブランキーがあって、ブランキーからそれぞれがソロやって。それは何のためにやってるのかって言ったら、結局ブランキーでこの先どれだけ素晴らしい音楽がやれるかっていう。そっちの方向に向いていくのが普通だと思う。

●でもバンドによっては、そういうことを言いながら、実はバンドの仲がボロボロで、結局そのままソロの方向に走っていくようなバンドもいますよね。

T:そういうバンドってカッコ悪いじゃん、だいたい(笑)。

●そうですね(笑)。このソロという経験は、照井さんの視点で言うとブランキーにどういうものをもたらすんですかね。

T:より純粋に音楽に溶け込めるんじゃないかなあ。

●プロデュースという立場に立った経験なんかも、ブランキーにプラスが。

T:うん。もちろんそれもあるだろうし。

●ブランキーはレコーディングではなくて、次は海外のツアーがあるんですけど、どんな感じになるでしょうね。

T:やってみないと分かんないけど…刺激的だと思うよ、すごい。

●海外でのライブは、やっぱり日本とは全く違う反応が?

T:って言うか日本の人達って、売れてるバンドだったら予定調和のようになるじゃん。だからあんまり信用出来ないっていうのはある。やってる側からしてみれば。何やってもウケちゃうからさあ。海外はそういう部分がない分、自分達が出した音で、自然に踊り出す人とかさ、見ると感激するよね。

●ジョー・ブラウンもライブがありますよね。ジョー・ブラウンでステージに立つのと、ブランキーでステージに立つのでは違いますかね。

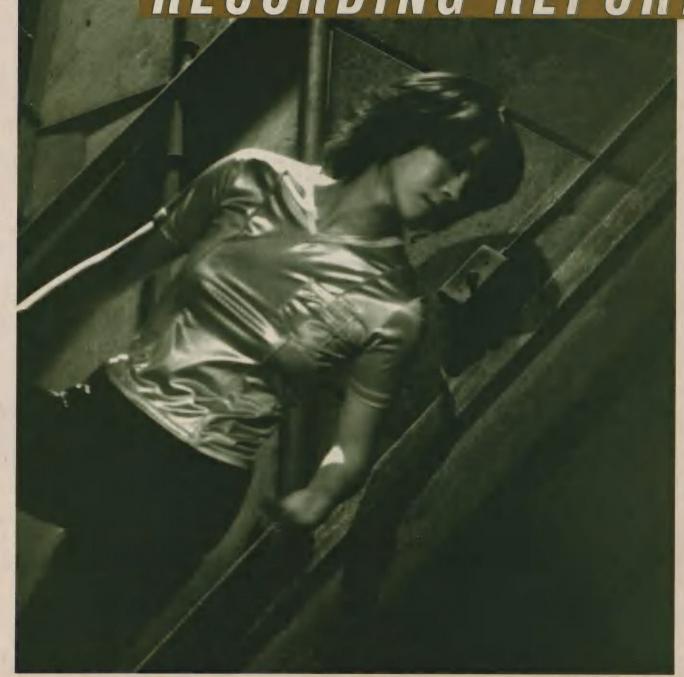
T:ライブに向かう姿勢は同じだと思う(笑)。そのあと刺激的になれば、そういうプレイになっていくんだろうし。それはブランキーでも同じだと思うけど。

●ジョー・ブラウンの方は、まだ集まったばかりですからね。ツーと言えばカーと言う関係もまだまだないわけだし。

T:って言うかさあ、時間じゃないと思うんだよね。その人の芸術性だと思うんだわ。だってジャズやってる人なんてさ、いくらでもポンポンとメンバー代えてさあ、一発で合わせて、すごいものとか作っちゃうわけじゃん。って言うのは、結局リズムから始まったら、そのリズムに触発されてプレイするわけじゃん。そういうものだと思うんだよね。みんな音楽を頭でカチカチに考えすぎてるっていうかさあ。ある程度楽器弾けたりとか、普通に歌とか歌えればさあ、そんなこと簡単だと思うんだけど…。魂の問題じゃないかな。

●ライブは楽しみですよね。

T:見に来てください。あんまり期待せずに(笑)。

MAKI OHGURO RECORDING REPORT

重いドアを開けてスタジオのコントロールルームに入ると、美しいピアノのアルペジオと張りのあるボーカルをフィーチャーしたバラードナンバーが耳に入って来た。7月某日東京都内の某スタジオ。どうやら歌は英語で歌われているように聴こえるが…この声の主は大黒摩季以外に考えられない。

曲はとても緩やかに空気を揺らしながらスタジオ内をゆったりと流れている。ちょっと土の香りのするようなおおらかさも振りまく。緊張度満点の空間という先入観で震え上がっていた僕に、この曲が少し救いの手を差し伸べてくれた。

今夜僕は、いつもインタビューという限られた時間の中でしか話すことのできなかった大黒摩季の新作レコーディング中のスタジオに、運良く招かれることとなった。

マネージングのスタッフ嬢にイスを勧められる。何だか豪華なイスだな。"自分はよそ者"という慎ましやかな遠慮を無意味にしそうな、このイスに座ろうとすると、プロデューサーの葉山たけし氏と、ソファーに深く腰掛けていたベースボールキャップを目深にかぶったきゃしゃな青年が立ち上がって「ようこそ」とフレンドリーに声をかけてくれた。どうやら僕は歓迎されている様子で「ホッ」と胸をなで下ろす。それにしても、忌ま忌ましいのは、このイスだ。思った通りに座り心地は最悪だ。

居心地悪くモジモジしている僕の目前では、ボーカルまで入った演奏にアコースティックピアノのオーバーダビングが進行中。大きなミキサーの向こうにスタジオの中をのぞける大きな窓があり、その上にセットされたテレビモニターにスタジオの奥のピアノレコーディングのための小部屋で演奏するピアニストの佐山雅弘氏が映し出されている。大黒はどこに…? テープがストップして、すぐにプレイバック。今録音された演奏がスタジオの大きなスピーカーから流れる。どうやらラフに流して弾いてるようなフィーリングだ。その音が消えると楽譜を一心に見つめていた葉山氏が振り返ってソファーに腰掛けた青年に話しかける「どう?」「そうね…」。あっ、ナゾの青年は大黒摩季だった。何度も会って話してるはずなのに。インタビューの時とは全く違うオーラを発しているのだ。不覚にも、本当に分からなかった。

このバラードについてさっそく彼女に聞く。

「イメージも何も全くなくてフッと頭に出てきたものがホッと曲になったっていう感じ(笑)。まるで神さまの声を聞いたみたいに…。最初はインストゥルメンタルだったものが、どこかから歌ってる自分の声も聴こえて来て、歌を入れたくなったんです。仮のタイトルは『ノスタルジア』。最近、世の中も自分も頑張ってない人はいないよねとかって思って、その中で、たまにはゆっくり星空でも見ようねって、曲で抱きしめてあげたいとか、逆を言うと自分が抱きしめられたいとか、それでホッとしたり安らいだりとか、リラクゼーション的なものにしたいと思っています」

詞は英語のようだが、星空とか大自然という雰囲気はそのメロディーやサウンドからこちらにも伝わって来る。

「覚えてはいないけど、お母さんのお腹の中で羊水に浮いてるような感じ? だから海の上でボーッと星空を見ながら浮いてるような…。別に『元気だしてね』って言うわけじゃないけど、曲がフーッと、疲れている人を包み込んで、自然と心を清くすることができたら…」

英語の詞について質問しようとすると、

その言葉を遮って彼女は――

「あれは仮のボーカル。英語に似た適当なもの、内輪では"ヘベレケ英語"って呼んでますけど(笑)。頭の中にある曲のイメージとかリズムとかを最初から日本語で出そうとするとかなり神経使わないといけないし、先に適当に煮詰めるくらいだったら、適当な英語でリズムや音程や雰囲気を作って、それに合わせて詞を書くっていう方がずっとやりやすい。私の場合、頭の中で作曲をする人と作詞をする人が別になってたりしますから、作曲の人のイメージ通りのものをまず作り上げて、そこから作詞の人に移行するんです」

ピアノのオーバーダビングは彼女と葉山氏そして佐山氏の間での"ああでもないこうでもない"という、リラックスした会話の中から、一つの明確な形が現れはじめる。間には大黒が曲に全く関係なさそうな「左利き天才説」で盛り上がるが、僕にはその話で左利きの佐山氏の指がさらに生き生きと動き始めたように見えた。大黒は頭の痛くなりそうな音楽理論上の理屈よりも、曲における自分の感情のあり所を重要視しているのがありありと分かるほど理屈からかけ離れた感情的な言葉でコミュニケートしている。その言葉を葉山氏は理論を踏まえた的確な言葉にして佐山氏に伝える。

「私は葉山さんを通訳と呼んでますよ(笑)。ミュージシャンの人に、私が説明できないことをよく説明できるなーって感心してばかりです」

この曲のピアノのフレーズは美しく力強い印象的な形に無事仕上がった。僕の素人で超純情な耳には、このままでもリリースできるほどのクオリティーに聴こえるが、まだまだこれからなんだろう。「OKですー」というだれかの上機嫌な声を合図にレコーディングはしばしブレイク。

このブレイクの間に、僕にとって刺激たっぷりのレコーディング風景の中に、彼女が今までと違うと感じていることがあるかを聞いてみる。変化はいつも大切だ。

「私の脳みそが軟らかくなってるって言うのかな? 前が硬かったってわけじゃないけど、あいまいな部分っていうんですか、多少スケールからアウトしてるような音使いが入ってても"全体で格好良ければいいんじゃない?"ってレアな感じが増えてきました。いい意味でヒューマンなところで解決できる部分とか、ついピンと弾いた音が良かったりとかっていうのを許せるっていうのかな…。

私って元々クラシックやってたから結構細かいんですよね。ギターなんかでチョーキングの音がきっちりと上がり切ってないのは気持ち悪いとかね。でもそこが哀愁(あいしゅう)があっていいなって思えるようになってきた。歳と共に丸くなっていくっていうか、ストライクゾーンが広くなってくるんじゃないですかね(笑)。やっぱり音楽って決め込まないと答がないですから、ここだって決めた所を突き詰めていくっていうことがスタート地点ではすごく大切だとは思うし、嫌なものとか気にくわないものとかイメージにそぐわないものをどんどん排除していって研ぎ澄まされたナイフみたいにしてるんだけど、それだけじゃなくてもっと切れ味が良くなるように、ちょっとオイルを塗ったりっていう余裕の部分が出てきたんじゃないかな。多分、すごく限られた時間の中で、自分を百パーセント出すとかっていう環境に慣れてきたんだと思う。それで少し余裕が出てきたのかな。

『疲れたねー疲れたねー』って言ってる割には『ここもやってみようかなー』って言える余裕…やっぱり慣れてきたんじゃないかな」

さてテープもセットされ、次の曲へのピアノのオーバーダビングが始まる。サンバ系のハッピーなナンバー。これも仮のタイトルを聞き出そうか…。

「それはちょっと言えないところです(笑)。タイトルが大事な部分で、曲のオチみたいなものですから秘密にしておきましょう。ただ、みなさん多分この曲の詞を聴いた時に、『そうだー、そうだー!』って叫びたくなると思います(笑)。それから『まあとりあえず盛り上がって今日は忘れましょう』ってなる」

大黒得意の文句言い系ってやつ？

「文句っていうか…(笑)。生活感あふれる曲になるでしょうね。秘密だとかいいながら結構言っちゃったな(笑)」

個人的な印象だが、この曲は、確かにサンバがベースになっているが、場面転換がかなりあって、今までの彼女のサンバっぽいナンバーとは趣が違う。元気なサンバからロック的なフィールドに行ったかと思うと再びサンバに帰ってきて、熱気が気持ち良く冷めていくようなソフトなパートもやってくる。

「多分、気楽に作っているから、ポンポンいろんなアイデアが出てきて、それをそのままグッチャリ入れたっていう感じなんでしょうね。それからやっぱり私は日本人なんですよ。サンバの国で生まれたわけじゃないんで、ずーっとサンバが鳴ってると、きっと飽きるんでしょう。日本人ってごはん食べたらおみおつけに行って、漬け物に行って、それからメインディッシュって食べていく民族じゃないですか。ハンバーガーならハンバーガーずっと食べてるとかは、やっぱりできない民族なんだって(笑)。こうやって冷静にダビングの時に、フルコーラス聴いたりするとそんな風に思ったりしますけどね」

彼女得意の的確でちょっとユーモラスな例え話が飛び出した。スピーカーから流れる音に合わせて大黒が足でサンバのステップを踏み始める。僕の右手もそれにつられて動き出す。テレビモニターに写る佐山氏のアクションもだれに見せるわけでもないのに、どんどん大きくなる。ち密で冷たい箱と決め込んでいたレコーディングスタジオが微妙に〃熱く〃なってきた。葉山氏が「ソロはお任せします」と声をかけると、大黒も「〃てーい〃って感じでお願いします(笑)」と感情優先のお願い。佐山氏の指から、一歩間違えたらやり過ぎになりそうなスリリングなプレイが飛び出すと、コントロールルームでは大喝さい、大黒の大きな笑い声が響きわたる。

「私たちはそのミュージシャンの方がどんなプレイをするかを分かった上で来ていただいてるんですけど、それをどんどん乗せていって、いい方向にはみ出してくれた時には、みんなですごくうれしくなります。ミキサーからアシスタントからディレクターとかここにいる全員は一本のピアノ線みたいなのでつながってるんですよ。だから別に細かいこと言わなくても通じちゃうようなところがある。それに、ミュージシャンっていうのは不思議で、葉山さんだって私から見ればホントは大先輩なのに、音楽をやってるときは世代の差とかお互いのキャリアだなんだっていうのは全く関係なく、一緒に〃音楽を好きな人たち〃ってなれて、そんなふうにつながれる感じが素晴らしいですよね」

確かに素晴らしい光景だ。この瞬間には音楽とビジネスの関係はどうでもよくなっていて、ただひたすらに、みんなが音を楽しんでいる。気が付くと大黒がソファーに腰掛けてぞうさんギター(象の形をしたかわいい小型のアンプ内蔵ギター)を手に、サンバのリズムのマスターにいそしんでいる。その夢中な彼女の仕草を見ていると、もう僕の無性に楽しくなる気分も止まらない。

しかしだ、実はこの2曲、現段階ではアルバムに収録されるかどうかは分からないという。何だか彼女らが求めている基準の高さにめまいがしそうだ。

「私たちのやり方は、曲を作って選考するって時に50曲くらいのデモテープを集めて、アレンジするものをそこから25曲くらいに絞り込む、その25曲は完全に仕上げてから『選びますか？』って感じです。その曲の良さって、きっちり出来上がってみないと分からないじゃないですか」

曲は自分の子供だって言う彼女だけに、そう簡単に投げ出すのはかわいそうだという…。

「まあ反抗期の所で止めておくと、周りからは、やっぱり反抗的な子供だって言われますから。『この子は実はいい子なんです』って母だけが分かっているっていうのもかわいそうだし(笑)」

さて、7月号のインタビューでは、NHKのオリンピック番組のテーマ「熱くなれ」で僕に「国民的シンガー」と呼ばれ「それはやばい。次はすごいのを出さないと」と意味ありげに笑った大黒摩季のニューアルバムは、一体どんなアルバムになるのだろうか。

「『熱くなれ』以降作ってる曲って、暑苦しかったりくどかったり濃かったり、『別れましょう私から消えましょうあなたから』のころの怖さとかがギンギンに出てますね(笑)。最近は『ああ』とかじっとこらえてるタイプが続いてたから、発散したくなってるんでしょうね。自分が〃熱くなれ〃状態になってるんじゃないですか。でも周りにしてみたら、〃大丈夫だってあれでも十分熱いって。それ以上別に熱くなんなくていいって〃でも私は〃いや、今の私は冷めてる〃とか言ってね(笑)。私の熱さって人のレベルより高いじゃないですか(笑)」

大切なヒントとしてこの言葉を頭に刻む。ある時は男性を震え上がらせ、ある時はみんなのこぶしを突き上げさせ、またある時は疲れた人をそっと包んでくれる、きっとそんな感情の嵐のようなアルバムが僕たちに届けられることだろう。

約3時間後、あまり作業の邪魔をしてはいけないと、こっそりスタジオを出ようとすると、彼女に「明日はもっと面白いですよ。生のブラスを入れるんです。ぜひいらして下さい」と呼び止められる。その心配りに感謝の気持ちを込めて今夜の感想を述べた。「最初は部外者って感じで居心地悪かったけど、ピアノのいろんなフレーズに一喜一憂してるうちに、少し中に入れたような気がしましたよ」

「それでいいんですよ。『あっ、これいいよな』って感じた瞬間から、西原さんもスタジオの仲間なんですよ」と陽気に笑う大黒。今夜、僕は大黒摩季の音楽の仲間になれた。次の彼女のアルバムは僕にとって今までになく特別なものになりそうだ。

［文・西原 朗］

feature 音楽雑誌用語マニュアルⅡ

ジャンル編

企画・構成・テキスト ジェイロックマガジン・中伏木寛(毎日映像音響システム)
イラストレーション 山本[illegible]

今回のフィーチャーは好評だった「音楽雑誌用語マニュアル」(98年三月号「楽器関係の用語編」)の第二弾として、音楽雑誌でよく目にする音楽のジャンルについて解説をしよう。この「ジャンル」という言葉に強く反発して「音楽にジャンル分けなんて必要ない」と声を荒げてる人もいるかもしれないが、音楽をよりわかりやすく理解し、親しみやすく、取っ付きやすいものにするためには便利なものではないだろうか。音は見た目で区分けすることはできないが、音楽ジャンルとしての概念がそこにあれば、手にした雑誌のディスクレビューやバンド紹介に書かれている「彼らのヘビーメタルサウンドは〜」と書かれてあるだけで、だいたいどんなサウンドなのか想像がつく。それに一概に「ロック」と言っても、「パンク」から「サーフミュージック」まで様々なジャンルがあり、その「パンク」も長い年月を経て「ニューウエイブ」や「ハードコアパンク」を生み、さらに「ニューウェイブ」は「ノイズ」「テクノ」へと細分化していくのである。そして、その大本である「ロック」でさえリズム&ブルースとカントリー&ウエスタンを基に生まれた音楽であり、「リズム&ブルース」も「ブルース」が進化した音楽なのだ。音楽の発生や進化の流れというものは、音楽をジャンル別に分け、系統化するからこそつかみやすくなるのである。ジャンルの細分化がどんどんと進んでいく一方では、ついていけていない人もたくさんいる。初めて目にしたジャンルについて「デスメタルって何? 死の金属? ホラー映画の音楽?」などと解釈してさらに困惑した人もいたかもしれない。

そこで今回、ジャンルについての知識をちょっと身に着けて、より深く音楽を楽しめるファンになってもらえればと思う。各ジャンルの誕生や発展の流れを図式化した系統図も一緒に掲載するので、それを参照しながら解説文を読めば、一段と深く理解することが出来るだろう。さらに、各ジャンルの代表アーティストや、そのテイストが盛り込まれたJロックアーティストのナンバーも列挙しているので、機会があれば自分の耳で実際に聴いて、音で確認して欲しい。

ただし、音楽ジャンルと言っても数限りないほど幅広く奥深いため、あくまでもここに紹介するジャンルはロックを中心としたものであり、音楽雑誌に登場する頻度が高いものを抽出している。

アーバンブルース

"シティブルース"とも呼ばれる都会的なブルースの意味。第一次世界大戦後、アメリカでは南部の黒人たちが北部の都市へと移住し、当時流行しつつあったジャズと交流しながら、次第にビッグバンド(15名以上からなるジャズのオーケストラ)などをバックに洗練された聴きやすいブルースを歌うようになった。そして、50年代後半にはホーンをバックにして、エレクトリックギターを片手に歌う"アーバンブルース"のスタイルが出来上がった。代表的なアーティストはB.B.キングらで、Jロックではウエスト・ロード・ブルース・バンドになるだろう。

アメリカンブルース

60年代ころには、アメリカで生を受けたブルースがイギリスに渡り、そこで独自のスタイルを持つようになったため、それと区別すべくアメリカで古くから演奏されているシンプルでオーソドックスなブルースが"アメリカンブルース"と呼ばれるようになった。

カントリーブルース

"アーバンブルース"に対して、ギター一本の弾き語りで歌われるような素朴で田舎っぽいブルースのことを言う。ライトニン・ホプキンス、ジョン・リー・フッカーなどが代表的で、日本ならインディーズシーンで地道な活動を続けているシバがこのテイストを持っている。

シカゴブルース

ブルースにはある地域独自のスタイルを持ったものに対して、その土地の名を取ったものが多く、これもその中の一つ。50年代のシカゴでは、エレクトリックギターをボトルネック(ガラス製の瓶の飲み口を切ったもの)でスライドさせるスタイルのマディ・ウォーターズらが登場し、ギター、ハープ(ハモニカ)、ピアノ、ベース、ドラムスと言ったバンドスタイルのブルースを確立した。

デルタブルース

アメリカのミシシッピ州のミシシッピ川とヤズー川に挟まれたデルタ(三角)地帯を中心としたブルースの一種で、カントリーと融合した粗野でリズミックなサウンド。サン・ハウス、スキップ・ジェイムスなどが代表格。

ブギウギ

20年代にシカゴの黒人ピアニストによって広められた。右手でリズミカルにメロディーのバリエーションを作っていき、左手でノリのいいベースラインを弾くことによって生まれる、アップテンポで軽快なリズムが特徴。ジミー・ヤンシー、チャーリー・ダヴェンポートなどが代表的で、Jロックではザ・イエロー・モンキーのアルバム『未公開のエクスペリエンス・ムービー』の「審美眼ブギ」で軽快なブギウギサウンドが聴ける。

ブルース

19世紀半ばアメリカに奴隷として連れてこられた黒人たちによって生み出された音楽で、後のロック、ポップスの最も大きな音楽基盤の一つとなった。恋愛、苦悩、悲しみなど彼らの心情をストレートに表現した心の歌であり、音楽的にはブルーノート・スケールという音階を三つの循環コードからなるコード進行に乗せ、12小節でひと回りするという決まりが基本にあるが、メロディー、コード進行はミュージシャンにより自由に展開される。Jロックでは憂歌団、近藤房之助らが代表格だ。また、ビーズの『The 7th Blues』では、ブルースフィーリングたっぷりの松本のギターと稲葉のボーカルによるブルースナンバー「もうかりまっか」が聴ける。

ラグタイム

1900年代ころ、ミズーリ州の黒人ピアニストたちの間で広まったサウンド。西洋音楽的なコーラスや、左手のベース進行と右手のメロディーの絡みで生まれる黒人音楽独特のピアノのノリが、後のポップスやジャズに大きな影響を与え、このスタイルで書かれた曲を「〜ラグ」と呼ぶ事が多い。代表的なアーティストは映画「スティング」のテーマで有名なスコット・ジョプリンなど。

スカ

60年代にR&Bの影響を受けて、ジャマイカで生まれた音楽。分厚いホーンを導入し、拍の裏を取った(通常4拍子なら1拍目と3拍目を強調するが、その逆の2拍目と4拍目を強調する)2ビートの速くてキレのいいテンポが特徴的。日本では東京スカ・パラダイス・オーケストラが代表的で、面白いところでは黒夢がシングル「SEE YOU」のカップリング曲「COMICAL」で、スカのリズムを取り入れている。

ソウル

60年代に入り、ブルース色が弱まってポピュラーミュージックへと洗練されていった〝リズム&ブルース〟。やがて、それは〝ソウルミュージック〟と呼ばれるようになった。そしてゴスペルの影響を受けたボーカルがより魂(ソウル)を強く感じさせ、ガッツのあるポップミュージックへと展開していき、後のリズムを強調したファンクへの足掛かりともなる。代表的なアーティストはオーティス・レディング、ジェイムズ・ブラウンら。吉田美和の『beauty and harmony』はソウルミュージックがベースとなっている。

2トーン

ニューウェイブが起こった後の70年代後半にイギリスで誕生した、スカとパンクをミックスした音楽。スカの2ビートが歯切れ良く打ち出され、パンク以上の疾走感と躍動感を生むサウンドが特徴だ。その一大ムーブメントを巻き起こしたのが、スペシャルズ。その後、独自のポップセンスとハチャメチャさで人気を博したマッドネスなどがいる。〝2トーン〟とは、彼らが所属していたレーベル名をそのまま付けたもの。

ドゥー・ワップ

R&Bの歌唱スタイルの一つで、リードボーカルに「ドゥ～ワァ～」というハミング風のコーラスが入るのが特徴。ア・カペラ(コーラス)でゴスペルに根差したボーカルグループをこう呼び、スパニエルズ、ペンギンズなどが有名だ。また最近、復活して話題を呼んでいるラッツ&スター(特にシャネルズだったころの「ランナウェイ」)は、ビジュアルまでもドゥー・ワップの影響を受けている。

ファンク

元々の語源は「嫌なにおいのする」という意味であるが、60年代の終わりからソウルに16ビートの躍動的なリズム感を加え、ダンス性を強調したスタイルを肯定的にこう呼んだ。70年代のブラックミュージックのキーワードの一つであり、色々な音楽の要素を取り込み、より都会的な性格が強くなっていった。スライ&ザ・ファミリー・ストーン、アース・ウィンド&ファイアなどが代表的なアーティストで、Jロックでは久保田利伸、アイスのほか、ディーンの『DEEN』の「Keep on Dancin'」や、初期の米米CLUBの「KOME KOME WAR」などはファンクを自分たちのカラーで味付けしている。

フィラデルフィアサウンド

70年代前半にフィラデルフィアの「シグマ・サウンド・スタジオ」で制作された一連のソウルミュージックの総称で、ストリングス(弦楽器)に特徴のある都会的なサウンドだ。ザ・スリー・ディグリーズをフィーチャーした「ソウル・トレインのテーマ」は今でも聴かれるヒット曲で、スタイリスティックス、オージェイズらが代表格。

ブラコン

ブラックコンテンポラリーの略。ジャズやR&Bをルーツに持つが、AORやディスコサウンドなどをベースにメロウ感やアーバンな雰囲気を持った黒人による現代的音楽を指す。70年代にレコード会社によって名付けられ、ライオネル・リッチー、アニタ・ベイカーらがよく知られている。

ブルー・アイド・ソウル

言葉通り訳すと「青い目をしたソウル」。つまり黒人音楽であるソウルを白人が模写してプレイするグループのこと。60年代に第一次ブームが起こり、80年代半ばにも第二次ブームがあった。代表的なアーティストにはラスカルズホール&オーツなどの名が挙がる。

モータウンサウンド

60年代のアメリカン・R&B、ソウルミュージックをリードしたベリー・ゴーディ率いるタムラ・モータウン・レコード出身のアーティスト達のサウンドをこう呼ぶ。黒人所有の会社でありながら白人聴衆をも計算に入れたポップ性に富むサウンドと戦略は、その後のロックにも多大な影響を与えた。モータウンと並び称されるレーベルにオーティス・レディングを抱えたメンフィスの「スタックス」がある。シュープリームス、スティービー・ワンダー、ジャクソン・ファイブらが有名で、大黒摩季の初期の作品には、彼女が影響を受けたというモータウンサウンドを感じさせるものが多い(『DA DA DA』の「DA・DA・DA」など)。また、氷室京介の『NEO FASCIO』の「RHAPSODY IN RED」でも聴ける。

リズム&ブルース(R&B)

30年代にゴスペルなどリズム感の強い音楽がブルースに影響を受けて生まれた、黒人の大衆音楽である〝レイスミュージック〟が、40年に入りその差別的な表現(「レイス」は「人種」という意味)に代わり〝リズム&ブルース〟と呼ばれるようになった。跳ねたリズムと黒人特有の節回しのボーカルが生むノリと粘りある独特のビートは、後にシーンを築く大物ロックアーティストとなるエルビス・プレスリーやローリング・ストーンズ、ビートルズなどに多大なる影響を与えた。代表格はレイ・チャールズ、リトル・リチャードら。

レゲエ

ジャマイカのスカが、R&Bやロックの影響を受けて60年代終わりごろにレゲエとして完成する。スカよりもルーズで、歌われる詞は宗教的・政治的問題も内包している。70年代になると世界に広まり、多くのミュージシャンに多大な影響を与えた。ボブ・マーリー、ジミー・クリフらが有名。黒夢は『FAKE STAR』の「REASON OF MYSELF」で、レゲエのリズムをギターのカッティングに取り入れている。

アシッドジャズ

90年代イギリスのアシッドジャズ・レーベルから輩出されたアーティスト達にちなんでそう呼ばれたクラブジャズ系(ダンスクラブで演奏されるジャズ)のサウンド。ジャズという名前がついているが、実際には70年代ファンクやラテン、ハウスなどを新感覚のグループで表現している。ブラン・ニュー・ヘヴィーズ、ガリアーノ、ジャミロクワイ、インコグニートなどが有名。ピチカート・ファイヴは『Big Hits and Jet Lags 1991-1995』の「CDJ」で、いかにもピチカート的なアシッドジャズを聴かせてくれる。

シカゴジャズ

20年ごろにニューオリンズから移り住んだ白人ミュージシャンたちが作り上げた独特のスタイルで、シンプルでハートフルなサウンドと力強いビートが特徴。

ジャズ

奴隷制度から解放された黒人達によってニューオリンズで生み出された音楽。そのスタイルはブルースやゴスペル、白人の教会音楽がベースとなり、ダンサブルなリズムと即興演奏による感性に任せた自由なプレイが特徴だ。近藤等則、渡辺香津美、渡辺貞夫などが有名。

スウィング

ジャズの持つ独特の躍動感や4ビートのノリをこう呼ぶ。30年代中ごろから40年代中ごろはスウィング黄金時代と言われるようにジャズのビッグバンドが大ヒットした。ベニー・グッドマン楽団、トミー・ドーシー楽団などが有名。再結成が話題となっている甲斐バンドのナンバー「かりそめのスウィング」でスウィングが体験できる。

デキシーランドジャズ

デキシーとはアメリカ南部の意味で、1910年代に発生した白人のジャズのことを指す。トランペット、トロンボーン、クラリネット、ピアノ、ドラムスの楽器編成が中心で曲目はブルースやマーチ、ラグを中心に当時のポピュラーソングも含まれていた。サザンオールスターズの『ステレオ太陽族』の「我らハープ仲間」はデキシーランドジャズのテイストがふんだんに盛り込まれている。

ニューオリンズジャズ

1910年ごろのニューオリンズの黒人により生まれた最初の素朴なジャズスタイルの事。楽器構成はブラスバンドスタイルで即興演奏に特徴がある。

バップ

固定された様式に陥りがちなスウィングジャズに反発して40年代半ばに生まれたアドリブ(自由に即興演奏すること)を主体とする演奏スタイルを持ったジャズ。50年代に入るとこれがモダンジャズの主流となった。代表的なアーティストにはディジー・ガレスピー、チャーリー・パーカー、ケニー・クラーク、セロニアス・モンクなどの名が挙がる。

フリージャズ

60年代に起こった前衛的なジャズの事。従来の形式を否定して、フリービート、自由な即興演奏、それに民族音楽の要素を取り入れた。代表的なアーティストは、エリック・ドルフィー、オーネット・コールマン、セシル・テイラーなど。

モダンジャズ

40年代に起こったバップ以降のジャズを総称してモダンジャズと呼ぶ。オリジナル・ラヴの『結晶 SOUL LIBERATION』の「MILLION SECRETS OF JAZZ」で聴けるベースの下降フレーズなど、まさにモダンジャズと呼べるアレンジだ。

アートロック

60年代の終わりごろそれまでのポップなロックとはうって変わって、サイケデリックにブルースや東洋音楽のエッセンスを加え、卓越した演奏技術で芸術性のあるサウンドを聴かせるロックが登場した。R&Bを基本にしながら現代音楽、クラシック、ジャズなどあらゆる音楽を取り入れ、アドリブを多用し緊張感のある演奏を長時間聴かせるのが特徴で、クリーム、バニラ・ファッジなどが代表的。Jロックではジョー山中が在籍し、海外進出も果たしたフラワー・トラベリン・バンドだろうか。

アメリカンロック

60年～70年代に誕生した、アメリカの白人文化から生まれてきたロックの総称。カントリーロック系やサザンロック系などの、R&B、ゴスペルの流れをくんだ泥臭いロックがアメリカンロックと呼べるだろう。

イーストコースト

アメリカ東海岸から生まれたロックのことを指す。その中心はニューヨークやボストンで、イギリスにも近く知的で硬質なパンクやニューウェイブのバンドを多く輩出している。ベルベット・アンダーグラウンド、トーキング・ヘッズなどが代表的。

ウエストコースト

60年代後半にクローズアップされた、アメリカ西海岸(サンフランシスコ、ロサンゼルス)を中心に生まれたロック。フォークロック系やカントリー系の開放的なサウンドのグループが多く、イーグルス、ジェファーソン・エアプレインが代表的。Jロックでは、はっぴいえんどやセンチメンタル・シティ・ロマンスの名が挙がる。

AOR(エー・オー・アール)

「アダルト・オリエンティッド・ロック」の略。70年代の半ばに、ティーンズ向けのロックと差別化するために作られた総称で、文字通りアダルト向けの比較的ソフトなロックを指す。ボズ・スキャッグス、シカゴ、デヴィッド・フォスターらが有名で、邦楽で言うと佐藤博、角松敏生といったところ。

L.A.メタル

80年代に入るとロサンゼルス出身のヴァン・ヘイレンの成功を目指して続々と若いミュージシャンたちがL.A.に集まるようになった。それらの中からクワイエット・ライオットをはじめ、数多くのメタルバンドがメジャーシーンに登場する。サウンド的には70年代のハードロックよりも明解で、アップテンポでノリが良いポップなリズムが特徴的。また、パンクやグラムロックの影響を受けたファッションも過激だ。代表的なのがモトリー・クルー、ドッケン、ラットら。

オルタナティブ

パンク、ニューウェイブ系のインディーズシーンや、そのアーティストの総称として使われていた〝オルタナティブ〟。それは商業主義に反発するもう一つのロックの意味でもあった。やがて、インディーで絶大な人気を博していたソニック・ユースが大手ゲフィン・レーベルと契約したことにより、〝オルタナティブ〟は一つの大きなジャンルとして扱われるようになる。それだけ〝オルタナティブ〟という枠に入れられるアーティストがメジャーに負けない巨大なパワーを秘め、またメジャーとインディーの境もあいまいになってきたことを意味しているのである。

カントリーロック

アメリカ民謡であるカントリー&ウエスタンにエレクトリックギターなどロックの要素が加わり、アメリカンロックの一つのスタイルとなった。代表的なアーティストはポコ、アウトローズなど。ツインザーの懐かしいナンバー「OH SHINY DAYS」はカントリーロック風に仕上げられている。

グラムロック

「グラマラス(GLAMOROUS:性的魅力がある)なロック」という意味で、サウンドではなくそのアーティストのビジュアルから名付けられたジャンル。70年代初めイギリスを中心にミュージシャンごとに音楽性は異なるが、架空の人物を演じ

たり、中性的なイメージで髪を染め化粧をしたりと、センセーショナルなファッション性などから話題となった。デヴィッド・ボウイ、T・レックス、アリス・クーパーなどが代表的で、デルジベットや初期のザ・イエロー・モンキーは、これらグラムロッカーの流れをくんでいる。

グランジ

90年代にシアトルのレーベル〝サブ・ポップ〟を中心に登場した、アメリカのガレージ感覚を持ったバンドの総称で、ノイジーなギターが特徴的。代表的なアーティストにはニルヴァーナ、パール・ジャムなどの名が挙がる。ワンズの最近のシングル「Same Side」「WORST CRIME」のギターはグランジのテイストが盛り込まれていると言える。

クロスオーバー

ジャズ、ロック、民族音楽など何種類かの分野の音楽が混ざりあったスタイル。やがてフュージョンへと発展し、クロスオーバーは死語となった。

サイケデリック

サイケデリックとは、サイコ（PSYCHO：脳）とデリシャス（DELICIOUS：おいしい）を合わせて、「脳がおいしい：ドラッグ体験・幻覚体験」の造語で、ヒッピーカルチャーの中から生まれた幻覚症状を表現した音楽や、ドラッグなどによるトリップをさらに深める効果を果たした音楽のことを指す。60年代中ごろに登場し、同年代後半から70年代前半にかけてムーブメントを巻き起こした。代表的なアーティストはジェファーソン・エアプレイン、ピンク・フロイド、Jロックでは木暮〝シャケ〟武彦のサイコデリシャスなど。

サザンロック

70年代前半に全盛期を迎えた、「サザン（SOUTHERN）」という言葉通りアメリカ南部より発生したロックのこと。ブルース、R&B、カントリーなどのルーツ音楽の影響を強く感じさせる泥臭いサウンドが特徴的で、骨太のアメリカン・フロンティア・スピリットを内包しているような〝汗とブルースとバーボンの男のロック〟を聴かせてくれる。オールマン・ブラザーズ・バンド、ZZトップなどが知られる。

サーフミュージック

60年代初頭、アメリカ西海岸を中心に世界的なブームとなった、サーフィンや夏の海をテーマにした軽快なロックンロールのことで、〝ホットロッド〟とも呼ばれている。ビーチ・ボーイズが代表的で、Jロックではサーフコースターズなどの名が挙がる。

ジャズロック

60年代後半に登場した、ジャズの要素である複雑なリズムやコード進行、感性に任せた即興演奏などを大幅に取り入れたロック。

スラッシュメタル

ヘビーメタルのテクニックとハードコアパンクの過激さを兼ね備え、より速いスピード感を求めたロック。メタリカ、アンスラックスなどが代表的で、Xジャパンも「I'LL KILL YOU」や「オルガスム」を発表していたインディーズ時代にはスラッシュメタルバンドとして扱われていた（スラッシュメタルのバンドばかりを集めたオムニバス盤「SKULL THRASH ZONE」にも参加している）。

デスメタル

極限のスピードで、悪魔的な世界などを歌い、超過激で暴力的なサウンドが特徴的。代表的なアーティストにはヴェノム、ナパーム・デスなどの名が挙がる。

ニューウェイブ

70年代後半のパンクに強い影響を受けたロックの総称。内容的にはスリーコードを覚えるだけで演奏ができるパンクに対し、いろんなジャンルの要素を実験的にサウンドに取り入れ、テクノ、ノイズから環境音楽など幅広いジャンルを生んだ。P-L、ジャパン、XTCなどが代表アーティストで、JロックでもP-モデル、ヒカシュー、プラスチックスなどエキセントリックなバンドが数多く登場した。

ニューヨークパンク

70年代初めのバンド、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドやその後のニューヨーク・ドールズはイギリスよりも先にニューヨークに起こったパンクムーブメントの先駆けと言えるだろう。70年代後半にはラモーンズやブロンディがヒットを飛ばすが、アメリカ全体にはブームは広がらなかった。ロンドンパンクと違うのは、ニューヨークパンクにはアンディ・ウォーホルなどの芸術家が影響を与えている点。彼らは親しく関係を持ち、その結果ニューヨークパンクにはアート感覚の強い知的なイメージが生まれた。

ニューロマンティックス

80年代前半にニューウェイブの存在をよりポップにするために生まれた、どちらかというとレコード会社の戦略的な呼び名。シンセサイザーを使用したポップなサウンドとダンサブルなビート、そして派手でアイドルチックなビジュアルなどがMTVのスタートに伴って注目を浴びた。デュラン・デュラン、スパンダー・バレエなどが有名だ。

ネオアコースティック

80年代前半、イギリスでパンクに対する別の流れとして、アコースティックギターをメインにした内省的な歌詞を美しいメロディーに乗せて、繊細な声で歌うアーティストが出現した。これは一つの原点回帰の現象でもある。オレンジ・ジュース、ベン・ワット、ペイル・ファウンテンズなどが有名で、フリッパーズ・ギターの「CAMERA! CAMERA! CAMERA!」や、スピッツ「空の飛び方」の「青い車」でネオアコ特有のギターサウンドが聴ける。

ノイズ

ニューウェイブやオルタナティブの中でも、機械的なノイズを前面に出し、リズム以外は音楽的要素を排除した、一番過激な一派。マンネリ化した音楽観へのアンチテーゼとしての要素が強い。代表格のスロッビング・グロッスルのレーベル名が「インダストリアル」だったために、「工場での騒音」的なサウンドの意味も含めて〝インダストリアル（インダストリアルが持つ本来の意味は「工業的、産業的」）〟とも呼ばれている。スロッビング・グロッスル、アスムス・ティートヘンスなどが知られ、Jロックでは非常階段や灰野敬二らがノイズミュージックの重鎮。また、シャフトもこれに近い存在だろう。

ハードコアパンク

80年代に入るとパンクをより過激にしたグループが数多く登場した。サウンドはよりハードに、より刺激的にとエスカレートし、ファッションもモヒカンヘアーやビョウだらけの皮ジャンなどとかなり過激。G・B・H、ディスチャージなどが世に知られ、Jロックでもインディーズブームを巻き起こしたギムズ、ガーゼ、ラフィン・ノーズ、リップ・クリームの名が挙げられる。

ハードロック

60年代後半、イギリスで生まれた。R&Bの影響を強く受け、ひずんだギターリフやシャウトするボーカルに特徴があり、大音響で演奏されたロック。より重く湿ったサウンドのブリティッシュハードロックに対して、72年ごろから次第にアメリカでもストレートなサウンドが特徴的なハードロックバンドの数が増えていった。レッド・ツェッペリン、ディープ・パープル、キッスが代表的で、Jロックでもアクション、バウワウなどが活躍しており、最近のビーズのサウンドもハードロックだといえる。

バブルガム

バブルガム（BUBBLE GUM）とは、風船ガムの意味。60年代後半、そんなバブルガムをかんでいるような低年齢の子供でも楽しめるポップでカラフルなロックが流行した。1910フルーツガム・カンパニー、オハイオ・エキスプレスなどが有名だ。

パンクロック

70年代半ば肥大化したロックへのアンチテーゼとして、シンプルで不良っぽい初期ロックンロールへの回帰を歌い、それが経済的不況下で悩むイギリスの若者たちによって、過激で政治色の強いロックへと姿を変え、挑発的なファッションと共に世界中に広まった。80年代に入るとニューウェイブへとつながっていくが、アート指向の強いバンドと、より過激なハードコアパンクへと二分化していく。Jロックではアナーキー、スターリンなどが代表格。

フォークロック

60年代中ごろ、ボブ・ディランをはじめとするフォーク系のアーティストたちがアコースティックギターをエレクトリックギターに持ち換え、ロックのスタイルで演奏を始めたころからこの言葉が使われるようになった。バーズ、ママス&パパスらが知られ、Jロックでは長渕剛、尾崎豊の名が挙がるだろう。

フュージョン

「融合した」という意味で、クロスオーバーの流れをくみ、ロックとジャズや民族音楽などを融合した音楽を指す。70年代終わりからこのブームが始まり、ロック系アーティストのジェフ・ベックなども一時こう呼ばれた時期があったが、その後はジャズ系アーティストがフュージョンのアプローチをしている場合が多い。有名どころはクルセイダーズ、ラリー・カールトン、ハービー・ハンコックで、日本ではカシオペア、T-スクエア、ディメンションが活躍している。

ブリティッシュロック

イギリス生まれのロックの事。ロックは元々アメリカ生まれであるが60年代以降イギリス出身のアーティストに加工され一つの源流となった。当時はリバプールサウンド、ハードロック、グラムロック、アートロックなどをこう呼んだが、最近ではイギリス発のロックをアメリカと区別して言う場合が多い。代表アーティストには、レッド・ツェッペリン、デヴィッド・ボウイ、ローリング・ストーンズ、キンクスの名が挙げられる。

プログレッシブハードロック

プログレッシブロック自体がハードロックの要素も十分に含んだサウンドだったが、80年代に入りヘビーメタルの多様化が進んだように、プログレもどんどん複雑化し、ハードロックやヘビーメタルを吸収しながらより重厚で壮大なサウンドへ向かい、やがてクィーンズ・ライチやドリーム・シアターなどの大作指向の技巧派アーティストが登場するようになった。彼らはヘビーメタルとクラシックを融合させたようなドラマチックなサウンドで、メタルファンからも、プログレファンからも高い支持を得た。Jロックでもノヴェラ、シェラザードが名を博し、少々強引かもしれないが広い意味ではXジャパン、シャムシェイドもここに含まれるだろう。

プログレッシブロック

直訳すると「進歩的なロック」となる。70年代初めイギリスを中心に、それまでのノリ重視のロックから知的な組曲指向の本格的鑑賞音楽のムーブメントが起った。楽器もそれまでのギター主体から、キーボードを中心に新しく登場したシンセサイザーを用い、クラシック音楽の要素を大幅に取り入れて、それまでのロックとひと味違うざんしんなサウンドを聴かせ、後のテクノポップの源流にもなった。ELP、ジェネシス、キング・クリムゾンなどが有名で、Jロックにも古くはコスモス・ファクトリー、四人囃子からジェラルド、テルズ・シンフォニアなどがいる。

ヘビーメタル

72年、ブルー・オイスター・カルトのデビューアルバム『狂気への誘い』でプロデューサーのサンディ・パールマンが、ウイリアム・バロウズの小説「裸のランチ」の中で使われている〝ヘビーメタル（重金属）〟の言葉を当てはめたことが語源。78年にヴァン・ヘイレンが登場したころからハードロックの別称として使われ始めた。ハードロックをベースに、よりメタリックに、よりアグレッシブに、そしてテクニカルかつドラマチックにと進化させたロックで、ヴァン・ヘイレン、オジー・オズボーン、アイアン・メイデン、ジューダス・プリーストなどが有名。Jロックでもラウドネス、スライ、ガーゴイルといろんなタイプのバンドが存在する。

ポジティブパンク

パンクの流れの中でサウンド的な過激さを求めるのではなく、サイケデリックで退廃的なサウンドに進んだ一派。ザン・デス・カルト、セックス・ギャング・チルドレンなどが有名で、Jロックでもインディーズブームの中でも強い存在感を誇ったサディ・サッズ、マダム・エドワルダや、復活したオートモッド1999などがいる。

ミクスチャーロック

ファンク、パンク、ハードロック、ラップなどの要素をミックスした独特のグルーブ感を持ったロック。レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、バッド・ブレインズなどが有名で、ザ・マッド・カプセル・マーケッツ、スーパー・ジャンキー・モンキー、フィール・ソー・バッドのサウンドはハードロックやパンク、ニューウェイブなどをサウンドの中に取り入れたミクスチャーロックと呼べる。

モッズ

60年代前半にロンドンのカーナビー・ストリートを中心に出現した短髪、ジャケット、細いズボンといった独特のファッションに身を包みスクーターを乗り回していた若者たちを「モッズ族（モダン・ボーイズの略）」と呼んだ。そんな彼らが好んだロックスタイルのことで、ザ・フー、アニマルズが代表的なアーティスト。

リバプールサウンド

60年代前半、アメリカのロックンロールに影響されて、イギリスのリバプールを中心に登場した初期ブリティッシュロックの総称で、リバプールを流れるマージー川から名前を取って〝マージービート〟とも呼ばれている。ロックンロールにアイドル的要素を加えたイキの良いポップなサウンドが特徴で、代表格のビートルズはだれもが知るように後のロック、ポップスに多大な影響を与えた。他にはジェリー&ザ・ペースメーカーズ、ピーター&ゴードンなどが有名。宇徳敬子の新曲「あなたが世界一」や、そのカップリング曲「Woo Baby」でビートルズの影響を受けたような心地よいリバプールサウンドが聴ける。

ロカビリー

50年代後半に大流行したロカビリーは、その名の通りロックンロールに〝ヒルビリー（初期のカントリーミュージック）〟の要素が加わって生まれた初期のアメリカン・ロック。しかし、60年代に入るとロックンロールに吸収されていく。エルビス・プレスリーが代表的で、ブランキー・ジェット・シティ（『Red Guitar and the Truth』）やディープ（『路地裏と少年』）のサウンドには、ロカビリーの影響が強く現れている。

ロック

50年代半ばに生まれたロックンロールを原型に、いろんなジャンルの音楽やテクノロジー、文化などを吸収した幅広い音楽スタイルやムーブメントの総称として使用されている。

ロックンロール

50年代半ば黒人によって生まれたリズム&ブルースと、白人によって生まれたカントリー&ウエスタンの融合によって誕生し、8ビート、スリーコードを基調としたサウンドが特徴。アメリカの歌手ビル・ヘイリーが放った「ロック・アラウンド・ザ・クロック」が大ヒットし、同じくビルのヒットナンバー「シェイク・ラトル・アンド・ロール」の2曲をもじって、DJのアラン・フリードが「ロックンロール」と言ったことが語源だと言われている。チャック・ベリー、リトル・

リチャードなどが有名で、Jロックでもキャロルが代表格で、シーナ&ザ・ロケッツも「ROCK ON BABY」の「あなたの匂い」で、オーソドックスだがけっして古さを感じさせないロックンロールを聴かせてくれる。

ロンドンパンク

70年代後半、ニューヨークパンクがロンドンに飛び火してパンクが若者たちのストリートでの合い言葉になる。不況などでフラストレーションの溜まっていたイギリスの若者には、自分たちの不満のはけ口が身近なパンクロックで実現したのだ。セックス・ピストルズ、ザ・クラッシュ、ザ・ジャムなどが名高い。

ジャングル

80年代後半からイギリスで流行していた、速いテンポのハウスやテクノビートにレゲエの要素を加えたもので、レゲエの人間くさいリズムとテクノの機械的なリズムのミックスが心地よいビートを生む。小室哲哉がエ Jungle With tで大ヒットさせたので、どんなサウンドなのかは想像がつきやすいだろう。

ディスコ

ソウルやファンクが中心だった"ディスコサウンド"に、ディスコバージョンというダンス用のリミックスが登場し、最近ではテクノ、ハウス、ユーロビート、レイブなどがそう呼ばれている。これらは鑑賞用ではなく、あくまでも踊れることを目的として作られたサウンドであり、一定のテンポで繰り返されるノリのいい機械的なビートで、リズムやベースが強調されているのが特徴。ビーズの「恋心」は懐かしいディスコサウンドが取り入れられている。

テクノポップ

70年代後半からシンセサイザー、シーケンサー(コンピュータ)、リズムマシンなどのエレクトリック楽器を多用した実験的サウンドを指向し、人間と機械のせめぎ合いを表現したムーブメント。とくにドイツから多くの逸材が現れ、日本からもイエロー・マジック・オーケストラ(YMO)という世界的に影響力のあるユニットが登場した。テクノとはYMOが自分達の音楽の説明に使った言葉で、海外ではエレクトロポップと呼ばれた。後のニューウェイブや黒人ミュージシャン達のヒップホップにも示唆を与え、現在のダンスミュージックシーンにも"テクノ"のキーワードは残っている。クラフトワーク、ゲイリー・ニューマンなどが代表的だ。

ハウス

80年代半ばのシカゴのディスコ「ウェアハウス」から生まれたダンスビート。そこのDJフランキー・ナックルズらがクラフトワークなどのテクノサウンドにシンセサイザーで打ち込みを加えたりして作ったサウンドが、シカゴのインディーズシーンで流行していたが、それらがイギリスで受け、ハウスブームがヨーロッパ全土に広がった。ピチカート・ファイヴ『EXPO 2001』の「go go dancer」ではピチカート流ハウスサウンドが聴け、意外にも黒夢『FAKE STAR』の「BARTER」「ピストル」はハウスのビートを取り入れている。

ユーロビート

80年代前半にヨーロッパで発生したディスコサウンドで、1オクターブ交互に変わるベース、単純で機械的な16ビート、踊りやすく分かりやすいメロディーが特徴だ。大黒摩季のハイテンションな「熱くなれ」はユーロビートを感じさせる。

レイブ

89年ごろからイギリスで盛り上がった巨大な野外ディスコとも言うべきダンスイベント、あるいはそれに使われるサウンドのこと。ユーロビートよりも派手さを出すためにオーケストラヒットやブラスヒット(トランペットなどの金管楽器を一斉に演奏したような音)を多用している。80年代後半にヨーロッパでムーブメントとなったレイブに遭遇した小室哲哉は、ロックのボーカルとギターがなくてもそのパワフルさをシンセサイザーで表現できることを悟り、そこから現在の彼のサウンドが生まれたという。

ゴーゴー

激しく体を動かすダンスであるモンキーダンス、スイム、リンボーなどのスタイルの総称でもあるゴーゴー。そのBGMともなったマージービート、フォークロック、モータウンサウンドなどのリズムが激しくなったサウンドを指す。ザ・イエロー・モンキーの「jaguar hard pain」の「赤裸々GO!GO!GO!」で、取り入れられている。

ダンスミュージック

60年代はツイストやゴーゴーなど白人のロックンロール主体のダンスミュージックが流行。そして70年代はソウルから16ビートを取り入れたファンクが全盛となり、黒人音楽の影響が大きくなってくる。80年代に入るとマイケル・ジャクソンのブレイクダンスなどが一世を風靡(ふうび)するが、それ以降はラップやヒップホップが本国のアメリカよりもイギリスでハウスミュージックとして大人気を博すようになった。そしてソウルを下敷きにしたアシッドジャズや、反復するテクノビートによって陶酔感やトランス感を味わうアシッドハウスやアンビエントハウス、それらの流れをくんだ野外ディスコとも言えるレイブなどがダンスミュージックの主流となっていく。これらを日本に取り入れたのがエイベックスレーベルを中心とするダンス音楽であり、TRFに始まって今をときめく小室ワールドへとつながるのである。

ツイスト

60年代ごろ若者たちの間で大流行したダンススタイルで、手足を動かしながら腰をくねらせる、ごく簡単な踊りであるツイスト。そのBGMともなった軽快でノリやすい初期のロックンロールナンバーを指す。ツイスト王とも呼ばれるチャビー・チェッカーなどが有名で、ザ・ハイロウズの『◆THE HIGH-LOWS◆』の「ツイスト」でツイストサウンドがたん能できる。

ヒップホップ

80年代前半にサンプラーやターンテーブル(レコードプレイヤー)を楽器として使い、既成のレコードから切り取ったサウンドを再構築する事によって、全く新たに生み出されたダンスミュージックの総称、あるいはそのムーブメント。体を丸めてコマのように回転するブレイクダンス、ラップなども含まれ、ニューヨークの下町の若者の遊びから始まったものが、瞬く間に世界的なカルチャーへと発展した。ランDMCが有名で、m.c.A・Tなどもこれに含まれる。

ラップ

70年代後半、ニューヨークの黒人DJによって発案されたダンスミュージックの一つで、後のヒップホップ・ムーブメントの起源となった。独特のイントネーションの語りをリズミカルに早口でダンスビートに乗せていく。日本ではイースト・エンド×ユリ、スチャダラパーなどがこれ。

ビートポップ

60年代を通して流行したロックンロール、R&Bをベースにしたビートを強調したポップ。ビートルズを中心にしたリバプールサウンド(マージービート)やザ・フーを代表とするモッズなどをまとめてこう呼んだ。

フレンチポップス

読んで字のごとくフランス出身のポップス。サウンドはアーティストによって若干異なるが、オシャレに聞こえるフランス語がポップでキュートなメロディーに乗り、軽いリズムとソフトなテイストが特徴だ。60年代は「イエィ～イエィ」に代表されるフランス・ギャルなどのガールポップが流行し、70年代にはメロディアスでビートのあるミッシェル・ポルナレフなどが登場。日本でこのテイストを感じさせるのは原田知世、カヒミ・カリィなどだろう。

ポップス

「POP(大衆的な)」の複数形で、大衆音楽(ポピュラーミュージック)を指す言葉であり、それだけだれにでも分かりやすくキャッチーなサウンドであることが条件とされる。これと対極に位置するのが"アンダーグラウンド"や"インディーズ"だ。

アンビエント

「周囲、囲まれた」と言った意味から"環境音楽"と訳される造語。70年代ロキシー・ミュージックのキーボディストとして活躍したブライアン・イーノはグループ脱退後数々のユニークなバンドをプロデュースしながらソロアルバムのアンビエントシリーズを発表する。この呼び方はそのアルバムの中で彼自身が命名した言葉である。時間軸を超越したようなゆったりした、リズム感覚の薄い彼の音楽はテクノ系のミュージシャンに多大な影響を与え、アンビエントハウス、アンビエントテクノと呼ばれるジャンルまで生まれている。日本では、細野晴臣がプロデュースしたラブ・ピース&トランスの名が挙がる。

オールドタイムカントリー

カントリーミュージックの初期のスタイルを言う。使用楽器はフィドル(バイオリンの事)、バンジョー、マンドリン、アコースティックベースなどで、カーター・ファミリーが良く知られている。

カントリー&ウエスタン(C&W)

アメリカへ移住したヨーロッパ系の白人移民がアメリカでの生活の中で故国の民謡を基に生み出した音楽。カウボーイソングやブルーグラスを総称して言い、代表アーティストはハンク・ウィリアムスなど。

クラシック

ポピュラー音楽に対して西洋の古典音楽をこう呼ぶ事が多い。ロックとの関わりについては、初めてクラシックを取り入れたバンドにビートルズが挙げられる。本格的には、70年代はじめのプログレッシブロックの連中がクラシックを取り入れ、エマーソン・レイク&パーマーはムソルグスキーの「展覧会の絵」をそのままアレンジしたアルバムを発表。プログレのバンドはキーボード中心の構成が多く、それまでのギターバンドとひと味違っていたがキーボード主体だとクラシックが取り入れやすいとも言える。また、ヘビーメタル系のサウンドはバッハに見られるような様式美を持っているものが多いが、これもクラシックの要素を取り入れている。

ゴスペル

20年代に黒人達によって教会で歌われた賛美歌、福音歌をこう呼ぶ。コーラスの掛け合いや、トランス状態にまで達するほど感情が高められるビート感が、後年のリズム&ブルースに多大な影響を与えた。代表アーティストはマヘリア・ジャクソンなど。また、大黒摩季が『永遠の夢に向かって』の「Stay with me baby」で、オープニングやコーラスワークにゴスペルのテイストを盛り込んでいる。

カンツォーネ

シャンソンと同様に「歌」の意味を持つイタリアの歌謡曲。60年代シャンソンのブームと同じように流行しサンレモ音楽祭のヒット曲が日本でもヒットチャートに昇ったが、現在は影が薄い。ボビー・ソロ、ミルバ、エンリコ・マシアスなどが代表的。

サンバ

20世紀はじめブラジルのアフリカ系民族音楽を土台に生まれたカーニバル用の行進音楽が起源。ドラムなどの打楽器をメインに使用する明るくノリの良い2拍子のリズムで感情的なサウンドが特徴だ。そして、夏の雰囲気を出すポップスには必ずと言っていいくらい、サンバのリズムが採用されている。オリジナル・ラヴの『EYES』の「WALL FLOWER」もサンバテイストのナンバー。

シャンソン

フランスの歌謡曲で「歌」と言う意味を持ち、民謡、俗謡から発展したポピュラーソング。主に語り口調で物語的に人生観を歌い、60年代に一時ブームとなった。また、シャンソンをポップにしたフランス・ギャルに代表されるヨーロッパ的ポップスには、今でもファンが多い。アダモ、イブ・モンタン、シャルル・アズナブールなどが名高い。

タンゴ

19世紀の後期にスペインの舞曲とアフリカ系の移民の民族音楽が混ざりあってアルゼンチンで出来た音楽（アルゼンチンタンゴ）、その後ヨーロッパに逆輸入されダンス音楽やポピュラーとしてより洗練されたタンゴをコンチネンタルタンゴと呼ぶ。2／4拍子で強調されたリズムと、バンドネオン（アコーディオン）の使用が特徴。ザ・イエロー・モンキーが『jaguar hard pain』の「薔薇娼婦麗奈」で、タンゴのリズムを使っている。

フォーク

フォークとは「民謡」を意味する言葉。アメリカのフォークはヨーロッパに源を発しているが、民衆の間で長く歌い継がれてきた歌をフォークソングという。60年代以降に活躍したピーター・ポール＆マリーやボブ・ディランらをモダンフォークと呼ぶのに対して、それ以前のものをトラディショナルフォークと呼ぶようになった。フォークの音楽スタイルにはアコースティックギター（フォークギター）などの生楽器が使われる。キングストン・トリオ、ブラザーズ・フォーなどが有名で、日本でも吉田拓郎、井上陽水、泉谷しげる、岡林信康などの名が挙がる。また、小沢健二の『LIFE』の「いちょう並木のセレナーデ」は現代版フォークソングと言えるだろう。

ブルーグラス

50年代以降に発展したカントリーミュージックの一つのスタイル。次第に独自性を失いつつあったカントリーに伝統的な楽器構成とボーカルを復活させたと同時に、新しい演奏法も生み出し、後のフォークムーブメントにも大きな影響を与える。代表的なアーティストはブルーグラス・ボーイズなど。

ボサ・ノバ

ポルトガル語で「新しい感覚」という意味を持ち、60年代初頭にブラジルのサンバとジャズがミックスして生まれたリズム。ブラジルの作曲家ジョアン・ジルベルトが作り出したと言われている。クールでシャレた雰囲気が当時の映画音楽やポップスに取り入れられ大流行した。アストラッド・ジルベルト、スタン・ゲッツ、セルジオ・メンデスなどが有名で、最近では坂本龍一やピチカート・ファイヴが新しい感覚でサウンドに取り入れ、ラルク・アン・シエルが『Tiera』の「眠りによせて」でボサ・ノバを自分たちのサウンドに融合させている。

ラテンサウンド

元々は南アメリカ諸国、ブラジル、アルゼンチン、チリ、ペルーなどの音楽の総称として使われていたが、最近ではジャマイカ、キューバ、メキシコなども含んだ民族音楽の総称として使われる場合が多い。特徴としてはボンゴ、コンガ、ギロ、マラカスなどの打楽器の使用によって生まれる、明るく開放的な点がある。これもオリジナル・ラヴが『風の歌を聴け』の「The Best Day of My Life」でラテンのリズムを取り入れている。

ワルツ

19世紀ヨーロッパの3拍子の舞曲をこう呼んだが、今では3拍子を表す言葉として使う場合が多い。クラシック界ではヨハン・シュトラウスがワルツ王として著名だ。kyoが「strip」の「飛行船」でワルツのリズムを取り入れ、トモフスキーの『WALTZ』は全曲ワルツのナンバーが収録されている。

アイドル系

〝アイドル〟という呼び方は、女性では天地真理、麻丘めぐみ、アグネス・チャンらが登場した70年代初めから始まり、男性では60年代中ごろのジャニーズから始まったジャニーズ事務所が輩出する歌手やグループの登場からだろう。そのころは歌謡曲として広く大衆に迎えられたが、70年代中ごろから状況が変わってくる。松田聖子の楽曲を元はっぴいえんどの松本隆や細野晴臣がプロデュースから手掛け、中森明菜も新曲を出すごとにサウンドのロック化が進んでいった。そして次第にロックとの垣根が取り払われていったのである。最近ではSMAPやTOKIOの曲は、くだらないロックバンドの曲よりもクオリティーが高く、十分にロックしている。あるいは逆に一部ロックアーティストのアイドル化が進んでいるのかもしれない…。

演歌

その語源は、江戸時代に民衆の不満やその時々の事件を歌った演歌士からきている。だから当時は流行歌でもあり、フォークソングでもあったのだ。それがいつの間にか男女の恋愛、それも耐え忍ぶ詞の内容が多い今のスタイルへと変化していったのである。しかし、今の演歌をよく聴くとブルースのエッセンスやゴスペルの歌い方など、外国のルーツミュージックのにおいをかぐことが出来たりするのだ。やはり日本産の音楽である演歌の背景にも、ブルース、ゴスペル、ソウルなどと共通するスピリチュアルなものがあるのだろう。北島三郎、山本譲二、八代亜紀、都はるみ、森進一らが代表的。

沖縄ロック

72年にアメリカから返還された沖縄は本土から見ると音楽的にも一番近い〝異境〟ということになる。沖縄のルーツミュージックと、米軍の駐留によって生まれた〝洋楽の香り〟。その二つに根差したアーティストが70年代から数多く登場した。彼らは大ヒットには恵まれないが長期にわたって良質の音楽を提供してくれるアーティストが多く、紫、コンディション・グリーン、喜納昌吉＆チャンプルーズなどが有名。

歌謡曲

戦後の復興は歌謡曲と共にあったと言われている。並木路子の「りんごの唄」は当時の日本人を心から元気づけたというし、その後も幾多の歌が流れゆく時代の中で大衆の間で歌われてきた。50～60年代にかけてのロカビリーブームの中で歌われた洋楽のカバーも、橋幸夫などの歌う民謡系の歌も、70年代のアイドルの歌も、みんな流行歌であり、即ち歌謡曲だったのである。しかし、フォーク、ニューミュージックがロックに吸収されていったように、歌謡曲もまたロックへ傾倒していき、今では演歌系が辛うじてその枠の中で生き残っている。

ガールポップ

バンドブームの衰退によって、今度はソロアーティストにスポットが向けられた。そして、ほとんどなくなってしまった〝レディースロック〟に対して、女性シンガーソングライターからロック系の女性歌手も含めて〝ガールポップ〟なる総称がマスコミによって作られたのである。永井真理子、広瀬香美、森高千里、田村直美、GAOなどが代表的。

グループサウンズ（GS）

60年代半ばビートルズやローリング・ストーンズに影響を受けた和製ロックグループ（当時はこのように〝和製～〟というのがはやった）が数多く登場した。これらを総称して〝グループサウンズ〟と呼んだ。彼らはプロダクションによって作り出されたバンドが多く、自分達自身で曲を作ることが少なかったため、60年代後半のヒッピームーブメントやフォークブームに培われた若者達の自立心を前に姿を消していった。スパイダース、ザ・タイガース、テンプターズ、ワイルド・ワンズなどが有名。最近ではシーンのように、GSサウンドをベースにしてサウンドを構築しているケースもある。

小室系

TMN解散後の小室哲哉が手掛けたアーティストをこう呼ぶ。それまで日本に根付いていなかったダンスミュージックを広く日本に紹介し、日本では「縁の下の力持ち」的な存在で表舞台には出なかった音楽プロデューサーの地位を高めた。また、インディーズのダンスレーベルだったエイベックスを一躍メジャーレコード会社と肩を並べるまでに成長させたサクセスストーリーは日本の音楽業界に喝を入れた。TRF、安室奈美恵、グローブ、hitomiらがそれ。

Jロック

Jロックの歴史は常に欧米の影響から生まれて来た。ロック自体が日本文化の中には存在しないものであるから当然のことだが、ここでは簡単にその歴史を見てみよう。

第二次世界大戦後米軍が日本に駐留していたこともあって、50年代からカントリー＆ウエスタンを中心にしたウエスタンカーニバルが開かれるようになり、そこでエルビス・プレスリーをカバーした、平尾昌晃、ミッキー・カーチスらのロカビリーバンドが大人気となった。60年代に入ると海外で絶大な人気を誇っていたベンチャーズ、ビートルズに影響されたエレキブームやグループサウンズ（GS）のブームが訪れる。しかし、60年代後半にジミ・ヘンドリックス、クリーム、レッド・ツェッペリンらが登場し、ウッドストックフェスティバルを代表とするヒッピー文化など若者のアイデンティティーが紹介されると、それまでプロダクション主導型アイドル路線のGSは急速に衰えていく。そしてロックの流れは世界に通用する日本のロックバンドを目指すグループと、若者の意識を変革させるフォークムーブメントの二つの流れとなっていった。

一つ目の流れはクリエイションやフラワー・トラベリン・バンドなどの英語による自作ハードロックのムーブメントである。彼らは世界進出にこだわり、その意識は後のラウドネス、バウワウ、最近ではXジャパンにまで連綿と受け継がれている。

もう一つは関西が中心となったアンダーグラウンドフォークの流れである。フォーク・クルセダーズの実験的な音作りや高石友也、岡林信康らに代表されるインディーズレーベル設立はフォークブームが去った後のパンクや現在のインディーズの基となったと言える。またその中から日本のロック、ポップスの土台を作ったはっぴいえんどが登場し、自分達で作った日本語によるロックの試行錯誤を繰り返し、解散後も松任谷由実、山下達郎、果ては松田聖子までを世に送り出し、ニューミュージックと呼ばれる一大勢力を作り出した。そしてそれは、それまで一部の若者文化だったロックをビジネス的に成立するまでに仕上げた事を意味する。

70年代の終わりには海外のパンクムーブメントの影響とメジャーとなった日本のロックに反発する動きとして東京ロッカーズを中心とする新しい自由の波が起こる。彼らは多くのインディーズレーベルを立ち上げ、独自のユニークな活動を行い、その影響は80年代になってラフィン・ノーズ、ウイラード、有頂天などに受け継がれ、後のバンドブームへとつながるのである。

一方の〝はっぴいえんど組〟は70年代後半からドイツのエレクトロポップの影響を受けて細野晴臣をリーダーとするYMOが〝テクノ〟をキーワードに新しい波を起こす。彼らはイギリスのバンド、ジャパンと交流し、世界的な規模で成功を収めた。その影響を受けたTMNは小室哲哉というダンスミュージックの逸材を生み出し、日本の新しいポップスのジャンルを切り開くのである。

また、バンドブームが訪れると、インディーズで力を着けたグループが多くメジャーシーンに登場。ザ・ブルー・ハーツ、バクチク、筋肉少女帯、Xジャパンなどである。彼らはライヴハウスで鍛えられた演奏能力を武器に、スーパーバンドにのし上がっていく。また他にも80年代後半から、肥大したロックに反発するアンチテーゼやデジタルに抗するサウンドの追求等が同時に進み、ネオアコースティック・ムーブメントや60～70年代へのロック原点回帰が始まっている。これらは、小沢健二、斉藤和義、ミスターチルドレン、スピッツ、ザ・イエロー・モンキーなど多くのアーティストに共通したテーマとも言える。

いずれにしろ、これらを総称したJロックは、空前のビジネスとして肥大化し続け、これからもその傾向は止まりそうにない。

渋谷系

渋谷という特定された地域に集まる10～20代の若者、その中でも常に新しい音楽へのアンテナを立てているハイセンスなリスナーから高く支持されているアーティストに対してネーミングされた。しかし、このマスコミによって命名された〝渋谷系〟なる言葉が、いつの間にか全国規模で使われだしたのである。アーティストは音楽的趣向もバラバラだが、他の地域から見れば最先端ポップスの指標としては成り立つだろう。オリジナル・ラヴ、ピチカート・ファイヴ、コーネリアス、小沢健二などが該当する。

ニューミュージック

70年代中ごろフォークがメジャー化し、松任谷由実、山下達郎らが作り上げた日本ならではのポップスをそれまでの音楽と比較してこう呼んだ。それまでの四畳半趣味を否定したファッショナブルなサウンドが主流になっていったが、80年代に入り歌謡曲との差別化が難しくなってくると次第にこの言葉も廃れていく。

ビジュアル系

「PSYCEDELIC VIOLENCE CRIME OF VISUAL SHOCK」をテーマにインディーズシーンで暴れていたX。彼らの登場により「ケバいメイクのド派手なヘビメタ野郎」は〝ビジュアル系〟と総称されるようになった。バンドのオリジナルの表現がサウンドだけでなく、バンドスタイルやビデオなどの視覚的なアプローチにまで広がり、Xを筆頭にルナシー、ジキルなど当時は個性的で頼もしいバンドが多かったが、いつのころからかアーティストの個性が欠落し、サウンドどころか演奏さえもお粗末な、ルックスだけで中味のない連中まで含んだ総称へと変わっていった。

めんたいロック

明太子が博多の名産であることから九州でも福岡出身のロックをこう呼ぶ。元祖である鮎川誠率いるサン・ハウスが70年代にデビューし、後のパンクムーブメントにも多くのバンドを輩出している。アーティストによって若干の違いはあるが、いい意味で荒削りで力強いビート感がサウンドの根底に根付いている。代表的なアーティストはシーナ＆ザ・ロケッツ、ルースターズ、ロッカーズなど。

レディースロック

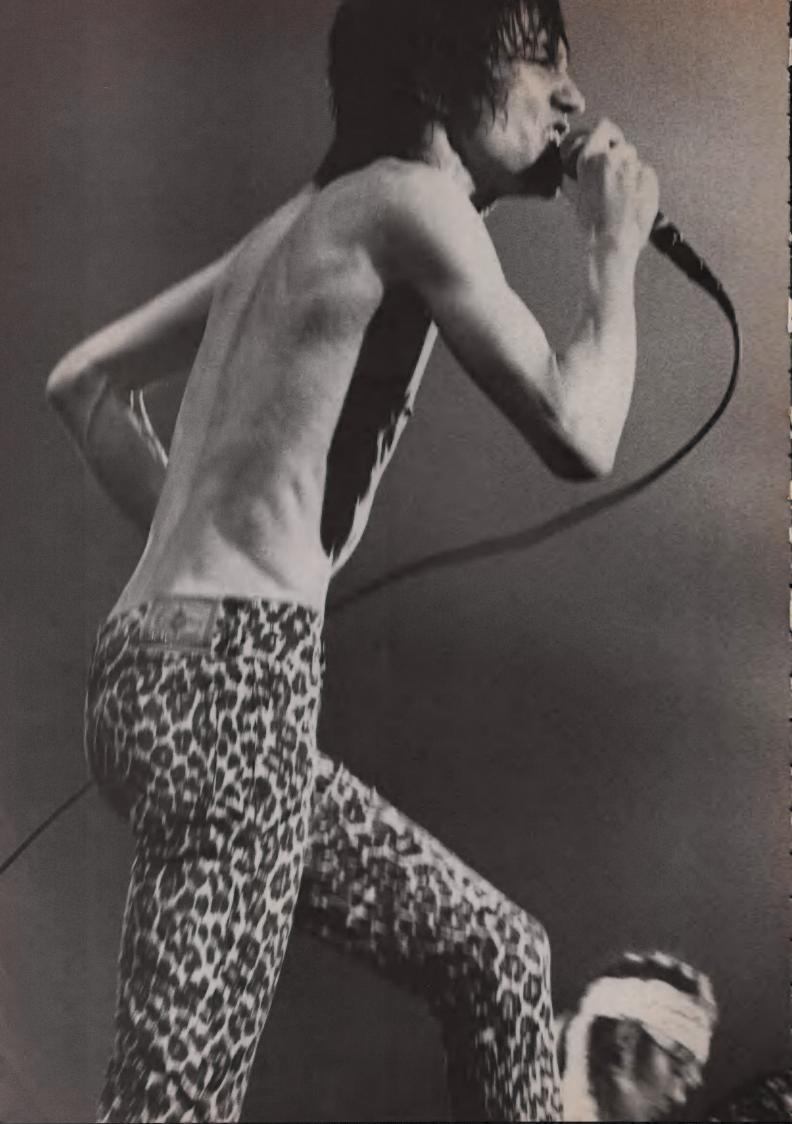
70年代までは女性が活躍するロックバンドはサディスティック・ミカ・バンドやカルメン・マキ＆OZくらいで数少なかった。しかし80年代に入るとゼルダを筆頭に女性のロックへの進出が目立ち始め、その後やってきたバンドブームにもあおられて、多くの女性バンドがシーンに登場。そんな彼女たちを総称した言葉だったが、バンドブームの衰退と共に、その数も激減し、男女平等の現在ではほとんど死語に近い。山下久美子、浜田麻里、シヨーヤ、渡辺美里、プリンセス・プリンセスらがその中心となった。

ゴスペル
ブルース
カントリー＆ウエスタン
フォーク
ダンスミュージック
リズム＆ブルース
1950
1960
1970
1980
1990
ドゥー・ワップ ■スパニエルズ
ロックンロール リズム＆ブルース
ロックンロール ポップス
ロック
カントリー＆ウエスタン
アメリカンロック
ロカビリー ■エルビス・プレスリー
スカ
ブリティッシュロック
ソウル
モータウンサウンド ■ダイアナロス＆ザ・シュープリームス
ブルー・アイド・ソウル ■ラスカルズ
リバプールサウンド ■ビートルズ
モッズ ■ザ・フー
サーフミュージック ■ビーチ・ボーイズ
ツイスト ■ハンク・バラード
ゴーゴー ■ジョニー・リバース
フォークロック ■ボブ・ディラン
ジャズ
サイケデリック ■ピンク・フロイド
カントリー＆ウエスタン
ハードロック ■レッド・ツェッペリン
イーストコースト ■ラモーンズ
レゲエ ■ボブ・マーリー
ファンク ■スライ＆ザ・ファミリー・ストーン
ジャズロック
バブルガム ■1910フルーツガム・カンパニー
アートロック ■クリーム
ウエストコースト ■イーグルス
グラムロック ■T・レックス
フィラデルフィアサウンド ■ザ・スリー・ディグリーズ
プログレッシブロック ■ELP
カントリーロック ■イーグルス
サザンロック ■オールマン・ブラザーズ・バンド
ニューヨークパンク ■パティ・スミス
パンク
ヘビーメタル ■アイアン・メイデン
AOR ■シカゴ
ブラコン ■ライオネル・リッチー
クロスオーバー
フォークロック
ロンドンパンク ■セックス・ピストルズ
ニューウェイブ ■PIL
ラップ ■グランドマスター・フラッシュ＆フューリアス・ファイブ
2トーン ■スペシャルズ
フュージョン ■クルセイダーズ
ハードロック ヘビーメタル
ネオアコースティック ■オレンジ・ジュース
スラッシュメタル ■メタリカ
デスメタル ■ヴェノム
L.A.メタル ■ラット
ノイズ ■スロッビング・グリッスル
テクノ ■クラフトワーク
ユーロビート ■ノーランズ
ニューロマンティックス ■デュラン・デュラン
プログレッシブハードロック ■クイーンズ・ライチ
ヒップホップ ■ランDMC
ハウス ■テン・シティ
パンク
ミクスチャーロック ■レッド・ホット・チリ・ペッパーズ
レイブ ■フレンチキッス
ジャングル
グランジ ■ニルヴァーナ

↑THE HIGH-LOWS↓

TOUR '96『KING BISCUIT TIME』

June 9th 1996 at Kobe Harborland Plaza Hall

理屈はいらない! 音楽バカが生み出す最強のライブ

たまんないなあ。カッコいいなあ。ドキドキするなあ。ライブが行われた約2時間、こんな思いが何度も何度も頭の中をグルグルと回っていた。いつもなら一生懸命メモを取りながらちょっとばかり頭を使い、「うわあ〜」とか「すごい〜」って気持ちや衝撃をどう表現すればいいかと、意識の5分の1ぐらいをそこに傾ける。しかし今日のライブはちょっと違った。考えようと思っても、何がどうっていう理由とか、あれがこうだからっていう理屈がなかなか見つからない。ライブ終了後に見返したメモには、「気持ちいい」とか「ワクワクする」とか、感情から吹き出したそのまんまの言葉が1曲に1回は必ず出て来る。普段はその後に「○○だから」という、何かしらの理由がなぐり書きされていたりするんだけど…。

柔らかなブルースが静かに響く会場の一番後ろで開演を待つ私の目の前を、席を求めて何人もの観客が行き来する。ロビーで売られていたオレンジ色のツアーTシャツに着替えたり、何だか顔をニヤつかせてステージを見つめたり…、彼らの高まる気持ちが刻一刻と場内に充満していき息苦しいほどだ。

客電が落ちるとトランペットが響くボサノバ調の曲に乗ってマーシーを先頭に調、大島、白井がステージに登場。一瞬にしてスタンディングになった客席から、男の子の声を中心にしたまさに雄叫びが起こる。1曲目は「グッドバイ」。耳へ飛び込むと同時に、心の導線に電流が走るあのギターリフで幕開けだ。ヒロトが腕を振って勢いよく登場すると、ステージ後方の幕が落ち、〝↑THE HIGH-LOWS↓〟というでっかい文字が現れた。スタンドマイクを握り締め独特のアクションで歌うヒロトの声と、スピード感いっぱいにはじけ飛ぶ強じんなサウンドが、そのまま惜しげもなくまっすぐにぶつかってくる。手加減なしにその中にダイブする観客との衝突で生まれる火花の美しさは、一体感というありきたりの表現では物足りない。両者はまるで溶け合うように一つになって、音楽に対する純粋な感情をありのままに放出している。たまんないなあ、この感じ。

「新曲をやる時はこういうポーズをします。ということは、無理矢理ノルな、気に入ったら楽しめってことです」とウルトラマンのようなポーズを取って笑いながら話すヒロト。彼は「これは礼儀っちゅうもんです」と冗談っぽく続けたが、当然なようでこれがなかなか難しい。大好きなアーティストのコンサートでは、音楽の善しあしに関係なく「とにかくのらなくては」という勘違いに陥りがちなのだ。しかし、本当のファンとしての礼儀は、ヒロトが話すように曲に対する素直な反応を示すこと。これは、安定したリズムの上でボーカルとギターがはじけるミドルナンバー「アレアレ」、ちょっと怪しげでまさにヒロトのステージングのための(?)「ヌゲヌゲ」など、たくさんの新曲が披露された今日のライブの出来を左右する大きなポイントだったが、観客はアドバイス通り曲を聴いた上での感情を明確に示していた。アグレッシブなギター&ベースが刃物のような鋭さを感じさせる新曲「キャブレターブルース」では、曲に飲まれたかのように激しいリズムに体を小さく合わせ、終われば精一杯の拍手。じっくり聴いてみたり、手拍子でのってみたり、ありのままの反応を見せる。

大島のキレのいいタイトなドラミングと白井の軽やかなピアノに合わせて、他の三人が客席にお尻を向けて振っている。観客に笑い声が上がったのも束の間、マーシーのギターが泣き、ヒロトのブルースハープが叫び、調のベースがうなり、一瞬にして巨大な音塊が押し寄せた。単調なリズムとメロディーが繰り返される「ママミルク」。そこにはシンプルなものしか持てない無敵の力強さがあり、ホットミルクを頭からぶっかけられたような熱さと比類ない独特なにおいに思わず鳥肌が立つ。

「ビッグマシン」「ツイスト」「BGM」と次々響くR&Rに、全員が体からわき出る衝動を次々と爆発させ、その振動で震えが止まらない会場。ステージには確かにザ・ハイロウズというバンドが存在するが、ステージと客席の間に〝聴かせる人〟と〝聴く人〟なんて隔たりは存在せず、なりふり構わず音楽を心底楽しんでいる人間があふれ返っている。カッコいい音楽にどっぷりと漬かって「ああ最高!!」、そんな音楽バカたちが生む最強のライブがザ・ハイロウズのライブだ。

終盤は、分厚い音と共にマーシーの荒々しい声が襲いかかってきた「バナナボートに銀の月」、ニューシングル「相談天国」でスパートをかけ、放出しているはずのパワーがどんどん体内に逆流してくる不思議な感覚に「ミサイルマン」「スーパーソニックジェットボーイ」がさらに追い打ちをかけて幕を閉じた。数分後、「ゴー・ハイロウズ・ゴー」という一つになった観客のかすれ声によって、ステージに再び照明がともされたのは言うまでもない。

ザ・ハイロウズの音楽に圧倒され引き込まれ溶けてしまうことが、最高に気持ち良くドキドキした2時間。この理由は何だろう? ライブ中、何度か試みた考えようとする脳ミソに、あふれてくる感情が勝ってしまった。歌やメロディーを口ずさんでしまった。体が動き出してしまった。きっとこれがすべての理由なんだと思う。彼らの装飾とか技巧を一笑に付してしまうストレートなR&Rが、楽しくて、カッコ良かった。ただ、それだけ。

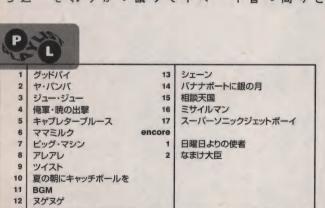
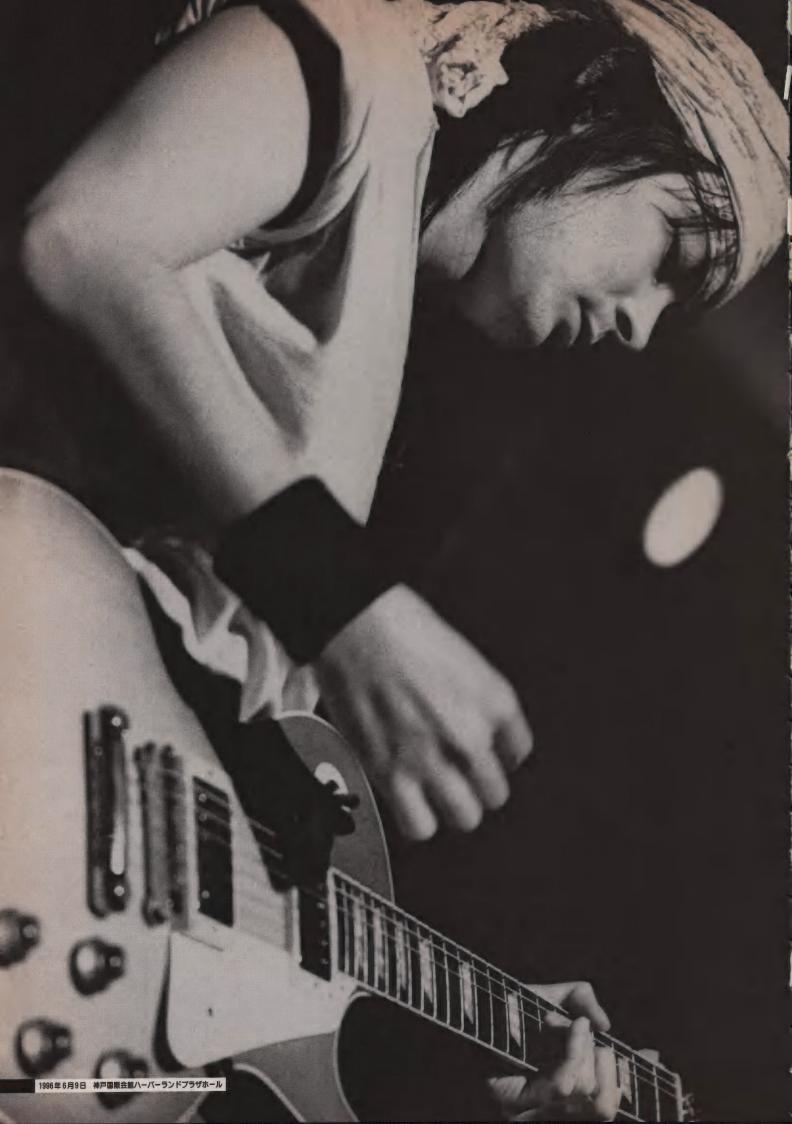
ヒロトがアンコールの最後に客席に投げた「サンキュー、面白かったよ」。その言葉をそのままザ・ハイロウズに返したい。

［文・山田純子　撮影・浅野順子］

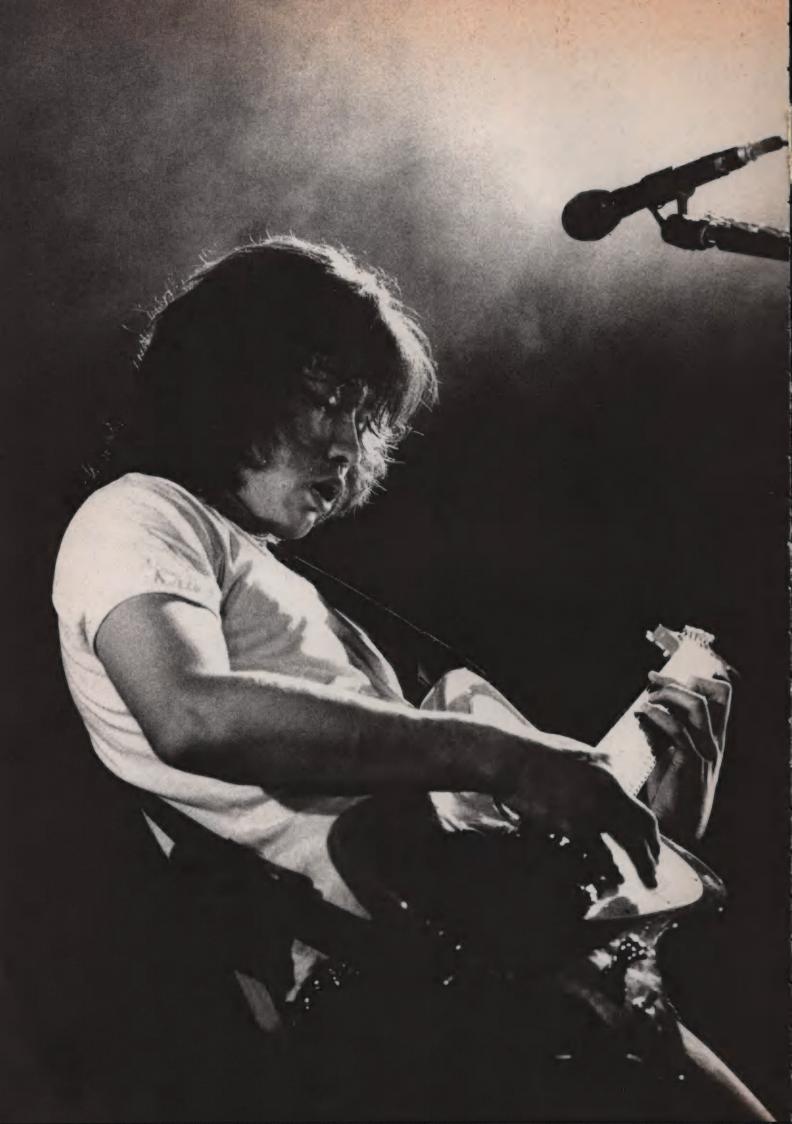
1	グッドバイ	13	シェーン
2	ヤ・バンバ	14	バナナボートに銀の月
3	ジュー・ジュー	15	相談天国
4	俺軍・暁の出撃	16	ミサイルマン
5	キャブレターブルース	17	スーパーソニックジェットボーイ
6	ママミルク	encore	
7	ビッグ・マシン	1	日曜日よりの使者
8	アレアレ	2	なまけ大臣
9	ツイスト		
10	夏の朝にキャッチボールを		
11	BGM		
12	ヌゲヌゲ		

1996年6月9日　神戸国際会館ハーバーランドプラザホール

↑THE HIGH-LOWS↓

LISTEN
BISCUIT-TIME
OVER RADIO STATION
K.F.F.A OF
HELENA.AR

斉藤和義

SPECIAL STANDING LIVE '96『お立ちなさい』

June 22th 1996 at Osaka IMP Hall

キースになりきった夜
今日の俺、最高にハッピーだったよ、イェイ!

斉藤和義の30回目のバースデイでもあるこの日のライブは、カバー曲もプレイするという本人もお楽しみのお祭り的要素を持つオールスタンディングライブ。開演時刻の15分前には、オープニングアクトとして工事現場のおっちゃんよろしくのいでたちで和義とマネージャー、ローディーで編成されたバンド、ムツミ製作所が登場。スタッフがボーカルをとる「歩いて帰ろう」からスキンヘッドのド迫力マネージャーの雄叫びによるマイケル・シェンカーのヘビメタまでカバー4曲が披露され、のっけから大ノリの学園祭ムードで幕は上がった。

盛り上がった斉藤和義本人が勢いあまって今夜のライブを自らレポートする。

ムツミのお陰か会場はリラックスムードが漂っている。そろそろ行こうか。本編1曲目に選んだのはキース・リチャーズのカバー「SOMETHING ELSE」。この曲を知ってる子が会場にどれだけいるんだろうかという不安はあったが、1曲目はこの曲しかなかった。たとえ最初からお客さんが引いてしまっても、譲れない。なんたって今日は、俺がいかにキースかってことを見せるのが重要なポイントなのである。

ああしかし…、やはり観客は知らないのか。片足を蹴り上げてギターを弾いたり、ピッキングの位置もこんな風にネックの辺りで弾いたり、結構細かいところもまねしてみるが手応えがない。ギターも同じMUSIC MANのキースモデルなのに…。分かってくれよー…。そのとき客席の中程で、一人だけウケてる野郎が目に飛び込んできた。そいつは足を上げる度に大笑いしてくれていた。うーん、もうお前さえ分かってくれればいいよぉー(泣)。

英語の歌詞はちょっと辛い。自分でもサギじゃないかと申し訳ない気持ちにもなるが、こればっかりはどうしようもないのだ。気弱な俺はカンニングペーパーの存在をついばらしてしまう。しかし、このカンペだけは恥かしくて見せられない。ライブでのキースっぽく歌いたくて、ヒアリングしながらカタカナで紙に書いて作ったのだが、なんと「HEY LOOK HERE」が「ヘールックヒ」…。キースっぽいのはいいが、これじゃあ自分でも何の暗号だかお経だか分からなくなってしまう。

でもこの曲ほんと好きだし、この1年ぐらい俺にとってギタリストと言えばキースしかいないし、毎回やって定番にしてしまおうかとも思っているくらいなのだ。そんなに好きならこういうオリジナル作ればいいじゃんって言われそうだけど、それもめんどくさいっていうか…。うん、いやいや、まあ…。

とにかく、いつものライブがちゃんとしたバージョンだとすると、今日のライブはひと言で言うと、うーん、オナニーってとこだろうか。選んだカバーもお気に入りの曲ばかりで、やっていても本当に気持ちいい。クイーンの「愛という名の欲望」、これも好きなんだ。この曲が入っているアルバム『THE GAME』は俺がギターを始めたころずっと聴いてたから、すごく影響受けてる。クイーンの中では邪道とも言われるあのアルバムも、俺にとっては今でもナンバーワンなのだ。でもしかし、やっぱり英語はきつい。カンペのカタカナが一度に目に飛び込んできて、つい口が回らなくなる。ごまかそうとしてはみるが「○▲☆●♂□▼♀…」これじゃ完全にばれてしまう。あぁ…。

それにしても大阪のお客さんはノリがいいね。今日は結構男の客も多くてそれもうれしいし、一番前の真ん中まで野郎だ。でもっ、やっぱ最前列のど真ん中は、綺麗どころのお姉ちゃんであってほしい気はする。そういう楽しみもないとねぇ。うん…。なんてことを頭の片隅で考えながらライブは中盤。「FIRE DOG」「砂漠に赤い花」と続き、陽水さんのあの名曲「傘がない」へ。イントロを弾き始め会場を見回す。20年も前の曲なのだから当然と言えば当然だけど、原曲がだれの曲か分かっている人はほんの少数派だ。やっぱり最近の曲もカバーするべきなのかという思いが頭をよぎる。スピッツとかの方が良かったのか? いやぁ、それじゃあこび過ぎだし…。

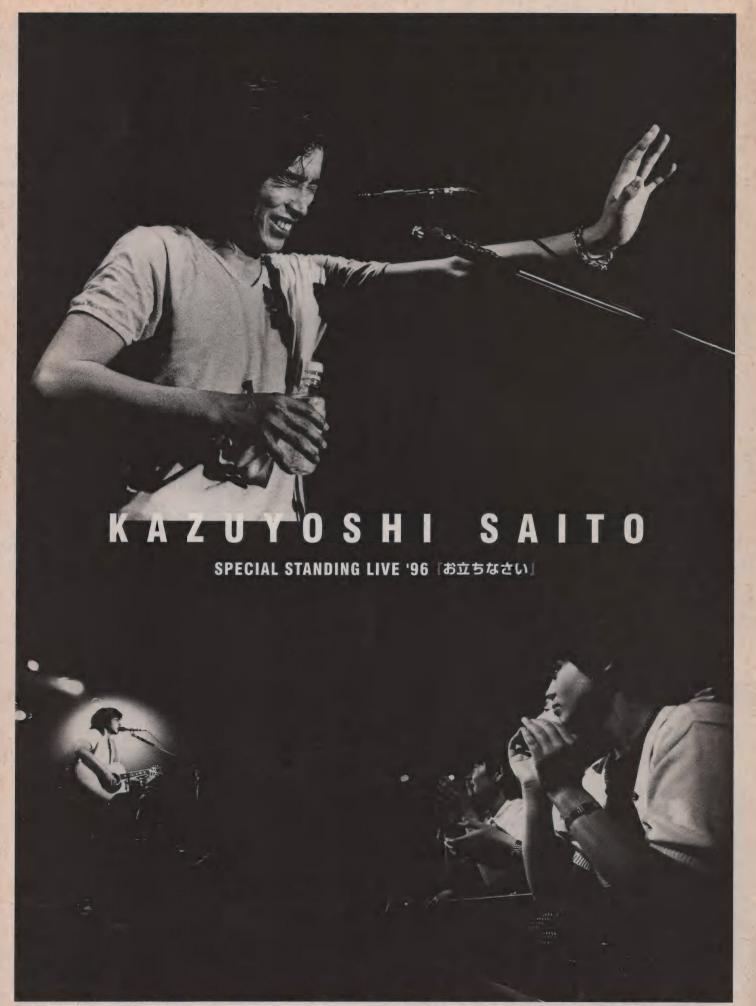
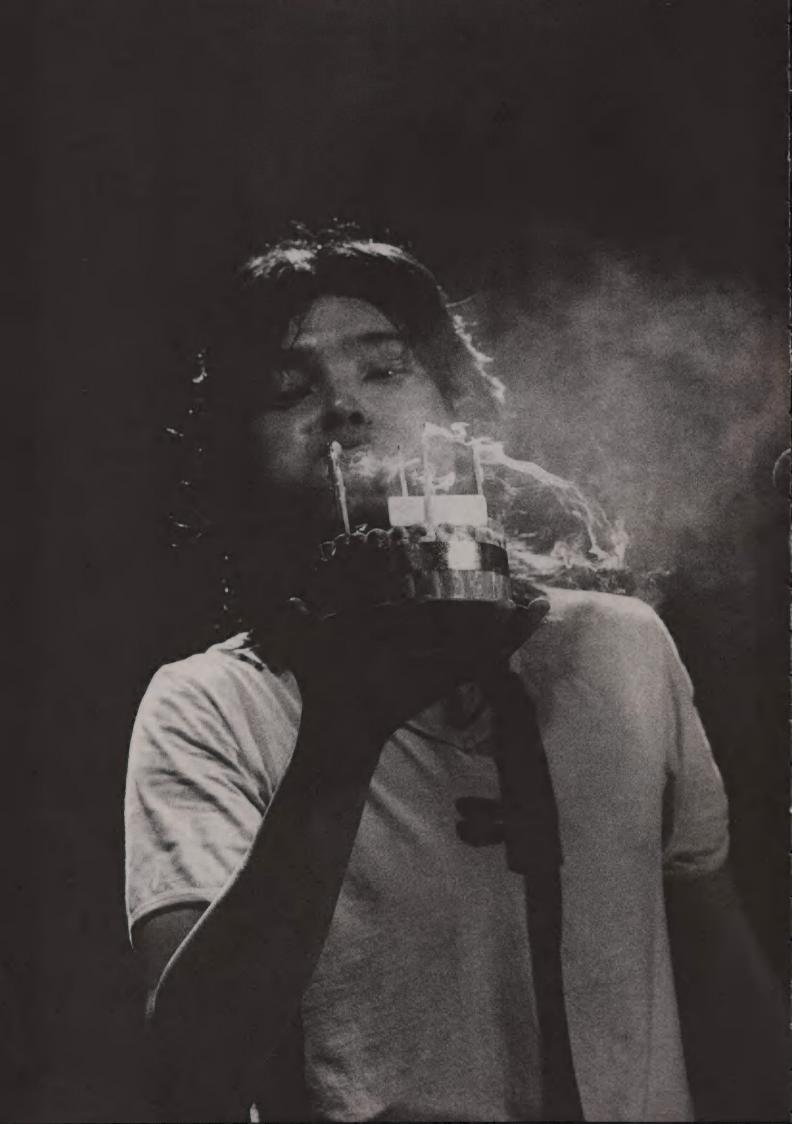
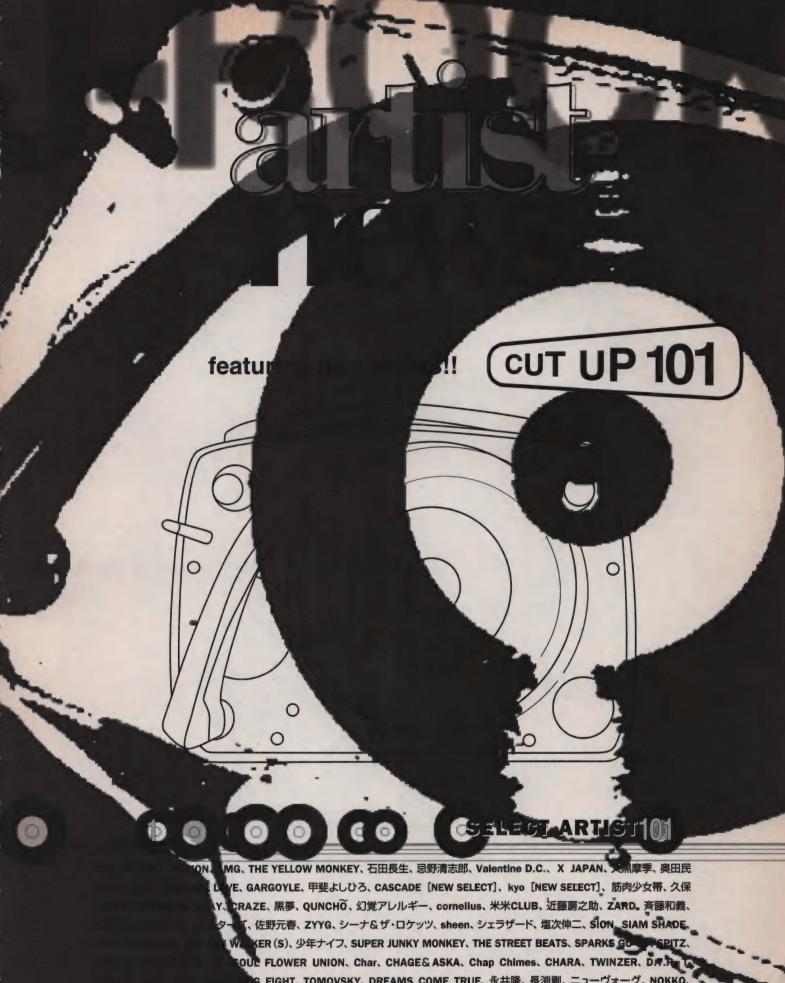
しかし、この曲は俺自身も感情移入してしまうせいか、曲が進むにつれて、身体を激しく動かすわけじゃないのに、客席の空気が何かすごい一体感でステージへと迫ってくる。俺の「傘がない」気に入ってくれたかい? そう思うとうれしくなる。やって良かった。でも「傘がない」が一番良かったなんてあとで言われたら、それはそれでうーん、うれしいけど、うーん、ねえ。やっぱ人の曲だし、ちょっと複雑かも…。だけどこの曲のアレンジ、原曲とは全く違うんだ。実はグランドファンク・レイルロード風のアレンジでやってみたらすごーくハマっちゃって。これだぁ! みたいな。原曲を知らない人は、これがオリジナルだと思ってるのかな。大丈夫、陽水さんにはちゃんと許可とってあるから心配ない…かな。

「ポストにマヨネーズ」「男よそれが正常だ!!」とますますロックなナンバーへとなだれ込むと、始まったころは揺らいでいただけの後ろの方の女の子までも、こぶしを振り上げ飛び跳ねてる。リハーサルだとこの辺り20曲目に近くなると結構辛いが、本番だとどこからか別の力が出てきて、全然体力平気みたいな感じになる。それとも今日の気持ち良さは特別なんだろうか? 客席の「歩いて帰ろう」の大合唱で俺のテンションはますます上がっていく。

そしてアンコール。バンドのみんなが突然(俺に内緒で打ち合わせしてたらしい)ビートルズの「BIRTHDAY」を演奏。スタッフからケーキのプレゼントがあり、会場からはバースデイソングの合唱が沸き起こる。まるでハードロックカフェの図だ。思わずケーキを頭上に掲げてポーズをとってしまう俺。ほんとにうれしい。もう1曲英語のカバーをやるつもりだったけど、これ以上やばい英語を聞かせるのもこんなハッピーな日に申し訳ないっていうか、英語コンプレックスの俺の良心が頭をもたげる。急きょ変更だ。RCサクセションの「雨上がりの夜空に」行くぜいっ!

そしてこの日の空気のせいか、いつもよりラフな「WONDERFUL FISH」でさらに盛り上がる。まだまだ歌える! …と、曲が終わっていつのまにかメンバー全員で客席に向かって手なんか上げている自分に気付く。あぁ、もう終わるしかないじゃないか…。うん、でも、今日の俺、最高にハッピーだったよ、イエイ!

[文・斉藤和義　撮影・高木昭仁]

	オープニングアクト　ムツミ製作所	8	YER BLUES/BEATLES
1	歩いて帰ろう/斉藤和義	9	FIRE DOG
2	SMOKE ON THE WATER/DEEP PURPLE	10	砂漠に赤い花
3	ROCK AND ROLL ALL NIGHT/KISS	11	傘がない/井上陽水
4	ARMED AND READY/MICHEAL SHENKER GROUP	12	何処へ行こう
		13	ポストにマヨネーズ
	斉藤和義 &HIS BAND	14	男よそれが正常だ!!
1	SOMETHING ELSE/KEATH RICHARDS	15	あの高い場所へ
2	走って行こう	16	歩いて帰ろう
3	通りに立てば	encore	
4	男達のメロディー/SHŌGUN	1	カサブランカダンディ/沢田研二
5	愛という名の欲望/QUEEN	2	雨上がりの夜空に/RC サクセション
6	大丈夫	3	WONDERFUL FISH
7	君の顔が好きだ		

1996年6月22日　大阪IMPホール

CUT UP 101

artist news
featuring nice artists!!

12 小沢健二

ミニアルバムをレコーディング中。残念ながら発売は延期で、完成を待ち望むファンの声が高まるばかり!

13 ORIGINAL LOVE

ニューアルバム『Desire』をリリースした。コンサートツアーは、9月23日市川市文化会館よりスタートする。同29日群馬県民会館、10月1日府中の森芸術劇場どりーむホール、2日神奈川県民ホール、4日浦和市文化センター、9・10日大阪厚生年金会館、14日北海道厚生年金会館、16日アクトシティー浜松、18・19日愛知県勤労会館、29日熊本市民会館、30・31日福岡市民会館、11月2日宮崎市民文化ホール、5日倉敷市民会館、6日広島厚生年金会館、10日松本文化会館、12日新潟県民会館、14日石川厚生年金会館、21日岩手県民会館、23・24日宮城県民会館。

14 GARGOYLE

8月7日新宿リキッドルーム(イベント)、30・31日新潟O-DOでライブを行う。次のツアーは年末の予定で、それに先駆けてビデオのリリースも予定されている。

15 甲斐よしひろ

甲斐バンドのアルバム『Big Night』がリリースされた。このアルバムにはアコースティックアレンジされた甲斐バンドの楽曲を収録。8月10・11日にはPOPSTOCK東京ビッグサイトにてライブも行われる。また、秋には甲斐バンドとしてのツアーも決定! 9月21日福岡サンパレス、25日名古屋センチュリーホール、30日大阪フェスティバルホール、10月12日日本武道館。

9 X JAPAN

壮大なバラードナンバー「Forever Love」が好評。また、8月12日にニューシングル「Beauty&Stupid」をリリースするhideのソロツアーが決定! 9月12・13日福岡サンパレス、15日松山市民会館、17日大阪城ホール、21・22日名古屋センチュリーホール、24日倉敷市民会館、26日広島厚生年金会館、28日石川厚生年金会館、10月1・2日札幌市民会館、8・9日新潟県民会館、11日静岡市民文化会館、13・14日仙台サンプラザ。9月8日には千葉マリンスタジアムで『LEMONed PRESENTS "hide indian summer special"』も行われる。

10 大黒摩季

通算14枚目のシングル「熱くなれ」をリリース。この曲はNHKアトランタオリンピック放送のテーマソングで、タイトル通り彼女ならではのパワフルボイスが熱く燃え上がる一曲。ダンサブルなビートと攻撃的なロックギターにポジティブ&ストレートなメッセージを乗せている。また、カップリング曲「そして」は、夏らしい壮快感にあふれたミディアム・ナンバー。広大な夏の空をイメージさせる、スケールの大きなサウンドが印象的だ。

11 奥田民生

ニューシングル「イージュー★ライダー」が好評の中、各地でイベントに出演。7月27日鳥取夢みなと博会場予定地周辺『ガッツな息子がキラリ☆』、28日大阪万博記念公園もみじ川芝生広場『Meet The World Beat'96』、8月3日石川県森林公園『KIT POP HILL '96』、8日富士急ハイランドコニファーフォレスト『SOUND CONIFER229』。

6 石田長生

7月27日に予定されていた大阪ビーハウスのソロライブが8月2日に延期になった。また、8月8・9・10日と大阪ウォーホールで行われている憂歌団の木村充輝3DAYSライブの中日に、有山じゅんじと共に出演。久しぶりの平成トリオが聴ける。8月後半からは、創作活動に入る予定だ。

7 忌野清志郎

Little Screaming Revueとして、7月28日大阪万博記念公園『Meet The World Beat'96』、8月23日仙台『ロックンロールサーキット』、25日札幌芸術の森『Good Stock'96』のイベントに出演。9月7日には日比谷野外音楽堂でワンマンライブ『ホントウのロック96』を行う。

8 Valentine D.C.

現在9月リリース予定のシングルをレコーディング中。8月4日京都ミューズホール、6日渋谷オン・エア・ウエスト、10日市川CLUB GIOでは、『HEAT WAVE '96』と題したライブを行う。真夏の暑い日に、彼らの熱いライブで汗をかくのも気持ち良いぞ!

2 Eins:Vier

modern greyと共に、『SPECIAL CLUB CIRCUIT SWEET TRANCE '96』と題したイベントを行うことが決定! 9月24日名古屋ダイアモンドホール、26日赤坂ブリッツ、30日大阪IMPホール。注目のライブになりそう!

3 ACTION

NOVELAやBOW WOWと共演するイベントが、9月8日神戸チキンジョージ、15日東京日清パワーステーションで行われる。

4 AMG

7月21日に大阪グラン・カフェで行われたライブの後、約一ヵ月間気力、体力を充実させ、9月7日新大阪メルパルクホールで行われる『NEO BLUES BATTLE Vol.2』に臨む予定。この後学園祭などにも出演する予定がある。要チェック!!

5 THE YELLOW MONKEY

ニューシングル「SPARK」が好評。コンサートツアーも7月27日長野県民文化会館、30日静岡市民文化会館でいよいよファイナルを迎える。吉井和哉の『オールナイト・ニッポン』(毎週火曜・25:00~)も聞き逃すな!

1 ICE

引き続きニューアルバムのレコーディング中。8月21日には日本武道館で行われる『JT スーパーサウンド'96』に出演。10月5日には大阪城野外音楽堂でのライブも決定している。

cutup 1

cutup 2

PATA HIDE YOSHIKI TOSHI HEATH

cutup 9

cutup 6

cutup 3

cutup 14

cutup 12

cutup 10

cutup 7

cutup 4

cutup 15

cutup 13

cutup 11

cutup 8

cutup 5

artist news
featuring nice artists!!

cutup 26
cutup 22
cutup 19
cutup 17
cutup 16
cutup 27
cutup 23
cutup 20

cutup 18

cutup 28
cutup 24
cutup 21
cutup 29
cutup 25

cutup 30
16 CASCADE

8月20・21日、チケットが即日ソールドアウトとなった赤坂ブリッツでの2DAYSライブ。また、8月24日名古屋商科大学内ラグビー場『NEW KIDS ON THE ROCKS』、25日日比谷野外音楽堂＆27日大阪城野外音楽堂『ザ・ハイロウズのホリデイズ・イン・ザ・サン』、30日広島アステールプラザ『Sensational Rock'n Night'96』の各イベントにも出演する。7月からはFM NACK5でラジオレギュラー番組『CASCADE ONE NIGHT HEAVEN』（毎週日曜・25：30～）がスタート。現在新作のレコーディング中で完成が待ち遠しい！

17 kyo

7月24日ビデオクリップ集「Sha-la-la」をリリース。現在展開中のツアーは、いよいよ7月30日赤坂ブリッツでファイナルを迎える。その後、8月4・11・18日には、東京日清パワーステーションでのウィークリーライブが決定。さらに8月24日熊本グリンピア南阿蘇アスペクタにて行われるイベント『BEAT MEGA '96 IN ASPECTA』に出演する。また、8月21日リリースの"JAPAN"トリビュートアルバムに「Life in Tokyo」で参加。どんな楽曲になっているのか楽しみである。

18 筋肉少女帯

大槻ケンヂが8月7日にシングル「プカプカ」、21日にアルバム『わたくしだから』をリリース。ソロライブツアー「いい日だねー、今日は誰のプカプカを聞く？TOUR2」は、8月29・30日東京日清パワーステーション、9月1日大阪クラブクアトロ、3日京都磔磔、4日名古屋クラブクアトロ、18・19日吉祥寺前進座劇場。また、橘高文彦の結婚披露宴パーティー『WEDDING LIVE PARTY～魅惑の結婚披露宴～』が、9月30日東京日清パワーステーションで行われる。彼ならではのファンの立ち会いによる結婚式になりそうで、ぜひ祝福に出かけよう！

19 久保田利伸

6月25日にアメリカで2ndシングル「JUST THE TWO OF US」がリリースされた。全国ツアー『オィーッス』は、9月13・14日福岡国際センターを皮切りにスタート。同17・18日広島サンプラザ、21・22・23日国立代々木競技場第一体育館、26・27日真駒内アイスアリーナ、10月1日静岡産業館ツインメッセ静岡北館、16・17日仙台市体育館、29・30日名古屋レインボーホール、11月2・3日神戸ワールド記念ホール、6・7日大阪城ホールで行われる。

20 栗林誠一郎

引き続き楽曲制作およびレコーディング中。

21 GLAY

8月7日にドラマ「ひと夏のプロポーズ」の主題歌としてオンエア中のニューシングル「BELOVED」をリリース。また、コンサートツアー「TOUR "BEAT out! reprise"」も8月16・17日東京厚生年金会館よりスタート。9月9日日本武道館まで全国を駆け抜ける。

22 CRAZE

7月24日にニューシングル「to me, to you」をリリースしたばかり。7月29日には大阪厚生年金会館で行われるイベント『W'OMIX NIGHT SPECIAL～ROCK of AGE vol.1～』に出演。8月5日名古屋ダイアモンドホールからは、ライブツアー『～CRAZE CLUB CIRCUIT '96～GET THE F☆☆K OUT』がスタートする。同7日福岡スカラエスパシオ、9・10日大阪IMPホール、12・13日赤坂ブリッツ、21日新潟PHASE、23日札幌ファクトリーホール。

23 黒夢

ツアー「FAKE STAR'S CIRCUIT」を全国で展開中。7月27日名古屋市公会堂、31日横浜アリーナ（追加公演）、8月17日沖縄コンベンションセンター。なお、横浜アリーナでは、アルバム2作連続オリコン初登場1位記念として、今後正式にリリース予定のない未発表曲CDシングルが入場者全員にプレゼントされるらしい。

24 QUNCHŌ

8月7日に3rdアルバム「Q」をリリース。このアルバムはL.A.のミュージシャン達と3カ月の月日をかけレコーディングを行ったもの。日本からも山岸潤史、近藤房之助らが参加している。

25 幻覚アレルギー

ショートサーキット「DANCE MACABRE SHOW」を、9月14日京都ミューズホール、15日大阪ウォーホール、22日市川CLUB GIO、23日熊谷VOGUEで行う。また、9月15日には、サーキットと同タイトルのライブビデオのリリースが決定！ 7月に新宿ロフトで行われたライブをシューティングし、そこに撮り下ろし映像をプラスした3年ぶりのビデオ作品になる。久しぶりのビデオにメンバーも非常に意欲的に取り組んでいるらしい。完成が楽しみだ！

26 cornelius

8月29日、東京テレポートタウンでの『ナチュラルハイ』に出演する。

27 米米CLUB

ボーカルの石井竜也が監督した8月31日全国公開の映画『ACRI』のためのユニットACRIが、8月1日にシングル「DOLPHIN'S WORLD」、21日にアルバム『ACRI』、31日にサントラをリリースする。

28 近藤房之助

"近藤房之助＆Deepest Pocket"として8月3日山口光市『虹ケ浜サマーフェスタ'96』、4日山形県『アジア音楽祭inしらかた』、9月6日市川CLUB GIO、7日熊谷VOGUEに出演。8月21日には、『roug'n noxed～Live at SHINJUKU LIQUID Room』と『GRAVEL ROAD』の二枚を同時リリース。

29 ZARD

7thアルバム『TODAY IS ANOTHER DAY』をリリースした。タイトル曲の「Today is another day」は、先日放映されたアトランタを舞台にしたアニメ「YAWARA!スペシャル～ずっと君のことが」のテーマ曲。「見つめていたいね」も同番組でオンエアされた。

CUT UP 101

cutup 45
cutup 43
cutup 40
cutup 36
cutup 31
cutup 44

cutup 41

cutup 37

cutup 32

cutup 42
cutup 38

cutup 33

cutup 39

cutup 34

cutup 35
41 JUDY AND MARY

7月28日大阪万博記念公園もみじ川芝生広場『Meet The World Beat'96』、8月3日石川県森林公園『KIT POP HILL'96』、4日福島県楢葉町天神岬スポーツ公園『COMING POP'96』、10日仙台みちのく杜の湖畔公園『PARK ROCK 1996』、17日マリンメッセ福岡『好きだ！博多だ！イベントだ！』、18日宮崎シーガイアイベントスクエア『SEGAIA SUMMER楽園音楽祭'96』、21日日本武道館『JT SUPER SOUND'96』に出演する。

42 JUN SKY WALKER(S)

シングル「愛しい人よ」、アルバム『EXIT』が好評リリース中。現在メンバーは、曲作り&リハーサルを行っている。

43 少年ナイフ

3年ぶりのニューアルバム『Brand New Knife』を8月21日にリリース。9月19・20日大阪クラブクアトロからは、『WONDER TOUR'96』がスタートする。同22日福岡ビブレホール、27日名古屋クラブクアトロ、30日新宿リキッドルーム、10月2日京都ミューズホール。また彼女たちのカーペンターズのカバー曲「TOP OF THE WORLD」がマイクロソフトのCMで12月までオンエア中。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、日本がテリトリーだ。

44 SUPER JUNKY MONKEY

7月23日に、最新アルバム『地球寄生人/PARASITIC PEOPLE』が、全米リリースされた。7月28日には新宿リキッドルームで行われるイベント『VIVA! LA WOMAN』に出演。7月末から8月いっぱいは、次作のレコーディングに入る。

45 THE STREET BEATS

8月26日に渋谷オン・エア・ウエストでスペシャルライブを行う。ファンクラブ会員中心だが、一般の観客もOK。ツアーでは見れないマニアにはたまらない内容になりそう。見逃すな！秋には全国ツアーも予定されている。

35 シーナ&ザ・ロケッツ

鮎川誠が、8月6日に高円寺ジロキチにて永井隆とブルースセッションを行う。現在サイバージェイロックマガジンでは、7月号に掲載した彼のインターネット話を肉声で公開中。ぜひ一度見てみよう。

36 sheen

9月4日にシングル「NOW ON SALE?」をリリース。8月10日には東京日清パワーステーションでライブも決定。現在は、アルバムの曲作り中だ。

37 シェラザード

9月8日神戸チキンジョージ、15日東京日清パワーステーションで、NOVELAがライブを行う。

38 塩次伸二

7月27日高円寺ジロキチ、8月3日上野ジャズフェスティバル、8・10日横浜ブルースカフェ、21日神戸楽屋でライブを行う。

39 SION

秋にリリース予定のアルバムとシングルのレコーディング中。

40 SIAM SHADE

秋のツアーが9月6日広島並木ジャンクションからスタート。同8日福岡徒楽夢Be-1、9日熊本ジャンゴ、12日新潟O-DO、13日長野J、15日富山市民プラザ3Fマルチスタジオ、16日金沢VANVAN V4、20日函館金森ホール、22日札幌ペニーレーン24、24日仙台ビーブベースメントシアター、29日名古屋ダイアモンドホール、10月1日大阪IMPホール、2日神戸チキンジョージ、8・9日赤坂BLITZで行われる。

33 佐野元春

ニューアルバム『フルーツ』が好評！ 全国ツアー『フルーツ』は、9月8日戸田市文化会館、11日グリーンホール相模大野、13日宇都宮市文化会館、18日大宮ソニックシティ、19日府中の森芸術劇場、21日よこすか芸術劇場、28日市川市文化会館、30日京都会館、10月1日神戸文化ホール、3・4日大阪フェスティバルホール、6日広島郵便貯金ホール、7日岡山市民会館、9日石川厚生年金会館、15・16日渋谷公会堂、19・20日名古屋市民会館、29日沖縄市民会館、11月1日アクトシティ浜松、4日郡山市民文化センター、6日宮城県民会館、7日岩手県民会館、11月12日北海道厚生年金会館、18日宮崎市民文化ホール、20・21日福岡サンパレス、23日熊本市民会館、26日新潟県民会館、27日長野県県民文化会館。

34 ZYYG

3曲入り12センチシングル「GYPSY DOLL/BLOOD ON BLOOD/微笑みだけをくれないか」をリリースした。7月29日には、大阪厚生年金会館で行われるイベント『W'OMIX NIGHT SPECIAL～ROCK of AGE vol.1～』に出演。また、2回目のツアー『LIVE ROCKIN' HIGH Vol.02"TROUBLE BEATS"』が、8月1日市川CLUB GIO、4日前橋club FLEEZ、5日横浜CLUB24で行われる。

31 坂本龍一

8月21日にマキシシングル「08-21-1996」とアナログ盤『1996』(1万組限定生産)をリリース。ワールドツアーは8月19日石川厚生年金会館よりいよいよ日本に突入。同22日愛知厚生年金会館、24日神奈川県民ホール、25日大宮ソニックシティ、27～29日Bunkamuraオーチャードホール、31日・9月1日大阪フェスティバルホールで行われる。

32 サザンオールスターズ

7月20日にニューアルバム『Young Love』をリリースした。ツアー『ザ・ガールズ万座ビーチ』は、8月4日つま恋多目的広場、8月10・11日西武ライオンズ球場、17・18日真駒内オープンスタジアム、9月6・7日ナゴヤ球場、15・16日阪神甲子園球場、21・22日横浜スタジアム、10月2・3日宜野湾市海浜公園野外劇場他で行われる。

30 斉藤和義

8月21日にシングル「Baby,I LOVE YOU」をリリース。アルバム『FIRE DOG』では多くの楽器演奏にチャレンジしたが、今回のシングルでは全パートを演奏しているらしい。8月25日には東京POPSTOCKで『斉藤和義 特撰ライブ'96 夏"東京ビッグサイト"』を行う。

artist news
featuring nice artists!!

52 Char

本格的にレコーディングに突入!! 9月発売のサイケデリックスのミニアルバムは、ビデオクリップと共にかなり期待できそうだ。今回のレコーディングには、超強力ベーシスト、ポール・ジャクソンが参加している。

53 CHAGE&ASKA

先日イギリスでリリースされた、彼らの楽曲のカバーコンピレーションアルバム『ONE VOICE』が、7月31日に日本でも発売になる。また、先日アジアのアーティストとして初めてMTVアンプラグドに出演したが、円形のステージセットでシンプルにアレンジされた曲を歌う彼らに、イギリス人も体を前のめりにするほどリズムを取って楽しんでいたそう。

54 Chap Chimes

レコーディングが順調に進んでいる。

55 CHARA

7月22日に映画『スワロウ・テイル』に登場するYEN TOWN BAND(エンタウンバンド)のシングル「Swallowtail Butterfly～あいのうた～」をリリースした。アルバムは9月にリリースされそうだ。映画の公開は、9月14日の予定。

56 TWINZER

7月28日大阪クラブクアトロ、31日渋谷オン・エア・ウエストで『LIVE AXEL#1 "STRANGE BLUE"』が行われる。現在は引き続き、秋に向け楽曲制作およびレコーディングを行っている。

57 D.T.R

ギターの藤本泰司が参加しているTWINZERのライブが、7月28日大阪クラブクアトロ、31日渋谷オン・エア・ウエストで行われる。

58 T-BOLAN

デビュー以来数多くのヒット曲を輩出してきた彼らが初のベストアルバム(タイトル未定)をリリースする。「離したくはない」「LOVE」「マリア」を始めとする大ヒットシングルのほとんどを網羅した、ボリューム感たっぷりのシングルコレクションだ。

59 DEEN

シングル「SUNSHINE ON SUMMER TIME」が好評。また早くも8月5日にはニューシングル「素顔で笑っていたい」がリリース予定だ。この曲はテレビ朝日系ドラマ「小児病棟・命の季節」の主題歌で、久々のバラードナンバー。その後ツアー『LIVE JOY Break 1』が9月19日札幌ファクトリーホール、24日福岡クロッシングホール、26日大阪IMPホール、27日名古屋ダイアモンドホール、10月5日赤坂ブリッツで行われる。

46 SPARKS GO GO

『NOW&ZEN』と題したライブを、7月31日大阪ウォーホール、8月5・12・19日東京日清パワーステーション、9月4・5・6日札幌ペニーレーン24で行う。また、8月3日石川県森林公園『KIT POP HILL '96』、8日富士急ハイランドコニファーフォレスト『SOUND CONIFER229』の夏のイベントに出演。彼らの熱いライブが各地で楽しめそうだ。

47 SPITZ

今夏は、週頭レコーディング、週中ライブリハーサル、週末各地のイベントに出演するというスケジュールを繰り返すことになりそう。7月27日鳥取境港市夢みなと博会場予定地周辺『ガッツな息子がキラリ☆』、8月4日真駒内オープンスタジアム『HOKKAIDO ROCK CIRCUIT '96』、11日仙台みちのく湖畔公園『PARK ROCK 1996』(ワンマン)、18日福岡海の中道海浜公園野外劇場『THE GREAT JAMBOREE '96 IN UMINAKA お太陽サマ上々!!』(ワンマン)、24日名古屋商科大学内ラグビー場『NEW KIDS ON THE ROCKS』、31日香川県志度町野外音楽広場テアトロン『THE GREAT JAMBOREE '96 IN SHIDO "瀬戸内夕焼け兄弟"』(ワンマン)で、そんな彼らと会える。

48 SPAED

1カ月以上に及ぶプリプロダクションを終え、ついに3rdアルバムのレコーディングを開始。より彼ららしいサウンドを目指して1年以上試行錯誤を重ねてきた今回のアルバムは、秋ごろリリースされる予定だ。

49 SLY

ライブビデオ『LIVE"DREAMS OF DUST"』に続いて、3rdアルバム『KEY』を8月21日にリリース。また、今までの作品群が、アジア、ヨーロッパでリリースされた。現在は、9月末より予定されているツアーのリハーサル中で、その合間を縫って樋口宗孝が別プロジェクトのために渡米。豪華メンバーをそろえ順調にレコーディング中だ。

50 妹尾隆一郎

8月6・21日神戸楽屋、9日西荻窪ワッツ、10日茨城かぶと虫、23日高円寺ジロキチに出演。8月25日には20年前に発売されたアルバム『メッシン・アラウンド』『ブギ・タイム』がCD化される。

51 SOUL FLOWER UNION

7月21日にシングル「向い風」をリリースした。8月31日には赤坂ブリッツで行われるイベントに出演。秋にはニューアルバムをリリースし、10月21日赤坂ブリッツ、11月10日大阪コークステップホールでのライブも決定している。ソウル・フラワー・モノノケ・サミットとしても8月24・25日山梨県・巨麻神社で行われる『アートキャンプ白州'96』に出演する。

CUT UP 101

cutup 67

cutup 60

cutup 68

cutup 61

cutup 69

cutup 62

cutup 70

cutup 63

cutup 71

cutup 64

cutup 72

cutup 65

cutup 73

cutup 66

67 NOKKO

8月21日にシングル「天使のラブソング」をリリース。11月ごろにはアルバムをリリース予定だ。

68 PERSONZ

7月末に10thアルバムのレコーディングが完了。8月3日には久しぶりに東京日清パワーステーションで行われるイベント『サタデーナイトロックンロールショウVol.6』に出演。9月にはシングル、10月にアルバムを発表する。11月には学園祭に出演する。

69 HYPERMVNIA

7月15日に2ndアルバム「Together Along」をリリースした。現在は全国ツアーを展開中で、7月28日大阪ロケッツ、8月9日札幌メッセホール、12日新潟O-DO、24日池袋CYBER、ファイナルは9月7日渋谷オン・エア・ウエストでワンマンライブを行う。

70 ♠THE HIGH-LOWS♥

夏は、各地のイベントに続々と出演。7月28日大阪万博記念公園もみじ川芝生広場『MEET THE WORLD BEAT'96』、8月17日マリンメッセ福岡『好きだ!博多だ!イベントだ!』、25日日比谷野外音楽堂&27日大阪城野外音楽堂『ザ・ハイロウズのホリデイズ・イン・ザ・サン』、29日名古屋センチュリーホール『R&R JAPAN』。秋には待望のニューアルバムもリリース予定だ!

71 BOW WOW

7月21日にニューアルバム『BOW WOW#2 LED BY THE SUN』をリリースした。ライブは、8月5日名古屋クラブクアトロ、6日大阪クラブクアトロ、8日渋谷クラブクアトロで行われる。

72 BUCK-TICK

全国ツアー『CHAOS』を展開中。7月28日宮城県民会館、8月5日鹿児島市民文化ホール、7日福岡サンパレス、13日大阪城ホール、15日名古屋国際会議場センチュリーホール、19・20日日本武道館、26日高松市民会館、27日倉敷市民会館、29日松山市民会館、30日広島郵便貯金ホール、9月2日沖縄コンベンションセンター。

73 浜田省吾

ニューアルバムのレコーディング中。8月いっぱいで、オリジナルアルバムを完成させる予定だ。

60 DER ZIBET

8月21日リリースの"JAPAN"トリビュートアルバムにISSAYが参加している。デルジのライブはまだか!?

61 DOG FIGHT

久しぶりのライブが決定した。9月14日横浜CLUB24、15日熊谷VOGUEの2カ所が現在決定しているが、他でも行われそう。お楽しみに!

62 TOMOVSKY

10月上旬にミニアルバムをリリース予定。8月3日下北沢QUE、31日東京日清パワーステーションでは、弾き語りライブを行う。そして秋にはお待ちかねのBAND TOURも決定! 10月2・26日新宿リキッドルーム、5日福岡Be-1、6日広島ネオポリスホール、8日岡山ペパーランド、10日大阪クラブクアトロ、12日京都磔磔、13日名古屋クラブクアトロ、16日仙台MA・CA・NA、17日札幌ベッシーホール。現在彼はおいしいラーメン屋を探している。知っている人は、ぜひ教えてあげよう。

63 DREAMS COME TRUE

全国ツアーがいよいよスタート。7月29・30日盛岡アイスアリーナ、8月7・8・10・11日福岡国際センター、9月3・4日真駒内アイスアリーナ、9・10・12・13日大阪城ホール、18・19・21・22日横浜アリーナ、26・27日神戸ワールド記念ホール、10月2・3・5・6日名古屋レインボーホール、15・16日代々木競技場第一体育館で行われる。

64 永井　隆

8月6～8日高円寺ジロキチにて「サマータイムブルース」と題したイベントをプロデュース。出演は、鮎川誠、ジョニー吉長、沼澤尚ら。また関西では村上"ポンタ"秀一らと8月12日大阪ウォーホール、13日神戸チキンジョージ、14日鳥取砂丘オアシス広場野外イベントに出演。現在はアルバムのレコーディング中。

65 長渕　剛

7月9日の鹿児島でライブツアーも終了。今後はライブビデオの制作に入る。

66 nuvo:gu

ツアー「Pleasure Pleasure Pleasure…1996 SUMMER」が8月10日広島ネオポリスホールよりスタート。同11日福岡ビブレホール、13日熊本Django、14日大阪ウォーホール、15日名古屋クラブクアトロ、19日新潟文化村O-DO、21日仙台マカナ、24日札幌メッセホール。各会場入場者全員にCDプレゼントがある。

artist news
featuring nice artists!!

cutup 85

cutup 82

cutup 78

cutup 74

cutup 86

cutup 83

cutup 79

cutup 75

cutup 87

cutup 84

cutup 80

cutup 76

cutup 81

cutup 77

83 真心ブラザーズ

現在9月21日にリリースされるニューアルバム『GREAT ADVENTURE』のレコーディング真っ最中。ゲストにスーパー・ジャンキー・モンキー、はかせ(元フィッシュマンズ)、レピッシュなどを迎え全10曲の最高のアルバムを制作中。9月14日には日比谷野外音楽堂でライブ、10月は学園祭に出演、11月より全国ツアーの予定だ。

84 松任谷由実

ニューアレンジ&レコーディングされた「まちぶせ」をリリースした。今夏は荒井由実として活動する。

85 THE MAD CAPSULE MARKET'S

8月7日に、ビデオ『4 PLUGS』をリリース。9月4日には新録のベストアルバム『THE MAD CAPSULE MARKET'S』をリリースする。また、8月5日(25:15〜)にはNHK衛生第二放送にて、4月30日の赤坂ブリッツのライブがオンエアされる。ライブに行った人も行けなかった人も要チェック!

86 MANISH

8月12日にニューアルバム『cheer!(仮)』をリリース予定だ。

87 Mr.Children

ニューアルバム『深海』が絶好調!全国ツアーは、8月24・25日横浜アリーナよりスタートし、来年の1月28・29・31日、2月1日の浜松アリーナまで全国12カ所で52公演を行う。

81 BLANKEY JET CITY

照井のソロワークスJOE BROWNNのシングル「GENUINE GUILTY」、アルバム『ido-est』がリリースされた。ライブは、8月2日渋谷クラブクアトロを残すのみ。浅井のSHERBETもシングル「ゴースト」、アルバム『セキララ』をリリース。ライブは、7月29日大阪ウォーホール、30日名古屋ボトムライン、31日新宿リキッドルームで行われる。そして8月からはいよいよブランキー・ジェット・シティとして再始動。海外ツアーを行い、8月28日には、ビデオ『ブランキー・ジェット・シティ ソロワークス』をリリースする。このビデオではJOE BROWNN、SHERBETのビデオクリップを収録。また、中村がドラム、ベース、トランペットなどすべての楽器からミックスまで手掛けたLove Shop ROSALIOSのサウンドもついに登場する。8月29日には名古屋センチュリーホールでのイベント『R&R JAPAN』に出演。9月1日には、日比谷野外音楽堂で久しぶりのワンマンライブを行う。

82 布袋寅泰

本人骨折のため延期になっていたライブが、9月10・11日大阪フェスティバルホール、16日広島厚生年金会館、19日倉敷市民会館、20日広島厚生年金会館で行われる。また、アトランタオリンピックの閉会式にフロントギタリストとして出演することが決定。世界的コンポーザーであるマイケル・ケイメンの指揮の下、布袋とオペラシンガー2名を中心に、80名のゴスペルシンガー、120名編成のオーケストラで構成するロックオペラを展開するらしい。

78 氷室京介

8月15日ニューシングル「SQUALL」をリリース。9月末には2年ぶりのニューアルバムもリリースされる予定だ。

79 FEEL SO BAD

約3カ月の間にシングル、ライブビデオ、アルバムと立て続けにリリースを重ねた彼ら。最新シングル「バリバリ最強No.1」は、この夏全国東映系にて公開のアニメ「地獄先生ぬ〜べ〜」のオープニングテーマにも決定した。また、7月にはシアトルに渡りライブを行ったらしい。

80 BLOODY IMITATION SOCIETY

8月2日下北沢シェルター『THIS IS TAI BAN』、19日新宿ロフト『DRIVE OUT ABOUT』、9月7日下北沢シェルター、20日渋谷クラブクアトロ、23日新宿リキッドルームの各イベントに出演。10月は、8日大阪ロケッツ、10日名古屋ハートランドの名阪ツアーを予定している。夏に入り、ライブリハーサルを中心にクリエイティブな作業を積極的かつ順調にこなしている彼ら。新曲も形になりつつあり、近々ライブで発表されるかも!?

74 浜田麻里

次作の準備中で、曲作りに励んでいる。

75 PAMELAH

7月31日に5thシングル「BLIND LOVE」をリリース。この曲はテレビ朝日系「リングの魂」のオープニングテーマとしてオンエア中だ。

76 B'z

7月5・6日の沖縄コンベンションセンターのライブでツアー『LIVE-GYM '96 Spirit LOOSE』も終了。短いオフの後、楽曲制作に入った。

77 PIZZICATO FIVE

昨年アメリカで公開された映画「アンジップド」が現在日本で公開中だが、そのエンディングテーマとして「ハッピー・サッド」の英語バージョンが使われている。また小西康陽がプロモーション活動として、ヨーロッパでDJツアーを展開中。日本でも次の動きが期待される。

CUT UP 101

98 L'Arc～en～Ciel

シングル「風にきえないで」が好評。『BIG CITY NIGHTS ROUND AROUND'96』は、8月26・27日日本武道館、9月1日名古屋市民会館、3・4日大阪厚生年金会館で行われる。

99 LUNA SEA

ビデオ『LUNATIC TOKYO～1995.12.23 TOKYO DOME』とシングル「IN SILENCE」をリリース後、ツアーを展開中。7月30・31日大阪城ホール、8月3・4日福岡国際センター、7・8日新潟産業センター、13・14日札幌月寒グリーンドーム、22・23日仙台市体育館、30・31日日本武道館。

100 渡辺美里

新作『Spirits』をリリースした。現在展開中の全国ツアーも好評で、追加公演が決定している。9月6日神奈川県民ホール、7日宇都宮市文化会館、17日大宮ソニックシティ、18日千葉県文化会館、26・27日大阪フェスティバルホール。

101 WANDS

引き続き楽曲制作中。

95 LA'CRYMA CHRISTI

7月22日にリリースされたアルバム『Dwellers of a Sandcastle』に伴い、サイン会が決定。7月27日東京ライカエンジン、21日札幌GURUGURU、24日新潟RISKY DRUG STORE、29日大阪DEAD ONE。9月30日大阪IMPホールで行われるイベント「SPECIAL CLUB CIRCUIT SWEET TRANCE '96」にも参加が決定している。ツアー『Home Sick Child』もいよいよスタートだ。

96 RUFFIANS

8月22日名古屋ハックフィン、23日新宿リキッドルーム、24日東京三軒茶屋ヘブンスドア、30日大阪ファンダンゴ、9月20日渋谷LAMAMA、21日東京屋根裏でライブを行う。

97 LAUGHIN' NOSE

『PUNK ROCK 20TH ANNIVERSARY GIG VOL.2』にイギリスのG.B.Hやドイツのジャイガンターと出演。10月8日大阪ベイサイドジェニー、10・11日クラブチッタ川崎で行われる。秋ごろからレコーディングを開始して、12月に新作をリリースの予定。発売記念ツアーはすごいことになりそうだ。

91 矢沢永吉

8月6日にWOWOWにて新作『MARIA』の公開レコーディングの総集編"OPEN RECORDING GIG'96 矢沢永吉"を放送予定。また、今年のコンサートツアー『WILD HEART』のスケジュールが決定した。11月15日青森市文化会館、16日三沢市公会堂、18日山梨県立県民文化ホール、19日群馬音楽センター、21日新潟市産業振興センター、23・24日山形市総合スポーツセンター、26・27日大阪城ホール、29・30日名古屋市総合体育館レインボーホール、12月2・3日福岡国際センター、5日広島サンプラザホール、7日浜松アリーナ、9・10・12・13・14日日本武道館。

92 山岸潤史

今夏はニューオリンズで活動の予定。

93 憂歌団

8月2日横須賀ジャズフェスティバル、23日京都磔磔、24日長野松本ブルースフェスティバルでライブを行う。

94 LOUDNESS

7月25日にベストアルバム『MASTERS OF LOUDNESS』をリリースした。楽曲は、日本のロックシーンに数多くの功績を残した彼らの作品よりベストトラックが選ばれ、現メンバーによる未発表曲である「MASTER OF THE HIGHWAY」など、ファンにはたまらない内容だ。また、8月10日には本人自らボーカルをとる楽曲やMR.BIGと共演した楽曲が収録されている高崎晃のソロアルバム『輪』もリリースされる。

88 media youth

急きょ2ndアルバム『SPIRAL COLORS』よりのシングルカット「ORANGE」のリリースが8月21日に決定! 8月22日には赤坂ブリッツで『LIVE SPIRAL COLORS ACT ORANGE』を行う。また、日本テレビの新番組「Dブリーズ」(毎週木曜・25:45～)のエンディングで、彼らのスタジオライブの模様がオンエアされる。曲目は、8月1日「ORANGE」、8日「Damageの甘い罠」だ。ベースのHIROKIが、BMGビクターよりリリースされる"JAPAN"のトリビュートアルバムにLUNA SEAのRYUICHIとユニットを組んで参加しているらしい。

89 modern grey

イベント「SPECIAL CLUB CIRCUIT SWEET TRANCE'96」をEins:Vierと共に東名阪で行う。9月24日名古屋ダイアモンドホール、26日赤坂ブリッツ、30日大阪IMPホール。2バンドの共演はどんなライブを生むのだろうか。

90 THE MODS

7月21日にアルバム『ZA MOZZ』をリリースした。全国ツアーは、9月15日仙台電力ホール、7日札幌市民会館、21日福岡市民会館、23日宮崎県立芸術劇場、24日大阪サンケイホール、10月1日愛知勤労会館、2日岡山市民会館、8日渋谷公会堂で行われる。

cutup 98

cutup 94

cutup 99

cutup 95

cutup 91

cutup 88

cutup 100

cutup 96

cutup 92

cutup 89

cutup 101

cutup 97

cutup 93

cutup 90

TOPICs
FAME

インタビュー・石田博嗣／撮影・村元志野

「突然ですが、フィックス解散です…」と始まるファクシミリが彼らのマネージメントから、編集部に送られてきた。そこには、元レディース・ルームのJUN（Ds）、元ダイ・イン・クライズのTAKASHI（B）、そして未知の可能性を秘めるYASU（Vo）という強力なラインナップでスタートしていたSHOJI（G）のユニット〝フェイム〟が、東京で行った初ライブをきっかけに今後は正式なバンドとして活動していく、といった声明もあり、すでに大阪、名古屋、新潟ではショートツアーも予定しているという。そんな急展開を見せたバンド周りの状況について、早速ツアーで来阪したSHOJIとYASUに語ってもらい、その言葉の裏付けとして彼らのライブを見せてもらうことにした。

●フェイム結成のいきさつを聞きたいのですが。

SHOJI（以下S）：最初は「遊びでやろか」ってTAKASHIとJUNと音を合わせてみたら、「本気でやろか」になって（笑）。彼らとは性格的にも気が合うし、個人的にもいろいろバンドで苦労してた所を反省しつつ、もうちょっとノビノビやれるバンドを作りたかったしね。それで何人かボーカリストに来てもらって、その中で俺らが一緒にやりたいと思ったのがYASUだけだった。俺はフィックスでは人間関係で悩んでいて、音楽を一緒に作っていると思えないようなヤツとは出来ないと思ってたんですけど、彼はバンドというものが〝一緒に音楽をやる仲間だ〟という意識を持ってくれてましたからね。

●YASUさんがSHOJIさんたちと一緒にやろうと思った理由は？

YASU（以下Y）：偶然に、フィックスをテレビで見たんですよ。その時の曲とかすごい気に入って、「この人とやりたい」と思ってた。誘われた時もいろいろ他でやってたんですけど、こっちに来たのは正解でしたね。

●名実ともに知られた三人とプレイすることに、プレッシャーを感じないですか。

Y：ないと言うとウソになるけど、そんなことよりも「一緒にやりたい」という気持ちの方が大きい。今は、とにかく自分自身を確立したいんですけど、ソロじゃなくてバンドでやっているということをいつも心に置いてるんで、根本的にバンドの音というものがどういうものかをみんなに伝えたいですね。

●バンド名の〝フェイム〟にはどんな意味が込められているのですか。

S：言葉の響きだけで決めたんで、あんまり深い意味はないんですよ。デビッド・ボウイのアルバムのライナーノーツを見てて、これにしようって（笑）。後から意味を調べてみると〝名声〟だったんで、合ってるなって。

●フェイムの目指すサウンドとは？

S：やっぱり歌中心なんで、全部YASUにかかっている。サウンドについては、四人の意見がまとまって、たまたまこんな音楽になっているだけで、まだまだバンドの成長と一緒に試行錯誤が繰り返されると思う。ポップはポップなんだけど、フォークギター一本とかピアノ一発だけでも歌えるような曲にしていきたい。まだまだポップじゃないと思っているんですよ。もっともっとポップになれる。

●SHOJIさんの考えるポップとはどんなものですか。

S：聴きやすくて、大勢の人と楽しめるような、コアなものではない一般的なポップ。それってカラオケで歌えたりとか、狙っているみたいな下世話な感じがあるけど、そういうのは全然ないんで、本当に自分たちが楽しんでやっている。

●歌詞では何を歌っていきたい？

Y：歌詞は基盤だけを俺が書いて、そこからみんなの意見を取り入れていく。日常的なことを歌っていきたいけど、ウソは書きたくないですね。若い人たちが自然に口ずさめるようなものじゃないといけないと思うし…奥は深いんですけど、みんなに共感してもらえる詞。ただ自分の個性も出さないといけないということで、そこら辺のボーカリストが書いているような詞にはしたくない。

S：前回の東京のライブで得るものがあったから、歌詞ももっと変わっていくと思います。今回プロモーションしなかったのは、そこにあるんですよ。軽くお披露目程度にやって、そこで何かをつかんで次に生かそうかと。それと、今回のツアーは今まで応援してくれてた人へのお礼というか、感謝の気持ちでやっている。

●サウンドがポップで歌詞も理解しやすいとなると、どうしても最初は歌メロだけで演奏がお粗末なバンドと一緒のように見られてしまうと思うんですけど。

S：今はバンドが多いですけど、変なヤツって遅かれ早かれ消えていくと思うんですよ。

Y：きっと音楽理論もよく分かっていないんじゃないかな。

S：俺らは伝えられる自信を持ってますんで…意識はしてませんけど、売れたいのは売れたいですから、しっかりとした曲を出して、それでいい方向にマインドコントロールしていければいいなと思っています（笑）。

●フェイムは結成から速い展開でサウンドも確立し、ツアーも行っているわけですが、SHOJIさんが在籍していたフィックスは、結成してから自分たちのサウンドを確立し、初ライブを行うまで2年かかりましたよね。このアクションのスピードの違いはどこにあるんですか。

S：それはやっぱり人間関係じゃないですかね。今まではデモテープを録ってても、俺は周りのバランスを考えてギターを弾いていたんですよ。でも、今はみんなが「もっとギターの音、上げてくれよ」って言ってくれる。音楽を一緒に作る共同体であるべきバンドに対する考え方を間違ってたと思いましたね。だから自分がやりたいようにやり出してからは、すぐに音も固まってきたし、曲も出来てきたし、何か抑圧されてた部分が全部なくなった。

●そんな気分で行った東京でのライブはどうでした？　SHOJIさんは、ステージに立つのも久しぶりだったでしょ。

S：1年ぶりです。ここ何年かずっとそうで、なんか正月みたいですけどね（笑）。ライブはムチャクチャ楽しかったですよ。来てくれた人が書いてくれたアンケートを読むと「みんな楽しそうにやっていて、こっちも楽しかった」というリアクションだったんで、演出も何もしていないのに和気あいあいとやっていたのが伝わってうれしかった。

フィックスのツアーが全部キャンセルになったじゃないですか。それが純粋に音楽を聴いて楽しみに待ってくれてた人たちに対してすごく申し訳なくて、何かを返したいと。だから、あんまり曲がないんですけど（笑）、すぐにツアーやろうってなったんですよ。

●そのツアーのタイトルが「RELAX」なんですけど、そこに込められている意味は？

S：なんかフロに入って「あ～」って感じで（笑）。俺ら自身がリラックスしながら演奏して、ノビノビやっていることを伝えたくてね。だから、来てくれた人も楽しみたいように楽しんでほしい。

●ツアーといっても3カ所だけですよね。

Y：急きょだったんで会場が押さえられなかったんです（笑）。

●きっとYASUさんは観客から「どんなボーカリストなんだろう」って目で見られると思いますが、その覚悟は出来てますか。

Y：心地よい緊張感があればいいかな。無理に意識はしてないんで、本当に楽しむという気持ちでステージに立つつもりです。

96年6月9日、〝TOUR「RELAX」〟の初日である大阪江坂ブーミンホール。SHOJIの話だと今回のツアーに関しては、さほどプロモーションを行っていなかったそうだが、なかなかどうして3百人は動員している。彼らの復活を待ち望んでいた熱心なファンがそれだけ多く、メンバーが在籍していたバンドがシーンに与えた影響の強さを物語っている。

定刻ジャストにフロアを照らしていた照明が落とされると、火が付いたようにカン高い歓声が響き渡った場内に、SEとしてデビッド・ボウイのファンキーなナンバー「FAME」が流れ出す。幾重にも重なった黄色い歓声は、言葉を超越した音の塊となってステージとフロアを隔てる幕を揺らしていた。やがておもむろに幕が開き、ライトの

中にメンバーの影が浮かび上がると、声のレベルがさらに上昇。やはり人気バンドに在籍していたTAKASHIとJUNに声援が集まっていたが、いったん演奏が始まると強い四つの個性が一つとなり、バンドとしての存在感を強力にアピールし、良質のサウンドがミーハーチックな歓声をねじ伏せる。

初めて耳にする曲にも関わらず、サウンドに体を完全に預けているステージ前の集団を、ステージ上からうれしそうに見つめているSHOJI。TAKASHIとJUNは、肩の力を抜いて楽しそうにプレイし、大阪初見参のYASUもボーカリストとしての貫録を客席に見せつけている。そして、だれ一人突出して前に出ることも奥に下がることもなく四人のメンバーが一丸となって放つ、メロディアスで疾走感のあるポップチューンが観客をサウンドの中へと引き込んでいく。

オリジナルナンバー3曲を披露したあと、SHOJIのファンに対する謝罪の気持ちを表すように、ツアーを行うことなく解散してしまったフィックスのナンバーが2曲プレイされた。存在感のある重いフレーズをはじき出すTAKASHIと的確なビートを刻むJUNのリズムセクションから生まれるグルーブが観客の腰を揺さぶり、それまでスリリングなボーカルスタイルを取っていたYASUは、ムーディーで湿り気のあるメロディーをあやしく歌い上げ、まるでフェイムのオリジナルナンバーのように感じさせる。そして何よりもステージ上でTAKASHIとSHOJIが笑顔でプレイしていたりと、メンバー自身もライブを楽しみ、心の底からノビノビとプレイしているということが、フロアの一番後ろで観ている僕のところまで伝わってきた。続けてプレイされたオリジナルナンバーも、曲を聴かせることを第一に考えられたアレンジで、バックの三人のプレイがボーカルを押し出し、YASUもしっかりとその中で自分のカラーを出し、サウンドの中に包み込んだ観客を心地よく酔わせていく。

全6曲、約30分で終演を告げたライブ。普通なら欲求不満でブーイングの嵐が吹き荒れるところだが、家路につく観客はみんな満足そうな表情を浮かべていた。それは今まで待ち続けていたことに対する、アーティストからの感謝のメッセージを、一番欲しい形で受け取れたからだろう。そして、彼らのクオリティーの高い楽曲と、安定した演奏力は、シーンにあふれるアイドル指向の歌モノバンドに耳が慣れている観客に、本当のバンドサウンドというものを確認させたに違いない。

PLAY LIST
1. RHAPSODY
2. DAISY
3. CRESCENT WORLD
4. SAVE MY LONELINESS
5. BALLET
6. I WANNA TAKE YOU HIGHER

●フェイムは、Jロックシーンの中でどんな存在になりたいと思ってますか。

S:「○○みたいに」や「○○を抜かしたろ」というのはなくて、自分らなりにボケ〜っと出来たらいいなって(笑)。やりたいことをやって、それがムーブメントになって、俺らのジャンルみたいなものが出来たらいいですね。

●最後に、7月から始まるツアーはどんなものになりそうですか。

S:そのツアーで俺たち各自が復活したことやYASUの存在とかを完ぺきに認知してほしい。それだけの自信を持ってステージに立つんで、聴きたい人は来てくれって感じですね。

Y:自分自身を確立させていくという過程で、きっとボーカリストとしての頭角がどんどん現れてくると思うし、それなりの自信も持ってます。

LIVE SCHEDULE
〜TOUR「RELAX」Vol.0〜

7/26 仙台エルパーク141スタジオホール
7/28 札幌メッセホール
8/1 新潟O-DO in JUNK BOX
8/2 名古屋クラブクアトロ
8/6 高松オリーブホール
8/7 松山サロンキティ
8/9 博多Be-1
8/11 大阪クラブクアトロ

featuring ZARD

ALBUMS

4	3	2	1
	7	6	5
10	9	8	

1 Good-bye My Loneliness
2 もう探さない
3 HOLD ME
4 揺れる想い
5 OH MY LOVE
6 forever you
7 TODAY IS ANOTHER DAY
8 サヨナラは今もこの胸に居ます
9 MY FRIEND
10 心を開いて

NEW ALBUM

SINGLES

ZARD ALBUMS AND SINGLES

私の中に住んでいる違ったワタシ…そんなキャラクターを思うがままに操れる人って、世の中にそういない。たとえば漫画家や作家はストーリーの中に思い通りの人格を作り、役者は与えられたシナリオの中で、全く違う人間になりきってしまう。そして作詞家も。想像力と言葉のセンスに自信があれば、もう一人のワタシが自由自在に動きだす。今回のコレクションは、その作詞家であり、ボーカリストでもある坂井泉水の個性が結集したザードにスポットを当て、魅力を再確認していこう。

【アーティスト・ヒストリー】

音楽と向き合うのはピアノを弾く時だけだった坂井泉水が、ボーカリストになりたいと大きな夢を描いたのは高校生のころ。月並みなロックボーカリストとは明らかに違う、シャーデーのコンサートを観て、音楽の持つ「静」の魅力に触れたことがキッカケで、音楽に対する姿勢を真剣なものに変えた。91年2月、彼女はザー

featuring ZARD

ドとしてデビューしたことでその一途な思いをかなえてみせた。ボーカリスト・作詞家、坂井泉水の誕生である。

ザードはグループでありながら、テレビ出演、ライブ活動を一切行わないミステリアスさ、キャッチーな楽曲、一度聴くと忘れられない坂井のボイスなどの要素が重なったことと、テレビドラマの主題歌からCFソングまで、積極的なタイアップによってシングル&アルバムの驚異的なヒットを連発、揺るぎない人気を獲得、現在に至る。

【サウンド・ビュー&ヒストリー】

待望のニューアルバムの話題へ移る前に、少しデビューから現在までの5年間にリリースした作品を簡単に振り返ってみよう。

坂井泉水の初々しいボイスが印象的な甘酸っぱい思い出たちと一緒に…。

1st『Good-bye My Loneliness』(91年3月)と、デビューの年のクリスマスにリリースされた2nd『もう探さない』(91年12月)はミニアルバム。サウンドはどちらもハードな風合いに仕上がっているが、2ndのころからポップさとハードさ(特にギター)が絡み付く独特のアレンジが登場。徐々にザードらしさが顔を出し始めている。ロック然としたサウンドに合わせるように力強く歌おうとする坂井のボイスも、現在の彼女のイメージとは少し違っている。これら2枚は、少ない収録曲数ながら曲それぞれに違った個性を発見できる。

セールス毎に勢いがついて100万枚以上を売り上げた3rd『HOLD ME』(92年9月)には良質なポップロックが勢ぞろい。先に述べたザードらしいサウンド(筆者はあえてコレを『美女と野獣』サウンドと名付けたい…)も完成の域に達している。そのサウンドに彩られる坂井泉水のボーカルの表現力も進歩し、曲によってボイスキャラクター(1、2作目のような大人っぽさと可愛らしさ)を使い分けているのがよく分かる。

4th『揺れる想い』(93年7月)は200万枚を超えるセールスを記録した、ザードの記念碑的アルバム。ポップなカラーをさらに押し出すべく、サウンドフィールにマイナーチェンジも。ハードさの度合いを抑え、アコースティックギター・サウンド主体のアレンジを聴かせるM-③「君がいない」や、大黒摩季や近藤房之助のコーラスも入って楽しそうな曲調のM-⑦「Listen to me」が新鮮。音楽性の広がりを見せてくれた。

続く『OH MY LOVE』(94年6月)、そして6作目『forever you』(95年3月)も期待通りチャートをにぎわせてくれた。サウンド面もさらなる進化を遂げ、重さや堅さの質感にアコースティックな清涼感が加わり、坂井の声質によりマッチするようになった。ア・カペラ(無伴奏)コーラスやアンプラグド・サウンドを採り入れた第5作、坂井も大好きだと言うビートルズへの愛情を感じさせるアレンジやボサ・ノバも飛び出した第6作では、リスナーをいい意味で裏切る部分も見えたし、心が熱くなるサビのメロディーも定番に。ザードを知る人達はもう、コレがなきゃ、生きられなくなってるといっていいはず。

【ワーズ・アナライズ】

ここでは作詞家、坂井泉水の詞の世界をのぞいてみよう。心のルーペの用意はいいかな? 詞を書く人は、言葉の世界の中で、思い通りの「ワタシ」に変身し、「ワタシ」の考えてる「思想」をメッセージとして発信することができる。そしてその表現を立体的にするのがボーカリストだ。シロウトのカラオケとは違い、一字一句をかみくだき、心を込めて歌うことが求められる。坂井泉水はどちらもこなしてしまうから、彼女の詞心の伝送効率は極めて高い。彼女が書く詞が好きだというファンがいるのもうなずける。しかしリスナーは、ジャケット写真の物静かで内気そうな彼女のイメージと歌詞に描かれている主人公をイコールで結びがちだ。そんな先入観を捨てて、素直に言葉を受け入れ、歌を聴けば、色々なシチュエーションとキャラクター像が浮かんでくることに気付くだろう。

彼女の作詞の方法は「曲先」といって、作曲家があらかじめ作った曲に後から歌詞を乗せていくやり方がほとんどらしいが、曲の原型であるデモテープを聴いた段階で浮かぶイメージをもとに作詞し、録音の時までそのイメージを持続させることが出来るのだそうだ。これは大きな才能であると言える。余談だが、彼女は自分の受けたイメージを大切にするため、作曲家との意見の交換は基本的にしない主義らしい。この自分の感性への集中力には驚くばかりだ!

それでは本題に。初期のころは、内気でネガティブな女の子像が描かれることが多かった。失恋しても、彼への気持ちを臆病になりながら引きずってしまうような…。「好き」と言えないままフェイドアウトする恋、思いを寄せていた彼に裏切られて強がってしまう女心。そうかと思えば、「Good-bye My Loneliness」では、好きな彼と一緒にいるのに恋愛にどこかさめた気持ちと不安を抱いている主人公がいたり。様々な恋のカタチを彼女らしい言葉で繊細に表現している。その中で特に個性を感じるのは、歌詞の中に思ってる事(こうなってほしいという願望)とあべこべの感情のどちらも描くことで、気持ちを強める手法だ。3rdアルバム以降からはそんな主人公たちにも少しずつ精神的な強さや前向きさが表れてくる。失恋の痛手を乗り越えて、新しい自分探しを始める主人公の姿や、訳あって彼と離れていても悲しさを見せずにエールを送る「負けないで」などの言葉に励まされた人は多いはず。また、同性の共感が得られそうな女性像が描かれたメッセージソングもある。その他、結婚をテーマにした詞や、「三角関係に悩む心の描写、大胆にも女性からオトコを振るシチュエーションや不倫をモチーフにした「もう少し　あと少し…」など、今までとは違った恋愛感の表現も生まれ、詞作の幅もグンと広がった。そして男性の視点から描かれた詞にも注目。片思いだったり、失恋を後悔している男性像に、恋愛の難しさを感じずにはいられない。…といった具合に多彩な表現力を持った坂井泉水の詞の魅力が、今後の作品でどう変ぼうしていくのかも聴き逃せない。

【ニューアルバムについて】

お待ちかねの7thアルバム『TODAY IS ANOTHER DAY』(96年7月)が1年3カ月ぶりにリリース、大きな話題を呼びそうだ。遂に坂井泉水がアルバムプロデュースを手掛け、CFやTV番組テーマソングとしておなじみの楽曲に加え、フィールド・オブ・ビューや彼女もゲストボーカルとして参加するユニット、バルビエなどに詞を提供した曲をセルフカバーしている。それらを聴いて、原曲のアレンジ&イメージが薄れてしまう程、彼女のボーカルの個性の強さを改めて感じた。

以前からサウンド作りにも積極的に参加していた坂井泉水だが、本作ではプロデューサーという立場から、ザードサウンドをかなり大胆に変化させた。前作までと比べると、ギシギシに詰め込まれていた音色をスッキリとシェイプアップさせ、アレンジもシンプルに。そのせいか、ボーカルが一層際立って聴こえた。またアルバムを重ねる毎に、新しい表現に挑んで音楽性を広げてきたが、その試みには本作でも積極的だ。ビートルズサウンドあり、ドラムにブレイクビーツを採り入れたりと、洋楽のテイストをどんどんセンスよく吸収して進化を続けている。また、ミキシングエンジニアにレッド・ツェッペリンやヴァン・ヘイレンを手掛けたアンディ・ジョーンズを迎えるという、サウンドクオリティーへのぜい沢なこだわりも聴かせてくれる。詞的な部分では、等身大の彼女自身が主人公かな?と思わせる楽曲が増えたのも特徴だ。M-⑥「眠り」、M-⑦「心を開いて」、そしてM-⑩のタイトルチューンなど。ストレートで自然な表現が心に響く。もちろん、今まで通りの主人公達も元気だし、初期の曲想を感じさせるような、原点回帰した楽曲もある。この盛りだくさんの内容はぜひ、これからザードをもっと知りたいと思っている人にお薦め。不快指数を下げてくれそうなそう快サウンドも、まだまだ暑い日々の必需品になることだろう。

ライブを“試練の場だ”と言い切る頼もしいバンド

「まだライブの最中は、あまり楽しいって思えなくて、今は必死って感じ。でも気持ちいいんですよね(笑)。たまに気持ちよくない時もあるけど、それは自分の責任ですから」(SUNAO、B、以下S)

6月17日大阪ロケッツで観た平均年齢弱冠20歳という若いバンド、ティンカーベルのライブは、余裕こそなかったが自分たちの音楽を表現しようとする前向きさがひしひしと伝わってくるものだった。ハードロックをベースにメロディアスな歌が乗り、ツインギターが厚みと広がりを聴かせて絡むと、まるで曲に包み込まれているような感触を味わせる。

95年8月にSUNAOを中心にMADOKA(Vo、以下M)、YOSHITSUGU(G、以下Y)、YASU(Ds、以下YS)の四人で結成。同年12月にTOSHIHIRO(G、以下T)が加入し、ツインギターとなり現在に至る。今年に入ってから本格的に五人で活動を開始した彼らは、音楽性の幅も広げつつ着々と人気を高めているのだ。

「四人だったころは僕が作ってきた原案そのままを曲としてやってたんですけど、五人になってからはみんながアレンジに敏感になってきたんですね。僕が持ってきたものに対して、それぞれのパートがフレーズなりパターンを指摘して『お前、それはダサイ』と、特にドラムのYASUがいちゃもんをつけるようになって(笑)。でも彼らは僕が考えてきたものより確実にカッコいいと思えるものを考えるから文句の言いようがない(笑)。だから今はいい方向でバンドのサウンドが出来てるって感じですね。ただボーカルのメロディーに関しては、MADOKAのメロディー感を大切にしたいんで、すべて彼に任せてます」(S)

どこか心の奥の方を刺激するようなメロディーに乗って聴こえてくる詞は、やり切れない思いや戸惑いを感じさせる。それは男だからとか女だからというよりも、人間としてだれもが共感できる内容だ。

「詞に対しては僕自身が歌っていく以上、自分の表現したいものを歌っていきたいっていうのがあるんです。それを芯(しん)に持って、きれいなことばかりじゃなく汚いことまで。だから、ある意味で自分自身を傷つけたり、周りを傷つけてみたりね。それは自分が感情的になってる時より落ち着いてから思い起こす方がとげとげしく言えたりするんで、『ここや』っていう時には相手がグサッとくるぐらいナイフのようにとがらせる。だから今ある詞のテーマは、何年も前の出来事だったり事柄だったりするんですよ」(M)

「僕が彼の詞を読んだ時、『これ、俺のこと言ってるのかー』って言ったぐらい、自分にも通じるところがあった」(S)

フッと思いついた時に常に書いているという詞は、持ってきた原曲を聴きながらMADOKAが「これだ!」と感じた時に曲と融合する。曲と詞が別々に進行しているだけに、ここの接点がバンドのキーポイントになるわけだ。

「原曲の段階で僕なりのテーマはあるんですけど、MADOKAには伝えないんです。僕が持ってるテーマと、彼の詞が同じじゃなくてもいいと思ってるんで。ただ、彼が何も感じなくて曲にならないってことが多々ありますね」(S)

曲が詞のイメージと一致する時点でMADOKAの中ではメロディーが流れているという。そこにはもう、彼らにしか出せないティンカーベルだからこその音楽が存在しているのだ。

「MADOKAの心境の詞と、歌いたいメロディーと、僕たち各自がやりたいプレイがバッチリはまって出来てる楽曲って感じなんで、曲が出来るっていうのは運がいいことなのかもしれない。これから先も運に頼ってやっていく(笑)。だからすごく自然なんですよ」(S)

「その自然の中から、何をするにも他のバンドとは違う色をこれから出していきたいですね」(YS)

「でもこのバンドだとそれが出せると思ってます」(T)

[インタビュー・村田圭子]

ゆらゆらと　物憂げに思いをよぎらせ
やり場のない苛立ちは　束縛を嫌う僕を縛りつけてた

向かい合った互いの意志　つきとめられる事に疲れて
片書きはほどいたはずなのに　望み通りには進みきれずに

ねじ曲がる道しるべを僕はたどっているの?
時折、目の前をちらついては消えていく…

振り返らずやり過ごして　振り返れずにやり過ごす
浮ついて脅かされて　squal in heart

繰り返す吐き出す言葉　とどめてた文字とあてはまらず
虚しさを覚えたこの姿　隠し切れない僕がそこに居た

ねじ曲がる道しるべを僕はたどっていたの?
時折、目の前をちらついては消えていった　夢のように…

近づいてくるぬくもりに　あきれるほどトゲを刺して
試したつもりが試されて　squal in heart

振り返らずやり過ごして　振り返れずにやり過ごす
浮ついて脅かされて　squal in heart

THE BRILLIANT GREEN

このクールさと気だるさがたまらない

無類の洋楽オタクである川瀬智子(Vo)、松井亮(G)、奥田俊作(B)の三人で94年に結成されたザ・ブリリアント・グリーン。彼らは結成後すぐに自宅録音を始め音源制作にいそしみながら、ファッションショーで演奏をしたり、クラブイベントに出演するなど、自分たちの音楽を最も表現できる場所を模索している。そのサウンドは、90年代ブリティッシュロックのにおいをプンプンさせながら、踊りだしたくなるほどのグルーブ感を効かせたベースラインと、時にノイジーに、時に繊細に表情を変えるギターがセンス良く絡み、クールでスタイリッシュな印象。そこにフレンチポップを思わせる気だるくささやくようなボーカルが悩ましく重なる。イギリスっぽいウエット感とフランスっぽいアンニュイさがうまく溶け合った独特の世界は、やはりクラブの雰囲気にピッタリはまりそうだ。また、アコースティックギターとボーカルだけのシンプルな楽曲もあり、多彩さをのぞかせている。ドラムがいないこのバンド、サウンドのイメージから打ち込みかなと思ってしまいがちだが、あくまでもバンドサウンドにこだわりを持ち、ステージではいつもサポートを起用するという。

フレンチポップ的な女性ボーカリストが多い昨今、個性をどう打ち出すかが大きなポイントだ。

INDIES DISC WATCHIN'

Shadow Trap Of Mirrors
[kiss]

メンバーが三人とは思えないほど音に厚みと広がりがあり、何より安定するビート感がたまらない。シャドウ・トラップ・オブ・ミラーズの2ndミニアルバム。躍動感あふれるドラムとベースが心臓の鼓動のように確実なリズムを刻み、まるで人間の持つ様々な感情が乗り移ったかのようなICHIROのギターが縦横無尽に絡むことで生まれる彼らのサウンドは、一個の生命を感じさせるほど強烈なインパクトを放つ。そこに耳を心地よく刺激するメロディーに乗った、感情の赴くままに多彩に声色を変えるボーカルが重なる。そこからは人間の強さと弱さが痛いほど伝わってくるのだ。だからと言ってドロドロというわけでなく、良質なポップセンスで彩られていて気持ち良く、その空間に酔いしれることが出来る。これがライブでどう表現されるのか興味深い。

★彼らのCDを5名の方にプレゼント！

SAVOY TRUFFLE
[SAVOY TRUFFLE]

カセットラベルの右上に表記されている「邦楽しか興味のない人は聴かないでください」というコピーにまず目がいく。"なんと大胆な"と思いながら聴いてみると、本格的なブルース・フィーリングを漂わせるロックサウンドが流れてきた。そこに英詞をナチュラルに力強く歌うボーカルが、湿り気のあるメロディーに乗ると洋楽顔負けの心地よさがある。結成して6年目を迎えるサヴォイ・トラッフル。彼らが音源を発売するのは実にこれが初めて。以前本誌のインタビューでは音源を出すことについて「バンドの勢いがなくなってしまうような気がしてね」と、かたくなに音源化を拒む姿勢をとっていた。今回どういうきっかけで発表されることになったのか定かではないが、彼らの中で「今だっ！」という確信があったに違いない。収録された4曲には、現在の自信とパワーが満ちあふれている。

★このテープを5名の方にプレゼント！

インディーズ情報

●I・Z・M
8月 3日 渋谷オン・エア・ネスト
9月 1日 尼崎ライブスクエアビブレ
10月27日 尼崎ライブスクエアビブレ(ワンマン)

●APRIL FOOL
※引き続き新ベーシストのオーディション中。"骨太ハードロックが好きな、バンド中心生活が出来るという20歳以上の加入者（男女不問）"を募集中。希望者はフールズ・プロジェクト06-320-8009まで。
※インターネット・ホームページを開設(http://www.bekkoame.or.jp/˜kfujii/fools/)。

●CURIO
8月 1日 原宿ルイード

●GLAD all OVER
7月30日 名古屋ミュージックファーム
8月 5日 渋谷オン・エア・ネスト
7日 池袋サイバー
8日 市川CLUB GIO
12日 大阪クラブクアトロ
15日 福岡Be-1

●SAVOY TRUFFLE
8月23日 東京四ツ谷フォーバレー

●Shadow Trap Of Mirrors
8月12日 大阪クラブクアトロ
21日 新潟O-DO
23日 京都ミューズホール
29日 福岡Be-1
9月 2日 渋谷オン・エア・ネスト
※彼らの2ndミニアルバムが8月8日リリース！

●SELAPHY
8月12日 渋谷オン・エア・ネスト
18日 名古屋・栄セントラルパーク(野外フリーギグ)
24日 名古屋ELL
25日 TOYOTA MUSIC BATTLE(コンテスト)
★パワフルでメロディアスなハードロックを聴かせる彼女たちの4曲入り最新テープを5名の方にプレゼント！

●TAB
7月29日 大阪二丁目劇場
8月27日 大阪ベイサイドジェニー

●DIXI EMY
7月28日 岡山ペパーランド
8月 1日 岡山ペパーランド
2日 岡山ペパーランド
14日 岡山ペパーランド
20日 広島並木ジャンクション
8月31日 大阪ギルド

●Tinker Bell
8月 2日 大阪ウォーホール(イベント)
17日 名古屋ミュージックファーム
20日 池袋サイバー
22日 長野J
30日 大阪光明アムホール
※8月2日のイベントでは出演バンドによるオムニバスデモテープが配布される！

●覇叉羅
8月 5日 目黒鹿鳴館
7日 名古屋クラブクアトロ
9日 大阪ベイサイドジェニー
18日 渋谷オン・エア・イースト

●the Barnetts
8月 8日 大阪ベイサイドジェニー

●THE HARPER ST. BAND
8月16日 大阪ロケッツ
9月 2日 大阪ロケッツ
6日 吉祥寺マンダラ
※8月16日はテキサス・トミー（Vo）とBlues Burnin' Birdsとのセッションライブ

●ぱるぽら
8月10日 大阪ベアーズ
20日 大阪クラブクアトロ
9月27日 下北沢シェルター

●THE FILM
8月 3日 大阪ブランニュー
12日 神戸楽屋

●BOOBY TRAP SPEAKER
7月27日 大阪ロケッツ(ワンマン)
8月17日 大阪ロケッツ
10月 8日 大阪ロケッツ（with BLOODY IMITATION SOCIETY）
※7月27日のライブでは、入場者にもれなくプレゼントがもらえる！

●THE BRILLIANT GREEN
8月14日 大阪クラブクアトロ(イベント)

●THE PORT
8月23日 大阪クラブクアトロ
29日 大阪ベイサイドジェニー
9月 9日 下北沢クラブQUE

●U.S.R.
8月14日 京都ミューズホール
29日 大阪バナナホール

●Raspberry Circus
8月23日 福岡Be-1
※この日は愉快なセッションイベントがあるそうだ。

●ここに登場しているバンドの中でAPRIL FOOL、GLAD all OVER、TAB、THE PORT、THE FILM、U.S.R.、Raspberry Circus、Shadow Trap Of Mirrorsは、音源（テープ、またはCD）を下記のレコード店で店頭販売および、通信販売しています。在庫の確認および、通信販売方法などは各店へお問い合わせください。

店舗	TEL	FAX
JEEZ大阪心斎橋店	TEL 06-211-0063	FAX 06-211-9656
JEEZ京都北山店	TEL 075-702-6888	FAX 075-702-6999
JEEZ名古屋栄店	TEL 052-241-7676	FAX 052-241-7747

★プレゼント応募方法★

官製ハガキの裏には聴いてみたいと思ったバンド名を1バンドと、あなたの住所・氏名・年齢、ハガキの表には「ジェイロックマガジン インディーズ・ジャンク・ボム プレゼント係」と明記の上、ジェイロックマガジン社宛に送ってください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。締め切りは8月26日（必着まで）。

今月のクランケ
TAB

JUNK CLINIC BOMB

ドクター
明石昌夫

「僕はメジャーアーティストのアレンジやプロデュースをしながら、B'zのサポート・ベーシストをしてるんだけど、去年自分のバンドを作りたくなってインディーズとしてAMG(明石昌夫グループ)を始めたんだよね。AMGのメンバーは僕以外みんなアマチュアで完ぺきなヤツはいないけど、必死で頑張ってる姿は見てて気持ちいい。実際、ライブをする度にどんどん成長してるしね。そんなきっかけもあって、今インディーズにすごく興味がある。インディーズのヤツらって、やっぱりいろんなことで悩んだり壁にぶち当たったりしてるだろうし、僕もそうだったしね。だから、僕の職業の部分とこれまでの経験をインディーズのヤツらと会って話をしながら、『こうしたら、カッコ良くなるよ』とか『それは、こういうものだよ』的なアドバイスが出来ればと思ってるんだけど…。
今回のタブはテープを聴いて、サウンドがすごくしっかりしてるから、それぞれの音に説得力を付けると、もっといろんなことが出来るなっていう可能性を感じた。それとボーカリストの伊藤くんの声質にひかれるものがあって、会ってみたくなったんだ」(明石昌夫)

明石(以下A):タブはどんな感じのサウンドを目指してるの。

伊藤(Vo、以下I):うーん。メロディーがポップで、バックがヘビー。

A:バックがヘビー? ヘビーと言っても、いろいろあるけど、どんな感じ?

I:僕のイメージでは、ザ・フーとかスモール・フェイセス(※)とかのガァーッ(彼はサウンドを説明するためにがなり出す)っていう感じですね。

A:なるほどね(笑)。

森村(Ds、以下M):もともと彼の持ってる声質とかメロディーラインがポップなものなんで、そうなるだけで。そんなにポップなものを作ろうっていう意識はないです。

A:その方針は正しいと思うよ。声がポップでメロディーがポップ、で、サウンドもポップにすると面白くも何ともなくなるからね。

M:だからメロディーも、部分によってはポップなんですけど、それだけにはならないように意識してますね。逆にヘビーなメロディーを歌っても、そんなにアクが出ないし。

I:僕らって最初はポップロックをやろうと思って、無理矢理ポップにしてたんですよ。で、なんかしょうもないっていうか、単純っていうか…、アクが全くなくて。で、『super TAB』のテープを作るときに「もっと自然にやろかー」みたいな(笑)。やってみたら結構評判が良かった(笑)。

A:そっちの方が意外と評判いいでしょ。狙って作っても大した評判は返って来ない。結構好き勝手にやった方が、良い評判が返ってくる。それはね、僕もずっとそうやってて、いつもそうだから(笑)。行き過ぎかなと思うぐらい思い切ってやって、ちょうどいいからね。だから、なるべく音を分厚くしないようにして。今だと良い機材でレコーディングとか出来ちゃうから、あんまり音を良くしないようにした方がいい。音をきれいにしてしまうと、絶対に面白くなくなっていくから。プレイでもなるべく直さないようにしたりとかね。

M:イケイケで(笑)。

A:そうそう(笑)。普通レコーディングをやってると、「ここがちょっとおかしい」とか言って、どんどん直されていくんだけど、そうじゃなくて、もっと変な方向に行った方が結果的には世の中で受け入れてもらえるから。タブはサウンドをもっと極端な方向に持っていったらいいんじゃないかなと思った。「なんじゃこりゃ〜」っていうか(笑)。

M:それは部分部分ですか?

A:全体の印象としてね。

M:ポップなものにアクをつけるのは難しいな。

A:それはサウンドであったり、それぞれの音の音色だったりパターンだったりね。普通こうするなっていう定番のパターンがあったら、それは一番最後に取って置いて、その定番以外のことを何かやろうとしてみる。どうしてもこれはしょうがないなっていうことになれば、それはそれでやっていい。そういうことをいちいち考える。今までにいろんな音楽を聴いてきたと思うけど、そこで「普通はこうするよな」「これはありきたりだな」と思ったらなるべく避けるようにしてやってみる。ただ、〝何がありきたりか〟っていう部分は、それぞれが持ってる一つの説得力で思いつくわけだからさ。で、次はそれを自分の中で採用するかしないかというところで、もっと他に変なことはないかなってね。

中村(B):何パターンか出してみる。

A:そうそう。そこで収拾がつかなくなったところで何かが始まると思う。小さくまとまったら面白くないから。それは音楽を作っていく上での基本的な姿勢として持っていた方がいい。メロディーにしてもそうだし、歌詞にしてもそうだし、もうすべて。

I:変なことをするのは基本的に好きなんですよ。でも変なことをしようとしても、それをうまくまとめられなかったりするときがあるんです。

A:そこを投げ出さないで、もうちょっと頑張ってみたら絶対に面白い(笑)。それって今までにないものを作ることになるから大変だけどね。でも、ないものを作るんだから当たり前だし、そうしていかないとお金出して買ってもらえないし。

I:それも、あんまり考え過ぎて変なことをしたらダメなんですよね。パッと思いついたままやった方が。

A:そうそう。考えてポップに作ってもダサくなるのと同じで、考えて変に作ろうと思っても絶対おかしくなる。それは感性のものだからね。だから、ちょっとした思いつきを大事にした方がいいよ。話は変わるけど、伊藤くんの声質がいい。歌が受け入れられるのって、やっぱり声質が重要になってくるんだよね。歌は練習したりとかボイストレーニングをすればどんどん変わっていくけど、声質自体は絶対に変わらないから。

I:最近、すごく親に感謝してるんですよ(笑)。

A:親に感謝するとしたら、それぐらいしかないよね。家に帰ったら親に「いつまでそんなことやってるんだ」とか言われたりしない?

M:それが一番の悩み(笑)。

A:親がどうのこうのっていうのはね…、ある程度売れるっていうか、世の中に認められるまでは難しいよ。僕だって、つい最近だもん(笑)。親が僕の出てるライブをうれしそうに観に来るの(笑)。

(全員爆笑)

A:「こいつら急にうれしそうにしやがって」って(笑)。急にミーハーになって(笑)。それも面白いけどね。あんなに反対してたくせにって。親って自分の子供のことは結構分かってないから。だって、僕の父親って音楽がすごく好きなんだけども、僕が大学を出て就職しないで音楽をやってる時に、親父に「プロでやってくには一流にならないと意味がない」みたいな話をされてね。おまけに「お前にそんな才能は絶対にない」って断言されて。いまだに根に持ってるんだけどね(笑)。音楽って要は続けた者勝ちで、やめたらそこで終わる。そのやめるか続けるかは結局自分が決めることだからね。

※ザ・フーとかスモール・フェイセス
ザ・フーとスモール・フェイセスは、60年代前半にイギリスで起こったモッズサウンド(今月号のフィーチャー参照)の代表的なバンド。そのサウンドは縦ノリを強調したスピード感あふれるビートと、小粋なギターのカッティングが特徴で、パンクの源流とも言われている。

PROFILE TAB

94年6月に大阪で結成。メンバーは(写真左から)中村保義(B)、伊藤厚(Vo)、森村テツヲ(Ds)、安場哲史(G)、屋嘉部盛正(Key)。ポップかつヘビーなロックを追求しているという彼らのライブは、聴く者すべてを笑顔に変えてしまうほど、すがすがしくてほほ笑ましい。そこには、彼らの音楽に対するひたむきさがあふれている。

GLAD all OVER
HARLEM HEAT TOUR '96

◎ インディーズ初 2ヶ月連続ウィークリーテーマ

"MISS LOVER DAYS (4/22~26)""HI-DRIVE (5/20~24)"がそれぞれテレビ大阪「情報IN」ウイークリー・テーマ・ソングとしてON AIR!

◎ マンスリー・テーマとしてオン・エアー中

6/1～29［毎週土曜日］関西テレビ25:15~25:45「ロックス」(新音楽クイズ番組)エンディング・テーマに"MISS LOVER DAYS"ON AIR!

司会:RIKACO & UJ　ゲスト:●6/1 大黒摩季●6/8 シャ乱Q●6/15 GLAY●6/22 TUBE●6/29 ラルク・アン・シエル

Live Schedule

7/30	Tue	名古屋ミュージックファーム
8/5	Mon	渋谷nest
8/7	Wed	池袋サイバー
8/8	Thu	CLUB GIO 市川
8/12	Mon	CLUB QUATTRO 心斎橋
8/15	Thu	博多DRUM Be-1

このツアー中にご来場の方には、サンプルカセットを無料プレゼント!!

★★★各ライブチケットのお問い合わせは左記ライブハウス、又は、ブレイクラッシュ・レコーズまで

<通販申込方法(通販特典有り)>

郵便局備え付けの郵便振込用紙(青色用紙)の所定の欄にあなたの住所・氏名を記入し、通信欄に次の事項を明記し、代金¥2,000+返信手数料¥500(但し、複数枚希望される場合は枚数分必要)を添えて申し込んで下さい。

通信欄記入事項
1・アーティスト名
2・タイトル名
3・希望枚数

振込先
振込口座番号:00960-9-16122
加入者名:ブレイクラッシュレコーズ

★必要事項に漏れがある場合、商品を発送できませんのでご注意願います。　★到着は、お申込み後、約10日前後となりますのでご了承下さい。

GLAD all OVER 1st ALBUM

Rebirth

NOW ON SALE

SHOXX 8月号"UP TO DATE"ページに掲載
INDIES CD BOOK(7/25発売)"ARTIST SHOW CASE"コーナーに掲載

■ 商品・アーティスト等の詳しい問い合わせ先:ブレイクラッシュ・レコーズ

■ 〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 7F　TEL 06-212-3435　FAX 06-213-7855

THE WIND FROM WEST

"GYO-KAI" ANATOMY

BATTLE TALK with EDITOR IN CHIEF

本コーナーでは、これまで関西発の音楽シーン復活について語ってきたが、これからしばらく、関西きっての事情通の谷奥孝司氏を迎え、彼との対談によって音楽業界の様々な仕掛けを、地方都市・大阪からの視点で解き明かしていきたい。

さて、第一回のテーマは本誌オピニオンコーナーでも話題になった「タイアップ」について。日ごろ流行歌に踊らされている我々の気づかない所で、それらは作られ、仕掛けられているのだ。

里居(以下S):最初のテーマはタイアップということで行きましょう。

谷奥(以下T):例えばCMソングというのは、「ジングル」と「タイアップ」の二種類に分かれると思うんです。「ジングル」って何かと言ったら、ジングルベルのジングルのことです。最近のコマーシャルで言うと、モルツですね。「モルツモルツモルツ〜」。こういう商品名を歌い込んでいく。CMって15秒と30秒の間でいかにインパクトを付けていくかっていうものですから、まず耳慣れるもの、洗脳していくもの、そういったものが必要なんです。

S:コイケヤのCMみたいにですか。「スコーン」とか「ザ・チップス」とか。

T:そういうプリミティブなCMがあると思うんですけど、正にCMソングの原点なんです。その極みが、サウンドロゴと言われるもので、「サッポロ!」とか森永の「ピポパポ」など。音で商品を連想させるもの。聞こえやすいように、入って来やすいものにする職人技の世界が根強くあります。次に音楽はクラシックとか、童謡がなぜ多いか。そこに商品の歌詞を入れていったりする。これは耳慣れているからですよね。耳慣れているものと、耳に慣らすものと、覚え込ませるものっていうような形の進化論的な訴求効果があると思うんです。

一方、70年代に登場したキャンペーンソングなんかはトータル的に商品を売る。商品だけじゃなしに、ライフスタイル的なものを生んでしまおうと。広告の中に百貨店的な戦略や、商品販売の戦略があり、広告会社が介在する形で音を作っていくうちに、「これは音楽のいろんな権利、原盤、レコードの売り上げ、そういったもろもろのもので商売になるぞ」という考え方が生まれてきたんですね。この時代はタイアップを付けるのではなく、タイアップを築く時代だったのでしょう。

S:邦楽ロックが広告やドラマのタイアップソングとして使われているということが、ジェイロックマガジンでは話題になっていて、その是非を巡ってファンの間で意見が交わされているんですが。

T:タイアップの仕掛けられたにおいが気になるんでしょうね。じゃあ、それをスポットとしてテレビで「このレコード買ってください」と宣伝したら、費用はどれぐらいかかるかっていうことですよ。アーティストを売りだしたいというプロダクションが宣伝費という形にした場合の経費は膨大なものですよね。テレビスポット一本15秒流して50万から60万ぐらいかかりますから。それが何かの商品の上に、相乗効果を生んでくれればいいなというのが、もともとの走りだったと思うんですよ。だから、「なかなか粋な音楽使いよるな」「この絵とうまくシンクロしてるな」というようなものだけに限定されてた時代は、確かにあったと思うんです。

でも、「何でこんなCMに歌がついてるの?」というのもある。よく目をこらして下の方を見たら、アーティストの名前が入ってる。レコード会社の名前が入ってる。無理矢理付けてるなと。レコード会社はそれで宣伝費が抑えられる、レコードの売り上げが伸びる。また音楽出版社にまつわる業界の人らが潤っていく。そういう形でタイアップタイアップと騒がれる時代が、バブル直前ぐらいから始まったわけですね。

それもただ単にタイアップ一本取ればいいんじゃなしに、その当時の営業マン、レコード制作の人間というのは、三本タイアップがノルマ。CMをとって、映画をとって、ドラマをとるのが必須だった。だから、何々キャンペーンソング、何々ドラマでも放映中と、二つ書いてあるのがダブルタイアップ。ダブルタイアップをしたら、昔はもうすごいって言ってたのが、いつの間にかノルマ化してきた。何でもかんでも付けてしまえっていうノリになってきたというところが、なきにしもあらずですね。

S:これは当初考えられていた、宣伝と商品の相乗効果という枠を越えてる?

T:越えてると思いますね。このままでは業界の良心はどうなるんだという声はずっと出ています。で、お互いにけん制し合いながら、だんだん悪くなっていくんじゃないかと。でも自分のところはこの走り出した路線を曲げないぞと。だれが最初に引くかということでね。だれも引かない状態で今まで引きずっているんじゃないですかね。

●谷奥氏(右)

S:歴史的に見て最初のタイアップソングっていうのは何ですか。

T:フランク永井の「有楽町で逢いましょう」ですね。当時そごう百貨店が東京に進出したんですが、丸の内の方にばかり人が集まっていて進出した有楽町には人が集まらない。何とか人を引っ張りたいなということが、あの歌を作らせた。その時はタイアップとか言うような感覚もなかったんで、はやり歌からはやる場所に持っていこうっていうような考え方ですよね。

S:タイアップはこれ以降に頻発して来たんですか。

T:「有楽町で逢いましょう」以降は、またパタッと止まるんですよね。

S:じゃあタイアップ曲が目立ちだしたのは、やはり70年代になってから。

T:そうです。タイアップとしては、次に出てきたのが企画物。みんなを南太平洋に連れて行って、写真家はもちろん、コピーライターまで連れて行って、何でもいいから作れと。化粧品のコマーシャルもそこでやってしまえ、歌もやってしまえ、ポスターも作ってしまえと。そういうキャンペーン物があったり。あるいは「ディスカバー・ジャパン」みたいな形で、山口百恵の「いい日旅立ち」をタイアップに付けて、〝もっと日本で発見しましょう〟という昔のJR、国鉄のキャンペーンソングとか。広告会社の仕掛人としての巧みな動きがそこに介在するわけです。

S:タイアップっていうと、僕の印象としては70年代の終わりから80年代初頭にかけての一連の化粧品会社の広告が一番ピンとくる。例えば忌野清志郎+坂本龍一が「いけないルージュマジック〜」と歌ったら、必ずその「ルージュマジック」がキャッチコピーになってる。「赤道小町」とか「ナツコ」もね。結構強引で攻撃的な広告が多かったんじゃないですか。

T:そのころコピーライターブームっていうのがあった。元来の作詞家に加えてそれが作詞もやって、どんどん歌が作られていくっていう時代があったから。ここに広告会社出身のコピーライターっていうのが介在したことで、戦略的なノウハウは音楽業界の中に流れ込んできたと思うんですよ。

S:タイアップじゃないケースなんてあります?

T:例えばテレビドラマでね、TBSの「ふぞろいの林檎たち」でサザンオールスターズの「いとしのエリー」を使ってたでしょ。あれはタイアップじゃないんですよ。

S:そうなんですか。

T:あの時は曲が良いから使ってる。この絵に合うからって言うので、脚本家の山田太一さんや制作現場が「これ使ったらどうだ」みたいなことだったと、僕は聞いてるんですけどね。それに付随してる権利関係を調べたら、TBSの色がない。

S:つまり、その時はまだTBSは意識してタイアップはやっていなかった。

T:ドラマではやっていなかった、あのころは。80年初頭ですね。

S:そういう意味では、YMO関係がCMタイアップやりまくってるころとちょうど符合しますよね。それ以降ドラマにも意識的なタイアップが付いていく。

T:その辺りが、一つの音楽業界の分岐点みたいなもんじゃないですかね。流れが変わっていくところ。人が一番そこから変わっていくでしょ。その現場に立たされる人が人事で変わってくることで、主義主張っていうのが変わってくる。

S:最近のドラマタイアップの成り立ちを説明してください。

T:先日終わっちゃいましたけど、TBS系の人気ドラマ「その気になるまで」の場合は、「ホテル・カリフォルニア」を歌うイーグルスのドン・ヘンリーの声が主演の明石家さんまの声と似てる。若い子だったら錯覚するんじゃないですか。そういう一種の錯覚を意識的に生みながら、さっき言ったCMの聴き慣れた声、見慣れたタレント、キャスティングを使いたがる、その結果視聴率が上がるっていう構図につなげていく仕掛けですよね。でも僕らはちょうど青春時代が「ホテル・カリフォルニア」だったわけですよ。送り手の方には多分、思い出として自分の青春をみんなにもう一回聴いてくれよという切なる気持ちがあると思う。こういうのは純粋な

タイアップだと思うんですよ。「みんなこの歌を忘れないでくれよ」っていう。それはそれでいいことでしょう。クリエイターとして、また世代間のコミュニケーションとして。

S:でも、あの曲が使われるには他に必然的なことがあるんでしょ。

T:なぜあれが使えるのか。いろんな背後にある権利関係で、TBS系列の音楽出版社がその権利を持っているとか、レコードに関してもその息がかかっているだとか。放送局によって全国ネットに流れるから、その音楽著作権料っていうのは、その放送局の系列の音楽出版社に戻ってくるという仕組みがあるわけですよね。高度成長期からずっとくる中で、それを研究しながら何が一番効率的かっていう、本当の経済論争の中で生み出されたたまものがタイアップだと思うんですけどね。

S:なるほど。TBS系列の音楽出版社が現在持っている権利関係の中に「ホテル・カリフォルニア」が入っているということなんだ。

T:ワーナー・チャペルっていう日音の一セクションですね。日音はTBS関連の音楽出版社ですから、TBSが流せば、系列のところで全部流れますよね。大阪だったらMBS、名古屋はCBCというので、28局ネットがありますから。放送局は年間でJASRACに、収益の何パーセントという形で音楽の著作権使用料を納めてるんですよ。でも、TBSは自分のところが払っているだけじゃなしに、MBSとCBCが払っている中から日音という音楽出版社を通して「ホテル・カリフォルニア」の分配を受けることができるんです。自分の関係のところが走ったら、それだけ得なわけですよね。

S:つまり、この関係の中でタイアップ曲が動いている限りは、TBSは払いっぱなしじゃないと。

T:戻ってくるんです。それだけじゃない。その間日音が権利を限定で継ぐ。期間限定でレコードを売れるんですよね。

S:レコードを売るってことになると、日本での原盤権は。

T:原盤権についてはレコード会社が持っている。けれどプレスするために著作権使用料を払わなければいけないですよね。それは録音使用料ということで、日音に払うわけですよ。

S:その関係で日音には二重の取り引きが入ってくるわけですね。

T:例えばこれが日本の曲で、これからヒットしそうな曲だとした場合、まあ今そういうヒットメーカーのプロデューサーが多いですけども。カラオケですぐ歌えるぞとなったら、レコード売り上げだけではなしに、カラオケの音盤、これもレコードと同じ録音とかレーザーディスクとかの著作権料を払わないといけないですから、そこで版権料というのが発生するわけですね。カラオケで歌われている使用料っていうのは、JASRACが徴収してますから権利関係が三重、四重、五重ぐらいになってくるんですよ。よく病院のトイレとか百貨店の店内で流れているようなBGM、あの曲がこんな形でアレンジされて流れているなっていうのも、そういう二次的、三次的な使用のされ方で、見えないところのヒットっていうのがあるんです。

S:ちなみに、その二次的、三次的な使用って、例えば金額的に固定されてるわけじゃないんですよね。話の度に、曲を使う規模によって変わる。

T:だから、プレスだったらプレスの枚数でいきますから、出た部数だけ使用料が入ってきます。自分で全部交渉してくるんじゃなしに、JASRACって団体が代わりにそれを徴収して分配してる。その仕組みをいかにうまく使うかっていうのが、音楽業界のマネージメントの世界ですよ。

S:うーん、深いですねえ。

T:今は単純にレコードの売り上げだけを考えてない。露出度だけを考えてない。次からはどういう形で使われていくかっていうことを計算して、その計算の上に成り立ったものが、タイアップなんです。猫もしゃくしもタイアップっていうこの時代であっても、多少クオリティーを求めてきてる背景には、もっと先まで見越したクオリティーの高いものじゃないと、みんな見向きもしないぞという考え方があるから。タイアップだけで捨てられていくっていう音楽は案外、少なくなってきたと思うんですけどね。残るべきものが残るべくして残る。今なお有線でかかってる、カラオケでも歌われる。

S:タイアップという土俵は同じでも、その曲がその後どうなるか、結果はおのずと出るんだろうなあ。

The Wind from West

里居正裕…本誌編集長。関西にこだわり続けて出版業界に居座った変わり種のエディター。
本コーナーでは地方都市・大阪の視点から音楽業界を見つめ、情報の一極集中や東京至上主義に一石を投じたいと考えているとかいないとか…。

谷奥孝司…毎日放送テレビ編成局ソフト開発部所属。前日本音楽著作権協会(JASRAC)大阪北支部係長で、現職では著作権管理に当たっている。
JASRACでの豊富な経験から音楽業界の深層を知り抜き、これを表裏から詳細に分析できる貴重な存在。彼の名を聞いただけでヒヤリとする人がいるとかいないとか…。

音楽が、それぞれのアーティストの生き方、考え方を音というフィルターを通して伝えているものである以上(時としてそうでないものもあるが…)、彼らの人間性とその音楽を別ものとして考えることはできない。アーティストたちは日ごろ、音楽以外のどんなことに興味をひかれ、何を感じて、何を考えているのだろうか。このコーナーは、彼らの音楽に対するストレートな思いから、あえてポイントを少しはずし、それ以外の様々なモノやコトに託された強烈な「こだわり」や「思い」を、赤裸々に語ってもらうことで、その人間性を感じる場を提供したいと思う。ここに語られる心情も、彼らの心から生まれる音楽に触れる一つの貴重なチャンスであるに違いないのだ。

TEXT by Keiko Murata
PHOTO by Machiko Nishihara

今回の登場はアインス・フィアのボーカリスト、Hirofumi。彼は小学校五年生の時にテレビで観た映画『エデンの東』の主人公を演じるジェームス・ディーン(若くして事故死したアメリカの伝説的な俳優)に多大な衝撃を受ける。それは今も薄れることなく、彼の音楽活動の中に欠かせない存在となっている。

「彼にはずっと生きていてほしかったですね」と照れながらしゃべるHirofumiにとって、ジェームス・ディーンはかけがえのない"心の友"なのかもしれない。

「子供心にジェームス・ディーン扮(ふん)する主人公キャルにすごく共感できたっていうのかな。そのころ僕は、親が好きだったからっていうのもあるんですけど、テレビでやってる『日曜ロードショー』とかをよく観てましたね。特に古い映画が好きでね。でも自分が映画の世界に深く入り込めるほどの感覚は、『エデンの東』を観るまではなかった。あのストーリーは、父親が自分よりお兄さんのことをかわいがることに対する次男坊キャルの嫉妬心をリアルに描いたものなんですけど、僕の中にも親から構ってもらいたい願望があったんでしょうね。だからそういう部分で、主人公の寂しさが分かったんじゃないかな。で、映画の主人公キャルを演じているジェームス・ディーンと実際の彼とが僕の中で完全に一緒になってた。もちろんジェームス・ディーンが出演している他の映画も全部観ましたよ。と言っても三本しかないんですけど(笑)。

僕って本を読むのが嫌いでね。今は詞を書くから勉強のために無理矢理読んでるんですけど、ジェームス・ディーンの伝記は3、4冊読んだな。僕にとってはすごく珍しいって言うより唯一のパターン(笑)。それを読んだときに彼自身にも共感できるところがあって。中には『ここはダメだな』って感じる部分もあったけど、あまり裏切られなかったですね。だから主人公キャルと全然違うとは思わなかった。まあ、そういう本だから誇張して書いてるところもあるでしょうから、それが彼のすべてということにはならないと思いますけどね。

『エデンの東』は、今も三カ月に一回ぐらい観たくなる。人間ってどうしても内面的な部分で波があるでしょ。この映画は僕が音楽をやってて精神的にテンションが低くなった時に無性に観たくなるんですよ。ライブの前日に観ることもあるしね。なんか観る度に小学校のころに感じた感激がよみがえるから。底の方から沸き上がってくるメラメラ系の元気が出てきて、観終わったら結構満足感に浸れて前向きになれるんです。希望があるから。それは、あからさまな希望じゃなくて、苦難あっての結果にあるハッピーエンドっていう感じ。だけどドロドロしてない。これが逆にドロドロ描かれたものだったら観られなかったと思う。

僕はこの映画を観ていると"人はだれかを犠牲にして幸せになれる"って思うんですよ。人間は一人では生きていけないという部分がすごく描かれている映画のような気がするし。時にはだれかに傷つけられ、だれかを傷つけて幸せになってるっていうことが人間には曲げられないものとしてあるみたいな。それがすごく現実的にとらえられるから好きなんです。

ただ、彼が若くして死んでるっていうのが痛いところですね。生きていたら、どんなに落ちぶれてしまったとしても彼が出演する映画はずーっと観たかったし。だって、どんなに落ちぶれようが『エデンの東』の彼は良かったわけですからね。それが僕の中では残念なことですね。生きてればもっと彼のことを健康的に感じられるじゃないですか。もうこの世にいない彼を追い求めている自分の心理って結構不健康なことだと思ってて。24歳で彼は死んでて、僕が25歳になったときに『彼は24歳で死んでるのに、彼より1年も多く生きてる』とか。それってちょっと健全じゃないなって。もし彼が生きてればそんなこと思いようがないわけだしね。そういう意味で僕は好きな人には生きていてほしいタイプですからね。逆に自分の中に生きたいっていう願望が強いんだろうな。

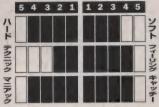
音楽をやっていく上で、っていうかそれ以外でも前向きに頑張れるものとか、頑張ろうとするものがある限り、これからも『エデンの東』はずーっと観続ける映画だろうなって思いますね」

Eins:Vier Hirofumi

PROFILE Eins:Vier

95年7月にシングル「Dear Song」でメジャーデビューを果たしたアインス・フィア。彼らはタイトでリズミカルなビート、繊細かつハードに多彩な表情を見せるギター、力強く伸びるボーカルで深みと広がりのあるロックを聴かせる。常にどん欲な姿勢で音楽に取り組む彼ら、ライブを重ねるごとにその成長をうかがわせる楽しみなバンドだ。

D I S C R E V I E W

[深海]
Mr.Children

「とにかく売れてます。店頭にあればあるだけ売れます」と本音を含んだ冗談を某CDショップの店長から聞いた。もはやだれもが簡単に想像出来る、ミスチルのこんな現象。しかしそれを手にしたリスナーは、果たしてこんな楽曲群やアルバムの雰囲気を予想していただろうか。

ミスチルと言えば一度聴けば忘れないサビのメロディーが売りだが、新作ではその印象よりも全体に漂うどこか懐かしくナチュラルな雰囲気、よりバンドらしくなったアレンジ、そして桜井のボーカルスタイルの面白さが強烈だ。また大ヒットした2曲のシングルが、全体の流れから浮いてしまうというありがちなパターンにはまらず、一本の映画を見ているように展開される14曲の中の1曲として、その存在をアピールする。きっとこの2曲は彼らが進化する流れの中で自然に作られた、このアルバムへとつながるものだったからだろう。抵抗を感じる人もいるだろうが、それ以上にいる、彼らと共に進化してきた人、改めて彼らの音楽性を発見した人はどっぷりと漬かってしまうはずだ。

(文・やまだじゅんこ)

メジャー、インディーズシーンには膨大な数のアーティストが存在し、毎週のように音源が大量にリリースされている。その中からジェイロックマガジンで紹介できるのはわずか5枚。各スタッフがどんなところにインパクトを受け、そのアイテムを推薦しているのかが一目瞭然に分かるように6項目5段階のグラフを添付した。その独断と偏見に基づいた項目についての説明は以下の通りである。

- ●ハード：重厚かつ強靭な迫力あるサウンド。
- ●ソフト：ポップ感覚を重視した軽快なサウンド。
- ●テクニック：テクニックを駆使したプレイが織り込まれている。
- ●フィーリング：テクニックを超越した感情的なプレイが織り込まれている。
- ●マニアック：表現したいと考える音楽を追究した深さ。
- ●キャッチー：不特定多数のリスナーに支持されやすい聴きやすさ。

[Together Along]
HYPERMANIA

バンドの中心メンバーでソングライターでもあったHIROの脱退により、一時は、解散寸前の窮地に立たされたハイパーマニア。しかし、そこから見事に復活を遂げ、心配されていたソングライティングの面も、ボーカルの酒井悠介やベースの丸山哲央、新加入のギタリスト尾崎力がその才能を開花させた。そんな彼らの新作は「ああ、これが歌なんだ」という印象を残す。最近のJロックシーンには聴きやすく、キャッチーな曲がはんらんし、聴き終わった後に何も残さないものがやたらと多い。時にはわざとらしいぐらいにポップ過ぎて、逆に不快感を残す曲もあるほどだ。しかし、ハイパーマニアのナンバーは、悠介がノビのある優しい声で歌い上げるメロディーに乗って、ポジティブで説得力のある歌詞が届けられ、しっかりと聴く者の胸にメッセージを残していく。特にニューアレンジで再収録された「虹の向こうへ…」からは、苦境を乗り越えたメンバーの「捨て切れない夢…」という歌詞に込めた、これからへ向かっての熱くたぎる思いが伝わってくる。

(文・南出哉稔)

[GYPSY DOOL/BLOOD ON BLOOD/微笑みだけをくれないか]
ZYYG

ジーグの7枚目となるシングルは3曲入りのマキシシングル。どのナンバーもメロディーが洗練され、前作のサウンドからすると弱冠ソフトになった印象を受けるかもしれないが、彼らのスピリッツの象徴ともいえる力強いビートは健在だ。はじけるようなボーカルやエッジの効いたギター、存在感のあるベース&ドラムは相変わらずロック臭く、それでいてサウンドは新たな広がりを見せている。やはり福岡と東京近郊の数カ所だけだったとはいえ、初めて経験したライブというものがバンドを大きく成長させたようだ。また、曲によって柔軟に表情を変える高山の男気あふれるボイスが、夢をつかむために走り続けている彼自身に、そしてがんじがらめの時間の中でいつの間にか自分をだまして生きているような私たちに、リアルでポジティブなメッセージを投げ掛けている。そんなボーカルの包容力やサウンドの疾走感は、この後に再び予定されているライブによって、さらなる成長を遂げることだろう。きっと彼らは、これからのシーンを面白くしてくれる。

(文・阿貫雅奈)

[STAY]
氷室京介

前作「魂を抱いてくれ」の発表から実に八カ月ぶりに届けられた氷室京介のニューシングル。彼の場合、過去に届けられたシングルに意表を突かれると共に新たな魅力を見せつけられた経験があるだけに、待たされれば待たされるほど裏切られることへのワクワクする期待が膨らむ。しかし「STAY」は、そんな私の気持ちをあざけるように疾走感あふれる彼らしいナンバーで、「これが氷室だ!」と納得させるビートが存在している。

彼は常にオリジナリティーを発散しながら、今なおロックファンの絶大なる支持を受け続けている数少ないアーティストなのだ。はやりすたりにほんろうされる今のシーンをものともせずに自身を追求する彼の作品に私の好奇心はいつもクギづけになる。それは彼の音楽に対する純粋な思いが輝きを失うことなく、しかもより洗練されてそこに生きていると確信できるから。この曲の場合、彼がその身にたたえるロックの心髄を、改めて思い知らされるという、うれしい"裏切り"となった。

(文・村田圭子)

[SPIRAL COLORS]
media youth

これまでのメディア・ユースに対するイメージはもう捨てた方がいい。デビューから1年、彼らは大きな変ぼうを遂げた。特にドラムスが脱退し、メンバーが三人になったことの影響は大きい。彼らは新たなドラマーを迎えることなく、ライブはバンドサウンドを得るためにサポートを起用しているものの、CDでは打ち込みを使用しているのだ。その無機質なビートとHIROKIの威圧感のあるベースが絡み合い生まれるグルーブと、変幻自在に駆け巡るKIYOSHIのトリッキーなギターが、今までの重厚でアグレッシブなサウンドを、もっと自由で柔軟なサウンドに変化させたのである。また、打ち込みによってキャッチーなメロディーが引き立てられ、それを歌い上げるボーカルDAISUKEの繊細な歌声にも説得力が増している。さらにアルバムの大半の歌詞を松井五郎が手掛けたことにより楽曲の持つ表情も豊かになったが、今後はやはりDAISUKE自身の歌詞で、より彼のキャラクターが伝わる楽曲を聴かせてもらいたい。

(文・樹音檸檬)

ビジュアルの変化。それって音楽とは別モノ?!

●あのビジュアルだから好きというわけではないけど、急にナチュラルになってしまうことには、さみしいって言うか、戸惑いを覚えます。その程度のこだわりだったのかなぁって思ってしまうんです。目を通して音楽を受け止めている部分もあるんですよね。 (新潟・藤井みか・♀・19歳)

●サウンドの進化に伴って外見が少しずつ変化していくのは仕方ないと思うけど、メジャーデビュー当時に比べて、その後のビジュアルが明らかに別人のように変わってしまうアーティストってあまり信用出来ない。ビジュアルもサウンドと同様そのアーティストの重要な表現方法だから、過去の自分達のスタイルを否定するような変化の仕方はしてほしくないと思う。 (兵庫・Dune・♀・26歳)

●要はそのアーティストがビジュアルを変えるタイミングが"売れた"ことにあるから、そういう意見があるんだと思う。でも単に売れただけでビジュアルを変えると言ったって、それに対するリスクって大きいと思う。へたをすると売れなくなるんだし。ビジュアルを"売り"にしているアーティストからすれば、すごく勇気がいりますよね。スタイルを変えたことでファンが増えたアーティストもいれば、その逆だってあるし。でもビジュアルうんぬんでいろいろ言う人って、結局それだけを見ていて音楽はどうなの?と言いたくなる。ビジュアルが音楽なら、音楽もビジュアルだと思うけど…。(兵庫・ごま・♀・22歳)

●変化するってことは至極当然のことなんじゃないんでしょうか? 変わらない方が変だ。簡単に言えば、私達が髪を切ることと同じことなんじゃない? 変わりたいと思っているかもしれないし、ただなんとなくかもしんないけど、彼らの考え・自由を尊重すべき!! (愛知・石松厚子・♀・20歳)

●本人の意思なら全然問題ないけど、ポピュラリティーを持たせたいというような、本人のオリジナリティーをなくすような変わり方は見ていてカッコ悪い。ファンである私が何より求めるのは音楽であり、トークであり、そしてビジュアルであり、その人の存在だ。生き様だ。それがカッコいいか、悪いかだけやから、カッコいいと思ってやるんならいいと思う。それを受け入れられるか否かは関係ないことやもん。 (大阪・ROCK100・♀・23歳)

●ビジュアルの変化っていうのは、つまり世界観やバンドのあり方が変わるってことでしょう? 周りがどう言おうと、ふっと「昔の方が良かったな」と後ろを振り返ってしまう瞬間があります。それでも、そのバンドの生み出すもの、表現するもの、その人達自身が大好きだから、結局ずっと見守ってしまうでしょうけど。 (千葉・キムラクミコ・♀・18歳)

●目立たないと売れないから目立って、目立ってくると必要ないからナチュラルになるバンドってたくさんいると思う。それは単なる手段だと思うので、別に気にならない。けど、ナチュラルになってファンが減るようなら、音楽性なんて無視されてんでしょうね。 (愛知・和壱・♀・16歳)

●ファンであるという聞き手その人が、好きなアーティストのルックスだけを追い求めているなら、ビジュアルの変化は大問題なのでしょう。音楽性を無視しているならば。でも、少なくとも私は「音」から好きになったがために、今までかなりビジュアルが変化してきた彼らに対して、それほどその変化に動揺はないし、その時々の音楽性でビジュアルも変化してきているのだと理解しています。 (埼玉・山口扇子・♀・34歳)

●彼らは"アーティスト"なので、「音が大切」とは言ってもやっぱりビジュアルも作品の一部だと思う。髪の色や服、顔もとても大切なものだと思う。そんなアーティストがビジュアルを変化させるということは、その音楽にも何かしらの変化があったということではないだろうか。それを感じとってこそファンだと思うし、音とビジュアルの変化を見た上で、ファンをやめるかついていくかは、その人の自由だと思う。 (石川・テノメノン坂井・♀・15歳)

●化粧をしなくなったりするのは曲だけですべてを表せるようになったってことだと思う。それまではそのアーティストが伝えたい自分の持っている世界を曲だけで表現し切れなくて、ビジュアル面で補っていたんだと思う。だからビジュアルの変化は自信の表れだと思うんだけど…。 (神奈川・ぽん・♀16歳)

●僕はB'zのファンであるとともにX JAPANのファンでもあるが、どうもその"ビジュアル"については疎い。昨年YOSHIKIは髪を切ったが、「変わっちゃったんだな」なんて思いはみじんもなく、「どんな風になったんだろう」という好奇心の方が強かった。まぁ、B'zもX JAPANも男性アーティストで、そのアーティストを男性が応援するという面で、女性とは違う心理状態なのかもしれないが。 (福井・毅・♂・16歳)

●似合ってればイイと思うよ。でもKISSは素顔を見せたのは絶対に失敗だね! カリスマだったのに。 (静岡・田中元啓・♂・32歳)

●音楽ジャンルかのごとくビジュアル系という言葉が確立されるほど、キレイなメイクをしたアーティストが多く存在しているわけだから、あのビジュアルに意味がないと考えるのはおかしい。音だけでなく視覚的にも訴えかけることで、より彼らの世界を伝えられる場合もあるだろうし。彼らのすべてを受け止めていた子から見ると、ビジュアルが地味になることがさみしいっていうのも分かる気がする。少なくともあそこまで気合いを入れてビジュアルを見せているのなら、変化することにも意味があるべきかな。 (長崎・岡本史生・♂・21歳)

●変化するのは当然のことだと思う。自分のスタンスに捕らわれ過ぎていて、その善しあしに関わらず「変われない」アーティストはアーティストではないと思います。変わってほしくない気持ちは多少あるが、完全な人間でない限り、自己の追求という意味でも変わっていくべき。 (京都・越野藍子・♀・17歳)

●●●このページは、最近の音楽業界の風潮を読者のみんながどう受け止めているかを反映する企画です。今回のテーマは、アーティストがビジュアルを変化させることについて。例えば最近、「ビジュアル系と呼ばれるアーティスト達のメイクやヘアスタイルが過激ではなくなってきたのはなぜか」とか「さみしい」という声が多く寄せられている。その一方で、やはりインディーズシーンでは、圧倒的にビジュアル系のバンドが目立っている。そんなビジュアルとその変化について、あなたの意見をお待ちしています。新たなテーマの投稿も、どんどん送ってください。

press mania

say too much!!

単なる音楽ファンである僕は極度の音楽雑誌中毒。最近は、毎月毎月手にする愛すべき様々な音楽雑誌(当然このJ-ROCK magazineも含む)の記事の数々や、雑誌にまつわる出来事を、単なる素人音楽好きの目で観察し、音楽メディアのあくなき挑戦に"全く勝手に"一喜一憂するのが妙に楽しい。さて、今月、僕の関心をひいた記事は…

●B誌でハル・フロム・アポロ'69のhalが中高生のリスナーに対して「カラオケで歌えるから良いや悪いの基準じゃなくて、純粋に音やキャラクター、ビジュアルなどを見てカッコイイと答えを出してほしい」と語っていた。Jロックのカテゴリーが広がり、いろんなサウンドがシーンにあふれている。しかし、それを聴くリスナーが「カラオケで歌う」ことを目的に聴きあさっていたのでは、いつまでたってもヒットチャートの顔ぶれは変わらないし、ざん新でカッコいいサウンドはマニアックな扱いを受けてしまうばかりだ。もっと自分の感性というものを大切にし、その場限りの使い捨てのヒットソングよりも、刺激を与えてくれるカッコいいサウンドやアーティストを見つけ出してもらいたい。

●N誌にあった自分の好きなソフトを紹介する特集。いろんな人が映画や音楽を挙げている中、斉藤和義は一番にゲームソフトの"ぷよぷよ"を紹介していた。毎日欠かさずプレイし、「負ける一歩手前で逆転すると、成せば成る、投げたらアカンって思う」と、けっして映画や音楽などに劣らないゲームの魅力について語っている。

こうした企画はよく雑誌に登場するが、彼のように自分の本当に好きなものを公表してくれると、知らなかった素顔や性格までが見えてきて結構面白い。また、今まで全く関心のなかったものやアーティスト自身にも興味がわいたりもする。本性を隠さず、音楽と共に自分自身でも勝負するアーティストがもっと増えてほしいものだ。

●ルナシーのSUGIZOが「音楽ジャンルとかジェネレーションギャップとか関係ない。日本人はすぐ隔たりを作るけど、俺はそれに気づいたら壊していってる」とS誌で語っていた。確かに彼がICEと対談したとかTRFと仲が良いと聞くと意外に思ってしまうが、お互いがアーティストであり、一人の人間であって、別におかしい話ではないのだ。

読者もよくビジュアル系とかジャニーズ系とか枠を作っては相手に敵意を燃やしているが、その枠の中のアーティストしか好きになってはいけないという決まりはないし、その枠自体が絶対でもない。SUGIZOが言うように、もし枠にはまったり、隔たりを気にしている自分に気づいたら、一度壊してみてはどうだろう。案外共感出来る部分や発見があって、自分自身も成長出来るはずだ。

●フィール・ソー・バッドのだりあが歌詞について「映像が目に浮かぶ歌詞を書きたい」「英語はいっさい使いたくないと思っている」と話していたR誌のインタビュー。ザ・ブルーハーツがシーンに出てきたころは分かりやすい日本語の歌詞が多かったが、最近はいったい何が言いたいのか全然伝わって来ない意味不明な歌詞が増えている。全編英詞でもそこにスピリッツがあれば十分に届いてくるのだが、抽象的な言葉を並べ自分の世界に陶酔しただけの自己満足な詞では何も伝わって来ない。

また、ギタリストの冬樹は数ページ後で、今でも教則本に載っているような初歩的な練習を続けていることに対して「ギターを弾いてお金をもらっている以上、正確なプレイを維持しなければいけない」と語っている。

リスナーはけっして安くない代金を支払って作品を手にするが、アーティストたるもの僕たち音楽ファンに対し少なくともまともな演奏力を示してもらいたい。それさえ出来ず、ただ自己満足に浸るだけのようなヤツラには、CDなんか発表する資格はないのだ。

末田 晃
Sueda Akira

LET'S GO TO ROCKIN' WORLD IN THE INTERNET WITH J-ROCK MAGAZINE!

ROCK IN THE INTERNET

「インターネットでは、音楽シーンやアーティストに自分の意見をぶつけることだってできるよ」(小西健司)
79年、ポップなテクノバンドとしてメジャーシーンに生を受けたP-モデルは、常に最先端をいく雄々しいエレクトロニクスサウンドで、日本のロックに刺激を与え続けてきた。ここ数年彼らはインターネットと"いい関係"を築きながら、音楽に情報発信にとさらに刺激的な展開を見せている。今回はそんなP-モデルのメンバーである小西健司氏に、バンドがインターネットとどう関わっているのか、そして読者にはインターネットで何ができるのか…という質問をぶつけ、いくつかのアイデアをもらった。やはりインターネットは楽しげだ。

CYBER J-ROCK magazine　http://www.j-rock.com

Rock Gate　http://www.nets.or.jp/RockGate

取材・西原 朗　撮影・豊島アビ

GUEST SITE
P-model
小西健司

●まずP-モデルの小西健司としてでなくインターネット師範の小西さんとして、Jロックマガジンの読者にインターネット推薦の弁をお願いできませんか(笑)。

小西(以下K)：まず、ちょっと興味があったらこのごろインターネット・カフェがたくさん出来てきたから、ああいうところに行ったりして、たくさんあるロック系のホームページを一度、自分で見てみるっていうのがいいんじゃないかなあ。いろんな情報も得られるし、同じアーティストを好きな、遠くの、それも海外の友達だってできるかもしれないから、きっと面白いと思う。

●インターネットっていうのは、コンピュータのネットワークで…。

K:っていうような説明をするよりも、そうだな…インターネットは、コンピュータのネットワークの中にある仮想の遊び場だと考えれば話は早い。そこに参加するにはみんながアドレスっていう住所みたいなものを持って、そこをめがけて手紙を出し合ったり、数え切れないほどあるホームページっていういろんな店をウインドウショッピングして回るって感じ。その店も、本当に何かを売ってる所もあれば、図書館があったり、美術館があったり、いろんなアーティストのファンが集まるパーティー会場があったり。パーティーくらいなら自分でも簡単に作れちゃうとかね(笑)。

●私設ファンのホームページですね。うちの読者は中高生が多いんですよ。そういう子たちがインターネットをやってみて、どういう楽しいことがあるだろうかとか、そういう話って何か出来ないですか。

K:(ジェイロックマガジン8月号「ROCK IN THE INTERNET」を見ながら)ここに載ってるアーティストたちは少なくとも自分でホームページを作ってる人だから、必ず電子メールのアドレスがどっかに載ってるはず。それでファンレターでも出したらいいんじゃないかな。その方が絶対にアーティストは読むから。

●絶対に?　それは普通にファンレターを郵便で送るよりも?

K:途中でなくなったり、どこかでだれかに選別されたりするっていう可能性は少ないと思うよ。だって自分が電子メールを使ってるんだから、それを一応全部開けてみないと自分が困ることになるから、絶対に読むよ。

●僕は常日ごろから思ってるんですけど、逆にね、今なら私設ファンクラブみたいに、自分の好きなアーティストのホームページを勝手に作って、それがいいものになれば、アーティストもきっと振り向かず

P-モデルのオフィシャルホームページアドレス…http://www.c2i.co.jp/col.me/P-model/

にはいられないし(笑)、注目すると思うんですけど。

K:それは、すごくいいと思うよ。

●「ああ、そこまでやってくれるのか」とか「どんなことを言ってるんだ」って気に絶対なるだろうし。ジェイロックマガジンでも、アーティストが一番関心を持ってるのってユーザーのナマの声なんですよね。だから、そういうのが見られるっていうんでアーティストも注目するんじゃないかと。

K:それが一つ、インターネットの良いところだろうね。オフィシャルじゃないホームページも今のところOKだし、それに歯止めがかけられないところがインターネットの良さでも悪さでもあるから。インターネットって、お金をたくさんかけようが、お金が全然なかろうが、作ったものは作ったもので、見る人にとってはホームページの1ページをすべて同じ価値として見られるのが平等でいいところじゃないかなと思う。その中の情報っていうのは作った人の意思以外ではどうしようもないものだからね。今言ったナマの声っていうのが、反映出来るから、そういうのがたくさん出てきたらいいのになってみんな思ってるんじゃないかな。

●P-モデルのファンだったら、ファンが独自にホームページを作ってそうな気がするんですけど。

K:結構、面白いのがいくつかあるよ。

●そうしてファンが頑張ってホームページを作ればアーティストに声を届けやすくなって、喝を入れることも出来るかもしれない(笑)。P-モデルは独自が運営するホームページを持ってるんですけど、ファンとどういう交流をしてるんですか。

K:俺のところは、ファンの子から電子メールが来ないの。多分怖いと思われてる…。

●怖い(笑)。あぁ、そのビジュアルがね…。

K:もともと電子メール送るっていうのは、結構勇気がいるから、なかなか出しづらいっていうのがあると思うね(笑)。俺らがまず考えたのはコロムビアにホームページをまず立ち上げるってこと。メンバーは全員ホームページ作ってるのに(所属)レコード会社にないっていうのは、おかしいから作ってもらった。それでそこでやったことっていうのは、去年の年末から今年の4月にかけて、ライブを何本かやったんだけど、その時の楽屋のショットとか、楽屋でこいつがこんなおかしいことしてたとかいうレポートとか。あと、ステージからお客さんを撮った写真とかを、その日の晩、もしくは次の日の昼までにメンバーが編集して、自分たちのホームページをコロムビアに掲載したり、それからいろんなメッセージをコロムビアのオフィシャルサイトから見にきた人に向けて発したりとか。あとはね、今作ってるシングルなんだけど、俺らうれしがりだから、ライブでホームページの「http://…」っていうアドレスをお客さんに合唱してもらって。それをサンプリングして、各地で10カ所ぐらいあったのを編集して、曲を作った。

●へぇー。なんか面白い(笑)。P-モデルのホームページって、アクセスする人がかなり多いって話を聞くんですけど。

K:多かったね。特にツアーやってる時は、信じられないような数。そんなにお客さん来てるわけないのに。何万ってアクセスがあるから。こんなだったら武道館でライブをやってもいいんじゃないかってね(笑)。

●(笑)。それは当然P-モデルのファンで、ライブ行った人がのぞきに来てるっていうのはあると思うんですが、それ以外っていうのは。

K:きっとそのライブに来られなかった人なんだろうね。調べてはいないんだけど。

●結構ファンからのメールが来たりとかするんですか?

K:かなりあるね。さっき言ったように俺にはあんまりないけど。俺は別にいらないよ(笑)。

●P-モデルとファンとの関係っていう意味で、インターネットがあることで、やっぱり違います? 普通は、CDをリリースして、それをファンの人が買って、ライブを観に来てっていう流れじゃないですか。それがホームページがあることで、また別の面が少し出て来てると思うんですけど。

K:例えばCDを作って、それでライブをする。そこにお客さんが来るっていう一つの流れと、インターネットの流れはまったく別のものだと思う。もちろん両方の相互作用っていうのは、あると思うけど。インターネットは例えばどういうことができるかと言ったら、今はまだ技術的に少し無理があるけども、ネットの中だけでしか流通してないような音源とか、これは実際にあるけども、ホームページに曲のMIDIデータ(シーケンサーの演奏データ)が置いてあって、だれでもそこから取って、それを自分で活用できる。あるいは、掲示板みたいなのがあって、ライブに対する反響とかが載せてあるとか、そういった感じだと思う。インターネットがあるから、ライブしない、CD出さないかっていったら、それはまた別の話だね。

●じゃあ、P-モデルにとって、ホームページを持ってる理由っていうのは。

K:まずは自分が使っていきたい道具であるっていうのが一つ。これは、俺らと同じようにみんなが使わなきゃならないかっていうと、そんなこと全然ないし、使わなくってもいいと思う。ホームページっていうのは、新しい道具を使った情報の発信の方法だから。ホームページを作るっていうのは、ライブやCDでつながりができなかった、例えばニューヨークに住んでる人に向けての、ライブ、CD以外の形でコンタクトの取れる道具であるとか、方法であるとか、そういうような感じだろうなぁ。そして俺らみんなホームページを自分で作ってるから、やってることがモロに見えて、そういうことも一つの表現として見せていけるっていうようなこと。「小西は絵がヘタだ」とか(笑)。「きったないホームページやなー」とかね(笑)。

●小西さんとインターネットとの最初の出会いはどんなだったんですか。

K:インターネットって、今はホームページを作ったり、映像が見れるとか音が出るとかっていうのがすごく話題になってるんだけど、俺が出会ったころはほとんど文字だけで、まだ実験段階だった。で、俺のきっかけは本当にすごくミーハーでバカな話なんだけどね(笑)。アメリカの雑誌を定期購読したくて。アメリカの雑誌って、定期購読申込用のハガキがついてるから、それにカードナンバー書いて送ればいいんだけど、電子メールのアドレスがあって(笑)。それを目にして衝動的にどうしても電子メールで申し込みたくなって。

●どうしても(笑)。

K:その時も、俺も普通のパソコン通信って言われるようなものをやってはいたんだけど、それはいかんせん、外国につながっていなかったんで。海外につながるネットワークの中で、本を予約購読しようかと思ったのが一番初め。ほとんどそのためにインターネットに入ったっていうような。

●へぇー(笑)。で、実際その時、雑誌の申し込みは出来たわけですね?

K:出来た(笑)。そうそうTシャツまで買ったし(笑)。

●(笑)その後どんどん深みにはまったのは、その時の快感があったから?

K:そう。そのあと、遊びでアメリカに行ってて、その時に名刺に自分の電子メールアドレスをうれしがって書いて配ったりしてたら、後で返事が来て。それ以来、今でも電子メールを交換してる人とかいるけどね。

●P-モデルのメンバーの中にはインターネットじゃないけど、パソコン通信上で出会った人間も一人いるって聞いてるんですけど。これって結構先を行ってる(笑)。

K:それはね、チャットっていう通信の中の井戸端会議みたいな所で出会った。電話で話してるようなことを文字で話してるようなところでね。

●彼もそこに参加してた。

K:俺はめったにしないんだけど、たまたま入っていった時に、向こうもたまたま参加してた。

●その井戸端会議はどういうテーマで話されてたんですか。

K:全然ろくでもない世間話。

●でも、文字だけで出会って一緒にバンド、それもメジャーのバンドをやることになるもんでしょうか。そんなに気が合った?

K:お互いチャットっていうものに出てくる連中とか、その話題とかを嫌っててね。二人だけが全体の話題に対して、チャチャを入れるとか。不まじめなことをしてた(笑)。

●それで気が合ってお互いメールをやりとりするようになった?

K:うん、それもあったし。会いにも行ったよ。

●バンドは音楽を作る上で、具体的に、インターネットをどんなふうに活用してるのかっていう点にす

ごく興味があるんですが。

K:例えば曲を作ったり、連絡したりとかに、インターネットを使った電子メールを活用していろいろ作業したり、話し合いをしたり。

●メールって手紙なわけじゃないですか。それなら電話の方がいいんじゃないかって思いますけど(笑)。

K:まず一つは、電話だったら相手が今何をしてるのかが分からないのに、かけてしまうっていうのがあるけど、電子メールはここ数時間のうちに読むであろうという予想がつくから。だから相手が、今曲作って忙しそうだと思ったら、一応出しておいてとかね。それなら、ファックスでもいいじゃないかって思うだろうけども、ファックスは紙が残るけど、電子メールの場合は、電子のデータが残るだけだから、かさばらずに、後で「あいつはこの日こんなこと言ってたのに」というように振り返れる(笑)。そして電子メールにくっつけて、映像とか音をサンプリング(デジタル録音)したものとかシーケンサーの演奏データ(MIDIデータ)とか送れるんですよ。今俺はまさに、次に出すCDのジャケットのラフデザインを、デザイナーから電子メールで受け取って、それを見て、「ここの字が小さい」とか「こういうコンセプトじゃなかった」とか、そういうような会議をしてる。郵送で送らなくても、自分のコンピュータでそれを見ながら話ができる。これは便利なところだよね。

●曲を作ってる中での、メールの生かし方っていうのはどういう感じなんですか。

K:技術的にはさっきの映像と同じように、MIDIデータとか、短いサンプリングデータとか、そういったものも同じように電子メールにくっつけて送って、それでやりとりしながら。あるいは曲の構成について、普通の文字でやりとりしながら、歌詞を書くとか。

●「オレが作ったこういう音はどうだ」みたいな手紙に、その音を張り付けて送って、向こうが瞬時に受け取って、それを読みながら、音を聴けるんですね。

K:できるよ。

●そのうち小西さんが大阪にいて、東京のレコーディングスタジオに行かなくてもレコーディングに参加できるようなことになるんでしょうね。

K:可能だろうね。でも、俺らがいつもみんなで話してるのは、直接その場所に行った方が早いのに、わざわざ通信するような必要があるかどうかっていうこと。俺らが雑誌で話してることを聞いて、P-モデルがネットワークに対して非常にこだわっているとか、全然使ってないやつは「アホや」って言ってるみたいな感じにとらえられる時があるんだけど、実は全くそんなことなくって、ネットワークで使えるところは使うし、人間が行った方がいい時は行けばいいと思ってる。ネットワークがつながってない人はバカなのかって、全然そんなことないよ。だって、インターネットですって言っても、ほんとに自分の周りで何人の人がやってるのか、よく分からないしね。まだまだそんなに広まって、みんなが使ってるってもんじゃないと思うし。

●日本のロックの中で、インターネットっていうとP-モデルの名前が結構出てくるんでね。そういうことに関しては、いまいち不本意なところもあるわけですか？

K:あえて言ってもらうのはいいと思うけど。「それだけだ」っていうことになる。逆に、じゃあ何で俺がそんなこと言うまで、だれもやらなかったかっていう疑問もあるし。

●さっき遠隔地って話が出たんですけど、遠隔地で音楽を作るっていうんですか、そういうのは、例えば顔つき合わせて「はい、一緒に作りましょう」っていうのと、感覚として全然違うものですか。

K:うん。これは面白いことなんだけど、例えばライブのために東京でリハーサルするとするよね。大阪と東京の間で、リハーサル前にいろんな打ち合わせをしてるけど、行くまで絶対決まらないことって時々ある。ものによっては、行って顔つき合わせて30分で決まることが、電子メール会議で4日とか5日かけてやってても、全然決まらないとか。そういう種類分けはやっぱりうまくしていかないとだめだなって。

●なんでもメールの方がいいってわけでもないと。

K:極めて論理立ててこうこういくような、その結果がすごく明白になるようなものはメールでもいいかもしれないけど、いろんな見方があって、どれも正しいんだけど、力ずくみたいな感じで、パッと決めてそれが良かったりするようなことは、顔をつき合わせた方がいいのかなって気がしてる。

●インターネットは小西さん自身の音楽に何か影響を与えていますか。

K:いや、俺はホームページを見て回ること自体は、あんまり肥やしになるとは思ってなくて。最終的には電子メールとか、そういう一対一のつながりになった時に、初めて「あぁ、こんな人がいるんだ」っていうような感じの肥やしになり得ると思う。他の雑誌でも話したことがあるんだけど、結局、自分でホームページを作って発信しないで、他人のホームページだけを見て歩くっていうのは、ウィンドウショッピングにしか過ぎないような感じがずっとしてたね。必ずホームページの下には、担当者あてのメールアドレスがあるんだけど、さっきも言ったようにそこをクリックして、自分の意見とかを書いて発信しようと思ったら、大変な勇気がいるんだけど、そこを越えて何かつながりができてくるまでは、あんまり感動はないね。

●何も考えずに雑誌をパラパラめくってるような感覚と似てるんでしょうか。

K:そうそう。雑誌に投稿するところまでいくとか、自分の書いたものが載るとかいうのと、ページをめくってるだけって全然違うでしょ。

●今後はどうなんですか。インターネットっていうコンセプトを使って、何かアイデアとか持ってると思うんですが。

K:今興味があるのが、インターネットのリアルタイム性っていうのを出したようなライブ。例えば、そのコンサートはブックタイプのコンピュータと、PHSは持ち込みOKという風にしておいて。で、客はコンサート中に、コンサートの感想をそれを使ってホームページにリアルタイムで送って、俺らも実は演奏しながらそれを見てると。返事が返ってきたり、これはまずないと思うけど、曲のリクエストを受けるとか。ライブのレポートが声でコンピュータに録音されて、ネットワークに流れていくとか。そういうのもあれば面白いなぁと思う。それからさっきの遠隔って話が出たけど、俺が大阪の自宅にいて、東京でコンサートが進んでるっていうのも、いいかなぁと思ったりするけど(笑)。

●でも、それ考えると、コンサートの会場もいらなくなる(笑)。

K:(笑)かも知れない。それが通常のコンサートに勝つとは思わないし、とって変われるとも思わないけど、そういう実験もしたいなぁ。

●例えば会場に来てるお客さんが「ちょっとドラムの音が大きいですけど」みたいなことを書き込めば、それを見てミキサーがドラムの音を下げたりとか(笑)。マイクスタンドの影になって顔が見えませんよとか。

K:(笑)面白いね。

●それぐらいですか、今後のプランは。

K:後は今までに結構長く使ってきてるから、その中で本当に便利だなと思うところは、コンピュータでコミュニケイトをするし、曲作りの中でもそういうのを使うし。便利じゃないところは使わない。よくあるでしょ、コンピュータでわざわざやって遅いとか、線を一本引くのでもコンピュータの電源を入れなきゃならないから遅いとか、電話番号を探すのにコンピュータの中からわざわざ探すとか、そういうのはうっとおしい(笑)。

●それはメモをしておけばいいですからね。

K:そういうこと。

P-モデル情報

<リリース>

8/1 平沢進 ソロアルバム『SIREN -セイレーン- 』
シングル『サイレン』

10/5 不幸のプロジェクト are 平沢進・小西健司
アルバム『不幸はいかが?』

<ライブ>

『平沢進 INTERACTIVE LIVE SHOW Vol.5』
9/2 大阪メルパルクホール
9/4.5 東京メルパルクホール

『P-モデル』
10/5 東京・日比谷野外音楽堂

初のビジュアル散文集

「トゥー・ハーフ」

大黒摩季著

好評発売中

「あなたを愛しはじめて前よりも独りぼっち」

定価1600円（税込）

◎四六判サイズ ◎上製本 ◎144頁オールカラー/ISBN4-916019-00-8 C0095 P1600E

抜群のボーカルセンスと、女性の気持ちを素直に表現する作品でミリオンヒットを飛ばし続ける人気アーティスト大黒摩季初のビジュアル散文集。楽曲以外で自分を表現しなかった彼女が初めて、自らの視点で撮った写真と、そっと包んでいた想いを綴る一冊。

(株)ジェイロックマガジン社

〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8MACビル8F TEL 06-214-1751 FAX 06-214-1731

TRIBUNE単行本化

「ジェイロック・バイブル」

好評発売中

アーティストも注目!
「こういうのは参考になりますよ。面白い!」　黒夢

定価1300円（税込）

◎A5判サイズ◎モノクロ ◎208頁 / ISDN4-916019-01-6 C0073 P1300E

ジェイロックマガジンの人気コーナーTRIBUNEの単行本化。95年度('95/4～'96/3)のJロックトピックスを振り返りながら、掲載されなかった多くの過激発言を含め、フリーク達の熱い声をテーマ別に再構成。音楽ユーザーの目から見た今の邦楽シーンを示す、まったく新しい音楽本です。業界就業者の方も、きっと刺激されるはず…。

●お近くの書店にない場合は、郵便局備え付けのブルーの振込用紙に、ご希望の書名および住所・氏名・電話番号を記入の上、定価+送料(1冊につき310円)を右記口座までお振り込み下さい。 口座番号:00980-1-51829 加入者名:(株)ジェイロックマガジン社

BLUES for THE Roots IS HERE!!

大阪発のREAL MUSIC LABEL BLUE-Z RECORDSは、NEO BLUES ARTISTを強力にサポートしています。

1.Come On In My Kitchen/ TAKASHI"HOTOKE"NAGAI
2.Shame Shame Shame/ YUKA MORITA
3.Train Kept A Rollin'/A.M.G. (Akashi Masao Group)
4.Dust My Broom/ TAKESHI HAYAMA
5.Try To Make A Living/ STORMY
6.Ruby Tuesday/ TOSHIKI HARUNA
7.Love Me/MAKI OHGURO

SUNDAY BLUES LIVEから飛び出したJ-BLUESシリーズ第２弾!!
さらなるROOTSを求めて・・・

―J-BLUES BATTLE Vol.2―

参加アーティスト
永井"ホトケ"隆 / 森田ゆか / A.M.G. / 葉山たけし / STORMY / 春名俊希 / 大黒摩季

伝説のWESTROAD BLUES BANDのヴォーカリスト永井"ホトケ"隆をはじめ大黒摩季
アレンジャーとして活躍中の葉山たけし、明石昌夫率いるA.M.G.などそうそうたるメンバーに若手Blues Artist 達がどう挑むか！好評J-BLUES シリーズ第２弾！

BLCZ-0302 ¥2,000

大阪に突然現われたインディーズレーベル BLUE-Z RECORDS。心斎橋のクラブGRAND Cafeを中心に活動するSUNDAY BLUES LIVE が発端となってROCK音楽Rootsやアメ村RockStreet などで紹介され、そのポリシーに共感を得たARTIST やファンにより異常な程の盛り上がりを見せている。日曜日の夕方に行われているにもかかわらず関東や九州からもこのLIVEに足を運ぶ人が増え、またその中で新しいARTIST も生まれはじめている。この飽和状態にある音楽シーンの中、Rootsを振り返ることにより新しい音楽の形を追求している。

J-BLUES BATTLE Vol.1
Various

THE BLUES IS ROOTS OF ROCK

1.Rock Me Baby/ FUSANOSUKE KONDOU
2.Stagger Lee/STORMY
3.Same Old Blues/ TOSHIKI HARUNA
4.Red House/FEEL SO BAD
5.Palace Of The King/ KYOJI CHIBA&DAN ATSUSHI
6.Tramp/KOHSHI INABA

1996.1.20 リリース BLCZ-0301 ¥1800

大阪、心斎橋のクラブGRAND Cafeで行われているSUNDAY BLUES LIVE から生まれたArtist と大物Artist とのコンビネーションミニアルバム。すべてのROCKはBLUESへとつながる"

A.M.G.（Akashi Masao Group）
A.M.G.（Akashi Masao Group）

怒涛のGROOVEを放出するA.M.G.待望の1st ソロアルバム

1.Ain't Nobody To Love
2.Seven Fourth
3.The Thrill Is Gone
4.I Put A Spell On You
5.Purple Haze
6.I Heard Through The Grapevine

1996.5.18 リリース BLCZ-0401 ¥1800

アレンジャーとして、またB'zのツアーメンバーでもある明石昌夫がついに自身のバンドを率いて始動開始。その名もA.M.G. 強力なツインドラムに絡む明石昌夫のベース、千葉恭司のVo、鮮烈する団篤史のGIBSON 335、ファンじゃなくても一聴の価値あり！！

GELPIN
chapchimes

大阪のアンダーグラウンドシーンで活躍する chapchimes のミニアルバム

1.カゴの怪人
2.泥のピアノ
3.奇跡の日
4.シャモ（Inst）
5.殺しのライセンス

1995.10.4 リリース BLCZ-0201 ¥1460

大阪のアングラシーンで活動を続けるchapchimes。かなり実験的な音楽ではあるもののその中に光るポップセンスに時代は追い付くことが出来るのか？ なんでもありのこのアルバム、chapchimes の世界へようこそ！！

NEO BLUES BATTLE Vol.1
T-Shirts

BRANDNEW BLUES WORLD ..IS HERE!!

1996.1.27 ON SALE!! T-1 ¥2000

SUNDAY BLUES LIVE が大阪厚生年金会館へ飛び出した!!
1996.1.27に行われたNEO BLUES ARTIST達のイベントを記念してつくられたツアーTシャツ。9／7のNEO BLUES BATTLEVOL.2に着ていくと一層盛り上がること間違いなし!!

BLUES FEELIN'
春名俊希

BLUE-Z RECORDSの記念すべきデビューアルバム。春名のセンスが光る!

1.Walking By Myself
2.Same Old Blues
3.To Be With You
4.Standin'Round Crying
5.Still Got The Blues

All Songs Arranged by TAKESHI HAYAMA

1995.10.1 リリース BLCZ-0101 ¥1200

SUNDAY BLUES LIVE のレギュラーとして活躍中の春名俊希がデビュー前にレコーディングしたアルバム。1995年10月よりROCK音楽RootsでEnding Themeとして流れていた"Same Old Blues"を含む全５曲入ミニアルバム。新しいBLUES の形がここに...

お近くのお店にこれらの商品が無い場合、通信販売も行っておりますので御利用ください。

通信販売の方法

1.口座番号（右詰め）009109-9-5015

2.加入者名欄に（株）ブルージーと記入する。

3.購入したい商品の金額に送料をたした金額を記入する。
例1）北海道、沖縄にお住まいの方[送料¥1000]
J-BLUES BATTLE Vol.2 (¥2000)を購入される場合：¥3000-

例2）青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島にお住まいの方[送料¥750]
A.M.G.(¥1800) とJ-B.B Vol.2(¥2000) を購入される場合
¥1800+¥2000+750 ・・・¥4550-
例3）その他の地域にお住まいの方[送料¥500]

＊複数の商品でも送料は同じです。
4.郵便振替用紙の通信欄にご希望の商品名、枚数を明記する。

5.払込人住所氏名欄に住所、氏名、電話番号を明記する。

6.窓口に提出して払い込む。（お急ぎの方は控用紙を06-211-6055 までFAXして下さい。）

SUNDAY BLUES LIVE SCHEDULE / 7.28 WAXX 8.4 春名俊希 8.11 STORMY
9.7NEO BLUES BATTLE VOL.2 at新大阪メルパルクホール（出演）A.M.G. / 春名俊希/ STORMY ...and MORE GUESTS!! チケット・ぴあ／チケット・セゾン両プレイガイドにて大好評発売中!!

商品・LIVE等に関するお問い合わせは：**BLUE-Z INC.**
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-18-18トポロ51ビル4F TEL 06-212-0660 FAX 06-211-6055

8/1
【THU】

なんばCITY南館2Fに

NANBA BLACK POWER UP OPEN!!

BLACK ABENO
7/28 CLOSE

合体

NANBA DEAD ZONE
7/24 CLOSE

メンバーズスタンプ2倍
+
プレミアアルミステッカー
プレゼント!!
(8/31まで)

2F NANBA-CITY MINAMIKAN
5-1-65 NANBA CHUOH-KU,OSAKA
TEL.06-644-2911

J-ROCK TRIBUNE September Vol. 16

J-ROCK TRIBUNE

illustration : Mori Mitsuo

voice
なぜいけないのだろうか…

私はどうしても伝えたいことがあって書いています。私はGLAYの大ファンです。GLAYの音楽も人柄も大好きだし、これからも応援したいと思っています。でもGLAYと同時にジャニーズも好きなんです。だから「TRIBUNE」などを読んだ瞬間、とても複雑な気持ちにさせられました。

「ジャニーズの曲がヒットチャートに入っているの許せません」という意見を読みました。私はなんで分かってもらえないんだろうと思い続けています。ヒットチャートがどうのこうのと思わず、好きな音楽を聴き続けていればいいのではと思います。ジャニーズのファンの子だってジャンルが違うだけで、ロックの好きな子と何も変わらないと思います。「夢中になってるものがある」というのは良いことじゃないですか。何も感じないで毎日を過ごしているよりは良いじゃないですか。ジャンルが違うだけでそれなりに頑張っているんですよ。軽べつしないでほしい。「TRIBUNE」ではロックについていろんな意見がありますが、ジャニーズは別にロックとは関係ない。アイドルだという事を何よりも本人達は分かっているんです。世界中には様々な人間がいて、音楽も言葉もバラバラ。それと同時に好みも。その人が好きなものならいいじゃないですか。そんなにチャートに入ってたらイヤですか？「好き」という理由はいちいちなくてもいいんです。自分自身が一番分かっているからです。ロックもジャニーズも好きな私はおかしいでしょうか。私と同じ意見の方はきっといると思います。みなさんの意見も聞かせて下さい。

（沖縄・MARYA・♀・19歳）

voice
怒りがおさまらないこと

今日はどうしても怒りが治まらない事があり、ペンを取りました。その事件は、5月26日神奈川県民ホールでのTHE YELLOW MONKEYのライブで起こったんです。楽しみにしていたイエモンのライブを台無しにしたバカヤローがいたんです。ああいう馬鹿者どもが増えているのは、悲しいですけど事実ですね。

その日いたバカヤローは吉井氏のMC中ずうーっとくだらないことを叫び続けていたわけです。確かに吉井氏はファンの子達に対して一人ひとりに話しかけてくれてるかのようにMCをしてくれてましたけど、バカヤローはいちいちそれに答えるんですよ。吉井氏「僕達は買い物が好きで、この間ロンドンに行った時もいろいろと買ってきたんだけどね。EMMAは皮のコートを買いました!!」。バカヤロー「イェーイ!! どんなの買ったのォ？　見せてェ!」。無視して吉井氏「70万のコートをポーンと!しかもローンで（笑）」。バカヤロー「イェーイ!! 何回払い？ ねえ、何回？」などと、よくもそこまで…。

最初は仕方ないかなと思っていました。ところがMCごとに彼女は答え続けるんですよ。それも会場中に響き渡るドラ声で。いよいよ周囲の人もケムたがり始めて、ザワザワしてきてもバカヤローはおかまいなし。汚いヤロー言葉で叫び続け、吉井氏のMCに答え続け、邪魔し続けた結果、悲劇は起きたんです。何と吉井氏本人の口から「静かにしてください」という言葉がヤツに発せられたんです（このとき会場から拍手が起きました）。こんな悲しいことがあってもいいのかなあ…。吉井氏もかなり怒りを抑えていたように思いますけど、いよいよ口にしてしまったようです。相当勇気のいることだったと思いますよ。あんなバカヤローでも一応自分達を応援してくれるファンに、声援を「やめろ」と言うんですから。たったそのひと言でライブ全体の流れを変えてしまうことかもしれないし…。

それよりすごいのがバカヤローで、ヤツは愛するミュージシャンにあんな風に言われたことを気にも止めず、もしくは日本語が理解できないのか、その後もずぅーっと叫び、答え続けたんですよ。もう狂ってるとしか思えない…。しかも、私の怒りを爆発させたひと言がコレです!　「吉井ィ～ッ!! チケット代高いんだよ～ッ、もっと安くしろよ～ッ!!」バカヤローは汚いドラ声でこう言ったんですよ…今でも耳から離れません!!!!

私はこの言葉が口から出るバカヤローの所に走っていって引きずってでも会場からたたき出してやりたかった!　悔しくて思わず泣いちゃいましたよ、恥ずかしいですけど。ちなみに私はやっとの思いでチケットを取って、立ち見で一階の一番後ろで見たんですけど、4500円が高いと思わなかった。（中略）すごくいいライブだったんです。ずっと昔、横浜の7thアベニューやクラブ24で観た時と同じくらいドキドキする感じるライブだったのにィ～!! アイツさえいなかったら、悔し～ッ!! この内容で4500円のライブが高いと思うなら、来るな!　二度と来るな!　まともに音楽聴けないヤツがのさばったがために、泣く泣く会場に入れなかった人がいたかと思うと腹立たしい!　ああ、こういうヤツを閉め出すのは無理なんでしょうけど、どうにかならないんですかね…。ホント困りますよね。すごく胸にモヤモヤが残ったライブでしたよ。

［神奈川・大滝ようこ・♀・26歳］

WHAT'S IN OUR EDITOR'S ROOM HAPPEN!!

●レコード会社に斉藤和義の取材依頼の電話をすると、7月号のライブレポート中の“アメリカンプロレスラーの悪徳マネジャー風のインパクト”という記事のせいで、彼のマネジャーT氏が「悪徳マネジャー」呼ばわりされていることが発覚。見た目の印象を素直に書いたまでなのだが、ストレートすぎたのか、だれが見てもそうだったのか…。どちらにしても会うのが怖いと思っているうちに、新たな取材が…。「今後は登場させないでください」というお願い攻撃にあったが、完成した本文には彼の風ぼうがまたしても…。彼は斉藤和義を語るに欠かせない人物なのである。

●アンケートハガキの“良くなかった記事はどれですか”の項目に「アーティストニュースの85番」と書いてあり、その理由として「何かしょげてる…」と書いてあった。「だれだったっけ?」と思わず本誌を見直してみると、そこには確かにしょげてるように見えるザ・マッド・カプセル・マーケッツのKYONOが…。残念ながら(?)今月号からはメンバー四人のパワフルなショットに変わってしまったが、そんな小さい写真にも反応してくれる読者にスタッフは大感謝!

●大黒摩季のレコーディング現場を深夜に訪問。マネジャーが案内してくれたコントロールルームに入ると、ソファに座っていた人が立ち上がってあいさつしてくれたが、帽子をかぶっていてあまり顔が見えず、雰囲気がいつもと少し違っていて一瞬本人だとは分からなかった。しかし、レコーディングが始まりあれこれ意見が飛び交うと、その声で彼女だと再確認。レコーディングの緊張感からか、一瞬別人に見えた彼女の真剣さが伝わってきて、こっちまでちょっと緊張してしまった。

●起き抜けで撮影の時もサングラスを取ろうとしなかったアインス・フィアのHirofumi。しかし「アンケートにもサングラス取ってほしいっていうのがいっぱい来てたんですよ」「ヒロフミさんの目がスキなんですよね」とお願いして、ようやくあの笑顔を撮影することが出来た。こっちの方が絶対にいい。だってHirofumiは、こういう雰囲気の人だから。

●シャーベットのインタビュー終了後、完成目前のシャーベットのアルバムのジャケットを浅井健一が持ってきてくれた。ジャケットももちろんだったけど、シャーベットの音を感じさせる歌詞カードの裏のきれいな色使いの自筆の絵がいい。彼も「これはブランキー・ジェット・シティの一つのストリート。海もあるから泳げるんだよ」とうれしそうに語っていた。歌詞も自筆らしく「字、汚いでしょ」と言われ、思わずうなずいてしまったが、でも何かいい味が出てます!!

voice
札幌はダメ?

自分の好きなロックバンドがコンサートで札幌に来た。めっちゃうれしかった。すっげ〜興奮した。すっげ〜燃えた。ちょっと空席が目立ったけど、「そんな事は気にしない」と言ってくれた。「札幌が一番初めて良かった」「また今年の冬に来たい」そんなうれしいことを言ってくれた五日後、次のコンサート先からのラジオ番組でのこと。「ここは良かったですね。この前、札幌に行って来たんですけどダメですね。札幌は客も入らなかったし、お客もつまらなくなると静かになる。チケットの売り上げも最低だったんですよ。もう行かないですね、札幌は」。ショックでした。一気に冷めた気がした。冗談でも笑えなかった。多分、ラジオを聞いた札幌のファンはこれがだれのことか分かると思うけど、がく然とした。私はこのロックバンドのファンクラブに入っていないため、前の晩から並んでチケットを買いました。その他にも毛布持参で徹夜で並んでいた男の子や女の子、始発で朝早く来たお姉さん、片道2時間かけてコンサートに来た女の子…。自分の好きなバンドを見に行きたいからこそ、そうやって頑張っているファンだって札幌にもいるんだ。それを「札幌はダメだ」とは一体どういうことだ?

たとえ本音がそれでも、自分のメンバー内で文句を言えばいいんだし、何もラジオで言うことないと思う。こっちだって一生懸命手を挙げて、大きな声で一緒に歌を歌っていた。ステージ側から見たら全然のってないように見えたから、そんなことを言ったのかもしれない。でも私から見たらみんなうれしそうに歌を歌って、目を輝かせて本当に楽しそうだった。そんな札幌のファンをバカにするな! 札幌のファンぐらいいなくても、全然平気、全然大丈夫、東京の方のファンだけで十分だと思うなら、本当に来年からコンサートに来なくてもいいと思う。札幌のちょっとしかいないファン相手にコンサートするのがバカらしい、お金がもったいないと思うなら、もう来なきゃいい。

でも会場を自分のファンで満杯にするのは、そのバンドの努力しだい。そんなバンドを応援するのがファンの子達。フィフティー・フィフティーだと思う。でも、このバンドのラジオの発言では、一方的に札幌のファンが悪いように言ってた。すっげ〜悲しかった。「ファンの子達は大事ですからね」とよく雑誌で言ってたけど、「おいおい、本当かよ?」って思うようになってきた。みなさんはどう思いますか? 冗談でも傷つきますよね。笑えませんよね。すっごいハンパじゃなくショックだった。

[北海道・札幌なめんなよ・♀・21歳]

voice
本当のファン

「本当のファン」って何なんだろう。最近よく思います。私はB'zの大ファンです。彼らなしでは生きていけないくらい大好きです。だけど私は、一人のアーティストだけに偏ってしまうのは嫌なので、できるだけたくさんの音楽を聴くようにしています。実際にものすごくいい音楽や、涙が出る程感動する音楽に出会えることもよくあります。もちろん、そういうすてきな音楽を私達に届けてくれるアーティスト達がすごく好きです。でもどんないい音楽を聴いていても、やっぱり一番大好きなのはB'zの音楽なのです。自分でも不思議なくらいB'zを深く愛しているのです。だから、正直言ってB'zの音楽が本当にいい音楽なのかどうか分からなくなる時があるんです。うまく言えないけど、恋は盲目とかなんとかいうように、本当に好きで好きで愛し過ぎていて欠点さえも長所に見えて来るというか・・・。実際のところB'zの音楽はきっといい音楽、というか、たくさんの人がいいと思える音楽なんだと思います。歌もうまいし、演奏もうまいし、独自の世界を持っているし。だけどB'zにだって欠点はあると思います。TVとかで歌っているところを見ていると、ほんの少しだけ音程がズレている所があることもあります、時々。それがB'z以外のアーティストなら、「プロなんだからちゃんと歌え」とか、かなりへたな人に関しては、「素人以下だ」とか簡単にけなしてしまいます。でもB'zなら、「かえってメリハリが効いてていイイ」と失敗さえ魅力に感じてしまうのです。そこで私は思うのです。「本当のファン」って何なんだろう。どんなに歌がヘタで曲もありきたりでも、そのアーティストの中に彼らだけのいいところを見つけ出して愛し支えていくのが本当のファンなのか、どんなに大好きなアーティストでも、プロとして恥ずかしい行為があれば厳しく批判していくのが本当のファンなのか、私には分かりません。前者のようなファンばかりなら、日本の音楽レベルの低さは変わらないだろうし、後者のようなファンばかりでも、完ぺきさを求め過ぎて面白味に欠ける音楽が世の中にあふれるかもしれません。もしかしたら「本当のファン」なんてものはないのかも。好きなものは好きなんだからあんまり深く考えない方がいいんでしょうか。とりあえず今の私に言えること。それは、やっぱり何をどう考えても、私はB'zを一番愛しているということです。

(三重・ぐりこ・♀・15歳)

でも、私には分かる、彼の良さ。TVで初めて見た「うしろむきでOK!」はすごいインパクトでしたから。でもライブ行きた〜い! だれかファンの人いませんか?
(埼玉・うしろむき・♀・15歳)

■最近行った某ライブハウスはお客さんのマナーが非常に悪くて驚きました。最近ライブに来るお客さんの低年齢化が目立っていて(特に雑誌で急に騒がれ出したバンド、顔のキレイなバンド)、その若いお客さんのマナーが特に悪いのです。倒れてしまう人や悲鳴を上げる人がいても、おかまいなしにどんどん押していきます。もう少し常識を学んでほしいと思います。
(岐阜・VOICE・♀・19歳)

■私は今年21歳になるBUCK-TICKファンです。8年間くらいファンです。「13、14歳でB-Tが分かるのか」という声がありますが、今井さんの言ってるように、分かる分からないということよりも、その音楽が自分の感覚に合ってるか合ってないかだと思うし、B-Tのことをいいなと思ってる人が若い人にもたくさんいるのはいいことだと思います。「自己満足に付き合わされている」という意見もありますが、ついていけない人はそれはそれで仕方ないと思います。私は今井さんの才能にホレ込んでいるからどんな曲調になってもファンなんです。そういう人もたくさんいると思います。そこがB-Tのすごいところなんだと思います。
(山梨・サクラ・♀・20歳)

■最近音楽雑誌がつまらない。いつも同じバンドばっかり載ってて。そりゃ、人気のあるバンドが表紙になってる方がその雑誌も売れるんだろうけど…。もっと意外性のある雑誌があってもいいのになあ。
(奈良・都・♀・21歳)

■ダメもとと思っていたGLAYのチケットが取れてしまいました…人生初のライブ! いまだに信じられないんですが、不安もあるんですが、でも行きたい!と思っていたので(笑)。あぁっ、でもどうしよう。
(北海道・松本ほたる・♀・23歳)

■昔のLUNA SEAもいいけど、今の髪を切ったRYUICHIのいるLUNA SEAもいい。オレは男ながら、RYUICHIにあこがれているぞ。
(愛知・坂井田久雄・♂・14歳)

■私は大黒摩季さんが好きです。摩季さんの歌・声・詞・曲が好きで前向きな生き方が好きです。そして何より摩季さんの音楽に対するエネルギーが、私をいつも元気づけてくれるので大好きです。
(千葉・Magy・♀・17歳)

■本当にいい曲は生で聴かないと分からないと思う。私がB'zのアルバム『LOOSE』を初めて聴いた時、一番感動したのは「消えない虹」だった。ライブに行くまでは「消えない虹」を聴いたら泣けるだろうなと思って出かけた。ところがライブで聴いて一番感動した曲は「キレイな愛じゃなくても」だった。稲葉さんの切ない声と歌、詞に私は泣いた。翌日、右腕とブーツが原因の足の筋肉痛で大変だったけど、絶対に次のライブにも行ってまた感動したい。本当にいい曲を見つけたい。早く新曲も聴きたい!! 次のツアーはいつになるんだろう…?
(福島・恋心・♀・16歳)

■何か知らない間に結構BUCK-TICKが批判を受けていることを知り、ビックリしたやら腹立たしいやら。ライブに行っても突き放された感じがするっていうのは、MCの内容の変化や前回のツアーはライブが1時間半弱で終わってしまったことからなのかもしれないけど、あっちゃんは「愛してるよ、みんな。みんなもそうだろう?」って言ってくれたことだってあったし。あの音楽性の高さ、表現力はどのバンドにも負けないと思う。やっぱりB-Tは魅力的なバンドだと思うし、ファンでいられることも幸せに私は思う。
(神奈川・薄川友香・♀・21歳)

■私はB'zが好きです。友達はTHE YELLOW MONKEYが好きです。私はイエモンのを借りたこともあるし、友達は「分からない曲があるかも…」と言いつつB'zのライブに来てくれます。私達は互いに「B'zは日本一」「イエモンほどイカシてるバンドってないよ」と言い合ってるけど、ケンカにはなりません。「大好きなアーティストがいるっていいもんだねえ」と、二人でほのぼのしてます。たとえ自分と違うアーティストを友達が好きでも、思う気持ちは一緒なんですよね。
(新潟・富山恵子・♀・18歳)

■私はSUPER JUNKY MONKEYがずっと好きだけど、今まで怖くてライブに行けませんでしたが、行ってきました。もうとにかくブチ抜かれ、女だってこんなCOOLな音楽が(女だから!?)出来るんだから私もバンドを頑張ろうと思いました。日本にもこんなバンドがあるんだよ。
(愛知・ばかばっか・♀・18歳)

■私の服の趣味は、バンドが好きなのが分かるだろうという服。短大に入ってからさらに強くなったかもしれないんだけど、いくらなんでも学校には勉強に行くので、ライブの時と同じようにはしてないんだよ。でも周りは口々に「わ〜、ルナシー入ってるよ」「バクチク風味出てるよ」「なんちゃってX」とうるさい。全部好きです。だから言われてもいいけど、何でみんなビジュアル系と分けられるバンドには「うわ〜」と付け加えるのか。そんなに「うわ〜」か! じゃあ私も「うわ〜」か! あなた達小室系に何て付け加えてやろうかと思ったりする。
(埼玉・敦司視線狂・♀・19歳)

■オレはTHE STREET BEATSが命だと思っています。この前福岡のDRUM Be-1でライブがあった。ライブに行くのは初めてで、この日オレの夢がかないました。この時代に生きていて、最高の一日だったぜ。
(熊本・H.M・♂・15歳)

■タイアップだ何だと騒いでいるが、それもこれもすべては事務所なんかの力なのではないでしょうか? 強力なプッシュ(売り出し)をかけてデビューしたてで武道館やっちゃう人達とか、ビデオクリップをきれいに撮ってもらってガンガン流しちゃうとか、とにかく音は二の次でビジュアルで売っちゃう人達とか。やっぱり実力はあっても露出が多くないとだめなのねーと思ってしまう。私はValentine D.C.が大好きで、知らない人はソンしているぐらいに思ってる。この間のオン・エア・ウエスト初のソールド・アウトのメンバーの涙は忘れないよ。ハデなプロモーションはなくったって、ライブバンドとして頑張っているV.D.Cを私はいつまでも応援しているよ! 早く「栄光行きの電車」に乗ってほしい!! 知らない人は一度ライブに来たら絶対ハマるから。ぜったいっ!
(東京・HERO・♀・24歳)

■ビジュアル系バンドのライブで一人浮いてしまうかと思っていた私(39歳)ですが、行ってみるととても楽しくてヤミツキです。イイものはイイし、好きなものは好き。それが基本ですよね。
(北海道・櫻萩・♀・39歳)

■やっぱりミュージシャンって人前で歌ってこそミュージシャンなんだなあと思いました。CDなんてどんな手を加えているか分かりませんからね。生の声はごまかしようがないもの。
(大分・R&R・♀・?歳)

■私はラジオで「TRUE BLUE」を聴いて、初めてLUNA SEAのファンになった。またラジオで「ROSIER」を聴いて大好きになった。ROCKとか全く分からなくて、がむしゃらに好きな音楽を追い求めてたあの時。ROCKというものを初めて知った。後になってテレビでLUNA SEAを見てビックリした。その時は小6で、ビジュアル系のアーティストはX JAPANしか知らなくてとってもショックだった。でも今はそんなの関係なく、ただ純粋にLUNA SEAが好きだ。
(兵庫・ぶたのしっぽ・♀・13歳)

■テスト前の1週間でライブに5回行った。お陰で全教科一夜漬けにもならなかった。でもクラスで5位を取った。自分がちょっと好きになった。
(埼玉・モカ・♀・16歳)

■最近カラオケ受けするような歌ばかり聴いて必死で覚えて歌ってた。音楽を心で聴いて感じることを忘れてた。だけどイエモンの「JAM」を聴いて、何かスゴイ感じて泣きそうになって「私ダメじゃん」って思った。カラオケもイイけど心で感じる音楽、忘れちゃダメですね。
(福岡・Y・♀・17歳)

■TOMOVSKYのライブに親が反対。理由は夜遅くなるから。どのライブも6時ごろなので、どこのライブにも行けません。昼のライブってあまりないですよね。TOMOVSKY大好きで〜す。
(埼玉・田戸岡綾・♀・15歳)

■よく「〜のためなら死ねる」って言う人がいるけど、おかしいと思う。ホントに死ねるの? 死ぬってことがどれだけ大きくて、深いものか分かってる? それだけそのアーティストのことを愛してるんだろうけど、その思いを一度しかない人生に置き換えないでほしい。せめて「大好きなケーキよりもスキ」くらいにしようよ。
(高知・美奈月・♀・18歳)

■この間電車に乗っていたら前に立っていた女子高生の二人組が何か話しているのが聞こえてきたんです。「ねェ、あのB'zの新曲ってさあ、あれ歌じゃないよねー」って言ってて、私はB'zファンなので『エッ!? どうして「Real Thing Shakes」が歌じゃないのかな』と思って聞いてたら、「だよねー、あれじゃカラオケで歌えないじゃん」と言っていました。何かおかしくて、不思議と怒りとかもわかなかったです。正直言って「同じ女子高生だけど、私はああいう考え方しない人間になって良かった〜」って安心しちゃいました。
(新潟・SAVE ME!?・♀・18歳)

■ただ今就職活動中で大変です！ WANDSを聴きながら、頑張っています(励まされながら…)。
(静岡・ｲｩｳﾞｩ・♀・20歳)

■もうすぐkyoちゃんのライブ。1年、短かったような長かったような音楽を愛している限り、ずっと歌い続けてほしい。kyoちゃんの色で。
(新潟・西山幸代・♀・16歳)

■いよいよBUCK-TICKのライブが始まります。今からとても楽しみにしてる。chatter boxのいろいろな意見を読んだけど、B-Tは今までのスタンスでいいと思う。観客と慣れ合っているB-Tなんて観たくない。
(静岡・COSMOSは花・♀・28歳)

■「くだらないのになぜか売れてる曲」についていろいろ論議されてることが多いようですが、「くだらないからやっぱり売れてない曲」の方がその100万倍はあると思う。ちなみに私は、「くだらなくなくて売れてる曲」って好き。そして「くだらなくないのに売れてない(知られてない)曲」を愛しく思います。
(大阪・ﾙﾘｦ・♀・26歳)

■最近大型CD店でCDに紹介用ポップが付いてますよね。手書きで「×××にオススメ!」みたいな。あれで時々「コレ、けなしてるんじゃないか？」と思うようなのがあります。前に某人気バンドが歌の入ってないシングル集らしいのを出した時は、「素直にカラオケとなぜ言えぬ」とか書かれてて、私がファンなら腹が立つだろうなと思いました。音楽ライターのように、記事に対して責任がかかってくるプロならともかく、ポップという公の媒体を使って店員が無責任に書き散らすのは絶対良くないと思う。
(大阪・ﾏﾝﾀﾞﾘﾝ魚・♀・30歳)

■ルナシーの新曲にタイアップが付いたことに対して、「イメージが変わってしまうんじゃないか」とか「複雑な気分」とかいろんな思いがあるみたいだけど…。ルナシーは今こうしてドームでライブが出来るまでの間、タイアップとかを付けずに自分達の力で頑張り、成長してきたことがすごいんです。だから今さらタイアップが付いても、テレビによく出ていても、全然問題じゃない。こんなバンドが今後現れることはないと思うし、そんなルナシーだからこそ私達は応援する。つまんないことにこだわって彼らの本当の頑張りを忘れないようにしたいな。
(福岡・MIKI・♀・23歳)

■テレビにアーティストが出演する時ってどうしてシングルがリリースされる時とかシングルがヒットした時なんでしょうか？ すごくいいアルバムが出来たからその中の曲をぜひ聴いてほしいとか、CDになるかどうか分からないけどいい曲だからぜひ聴かせたいとか、そういうのはダメなんでしょうか？
(岡山・瑠璃華・♀・18歳)

■私がWANDSを好きになったきっかけは少し変わっています。それはTVの「夜もヒッパレ」なんです。尾藤イサオさんが「Same Side」を歌ってて、超カッコいい～って思ってCDを借りて聴いてもうハマりまくったんです。それ以来、WANDSに興味がなかったというよりむしろ嫌いだった私が、WANDS漬けの毎日を送っています。WANDSに出会わせてくれた尾藤さんに感謝してます。(熊本・尾藤さんも好き・♀・17歳)

■私はL'Arc～en～Cielが好き。お母さんにも好きになってほしくて車の中でアルバムをかけ続けた。するとこの間「C'est La Vie」を「テテラヴィ～」と口ずさんでいるではないか!! 間違えているけどうれしかった。今度ライブ一緒に行こ～ね、お母さん。
(奈良・海くん遊くん佑ちゃん・♀・18歳)

■ファンならミュージシャンの変化を受け入れてもっと楽しめばいいのに。なぜ戸惑ってしまうのだろう。100%とは言えないけど、変化というのは成長だと思う。子供の成長を楽しむ親の気分になるも良し、もっと楽しもう。
(宮城・爆弾ﾏﾝ・♀・19歳)

■modern gleyのライブはすごく幸せを感じる。改めて「生きてるって素晴らしい。これからも生きていこう」って思う。最近、洋邦関係なく大好きになれる曲、アーティストにたくさん出会えている。これもすごく幸せだ～。
(千葉・あひるちゃん・♀・17歳)

■このごろはハヤリものしか聴かない人、多いですよね。そしてすべてレンタルで済ませちゃう人。今のCD売り上げとかっていうのも、半分はレンタル屋なのではと思ってしまう。そんなハヤリものとなってしまったバンドの昔からのファンの人はかわいそうですね。勝手に持ち上げられていつか消えていく…なんてすごく嫌。
(山口・ｶｽﾞｦ・♀・21歳)

■試験勉強をしている中3の息子の隣でJ-ROCK magazineを読んでいます。「ひどい親だ」と言われながら。ついこの間まで英語も数学も教えてあげてたのに、近ごろロックのことを息子から教えてもらっています。
(長野・おばさんでｺﾞﾒﾝﾅｻｲ・♀・38歳)

■L'Arc～en～Cielが下敷き(?)になっていた。「何てこったい!」と思いつつもマジマジと見てしまった。最近、写真とかも売られてる。こんな田舎まで。天使の心と悪魔の心で複雑です。
(富山・Jekyll・♀・17歳)

■先日あるクリップ集を購入したところ、同封されたアンケートハガキに「～を知って興味をなくしたアーティストは？」という質問があった。私は片手の数を優に越えるだけのバンドやアーティストのCDを聴き、ライブへ足を運んでいるが、そう簡単に興味を失うような人達の曲を聴いてるつもりはない。質問した側が何を望んでいたのかは知らないけれど、とても理不尽な問いかけをされたように思えた。
(北海道・ゆきやなぎ・♀・19歳)

■J-ROCKの単行本を立ち読みで全部読みました。2時間ぐらい立ちっぱなしだったので疲れたけど、とってもいい本だと思いました(だったら買えよ!!)ごめんなさい、編集の人。 (大阪・今野真幸・♀・18歳)

■私は何度もファンをやめようと思ったL'Arc～en～Cielファンです。どうしてもベースのtetsuが気に入らないんです。ベースの音は好きなんですけど、態度が悪すぎる…。何か私には「ファンを敵に回してる」っていうような気がすっごくするんです。アンケートなんかで「今したいことは何ですか」とかいう質問があると、「今はファンのせいで出来ません」とか言うし。ファンあってのラルクだと私は思うのですが…。私の考え方は間違っているのでしょうか？
(宮城・北村聖華・♀・16歳)

■本当に私的ですが…、筋肉少女帯のライブに久しぶりに行ってきました(地方なので)。「ああ、これだ…」と、仏を見つけてきました。(宮城・維多郎・♀・16歳)

■modern gleyが好きだな…と思い始めてまだあまりたってないですけど、彼らの世界観とか、あの奥深さ、強さってどこから来るのかと考えていました。自分の世界やイメージを突き詰めていくという、何かを作るために一番大切なことを大切にしてるだけということが、何だか胸に痛かった。私が大切に出来てなかったことです。
(兵庫・広瀬いくみ・♀・?歳)

■TOMOVSKYが大好きです。でも「知ってる」って人すらいません。だからCD貸しまくって歌を聴いてもらってます。みんな「よく分かんない」って言ってます。

TRIBUNEにひと言!

●8月号で「ライブで叫ぶのは何の表れ？」と言ってた美夜さん。そんなの決まってるじゃない。自分の気持ちがこれだけ大きいってアーティストに伝えるためだよ。ライブは、アーティストとファンがいて、お互い共感して楽しんで成り立つものだから、アーティストの音に応えてみんな声を送るんだと思う。黙って静かに見てるだけじゃあライブじゃないよ。叫び声が不快に思えるってことは、自分が冷めてるんじゃないかな？ もちろん静かにしているべき場面もあるけどね。
(静岡・ﾚｱ・♀・15歳)

●8月号の「ビジュアル系バンドの人達がメイクしなくなってきたことが寂しい」と言ってたちゃんぽくん。あなたは「キレイだから」「カッコいいから」ファンになるんですか？ その人の人間性や音楽性は関係ないんですか？ メイクが薄くなっていくのと人気が比例していると言ってますが、それは世間に認めてもらったということで自分の中で自信が出来たんだと思います。それに真矢さんがメイクしないでテレビに出てたらどうなんですか？ 彼はLUNA SEAの真矢としてではなく一個人の真矢として出ているんだと思います。ビジュアル系だからメイクが濃いという概念は違うと思います。 (大阪・ﾀﾑﾀﾑ・♀・21歳)

●7月号の佐賀のららさんへ。何となくルナシーが言う「俺達は何も変わってない」という意味をはき違えているような気がします。「変わらない」とは彼らのLUNA SEAというバンドに対する思い入れであって、けっして外見や音のことではないと思います。だれのファンになったり離れたりするのも自由だけど、もっと本質を見抜いてください。
(愛知・田中瑠依・♂・17歳)

●8月号の藤沢るなさん、あなたの「ライブは一人でも楽しい」って意見大賛成です。私もときどき、「一人で行って寂しくない？」と聞かれるけど、ライブに行ったらそんなの考える余裕ない。ステージしか見えなくなっちゃうもん。友達と行くのも楽しいと思うけど、一人でも十分過ぎるほど楽しめる。寂しいなんて考えたことない! (北海道・蘭・♀・14歳)

●「GLAYみたいになるのは無理でしょうか？」という7月号の京都のAYUさんへ。もちろん無理です。だって(私はGLAYファンではないけれど)GLAYはGLAYにしか出来ないことをやって輝いてるんだもんね。でも「どんなにうまくなっても女の子のバンドは男の子みたいにカッコ良くなれない？」、そんなわけないでしょう! 女の子には男の子にないかわいさ、カッコ良さがたくさんあると思う。あなたにはあなたにしか出来ないカッコ良さやノリがあるはずです。周りの言うことなんて気にせずに、またバンドをやってみたら？
(東京・ﾚｲ・♀・16歳)

J-ROCK Original Chart top10

Rank	Artist	Votes
1st	BUCK-TICK	2118 votes
2nd	WANDS	1937 votes
3rd	B'z	1861 votes
4th	氷室京介	1786 votes
5th	CRAZE	1504 votes
6th	LUNA SEA	1486 votes
7th	GLAY	1416 votes
8th	L'Arc～en～Ciel	1400 votes
9th	大黒摩季	1301 votes
10th	T-BOLAN	1095 votes

本誌7月号アンケートハガキによる読者投票と全国32局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」の月間総合順位を集計し、6月度のジェイロックマガジンオリジナルチャートをお届けする。次回締め切りは8月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートにセレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント！

Rank	Artist	Votes
11	黒夢	1093 votes
12	modern grey	1087 votes
13	X JAPAN	1072 votes
14	Eins:Vier	1015 votes
15	DEEN	954 votes
16	ZARD	902 votes
17	THE YELLOW MONKEY	846 votes
18	DER ZIBET	760 votes
19	布袋寅泰	753 votes
20	FEEL SO BAD	748 votes
21	ZYYG	707 votes
22	筋肉少女帯	690 votes
23	THE STREET BEATS	634 votes
24	BLANKEY JET CITY	632 votes
25	SIAM SHADE	605 votes
26	Valentine D.C.	581 votes
27	MANISH	545 votes
28	斉藤和義	537 votes
29	PAMELAH	487 votes
30	JUDY AND MARY	447 votes
31	甲斐よしひろ	435 votes
32	SUPER JUNKY MONKEY	404 votes
33	↑THE HIGH-LOWS↓	374 votes
34	AMG	366 votes
35	THE MAD CAPSULE MARKET'S	338 votes
36	NOKKO	330 votes
37	奥田民生	329 votes
38	JUN SKY WALKER(S)	324 votes
39	TWINZER	321 votes
40	GARGOYLE	284 votes
41	幻覚アレルギー	256 votes
42	PERSONZ	242 votes
43	LA'CRYMA CHRISTI	220 votes
44	nuvɔ:gu	201 votes
45	TOMOVSKY	179 votes
46	media youth	152 votes
47	SPITZ	151 votes
48	DOG FIGHT	132 votes
49	THE MODS	105 votes
50	SPAED	101 votes

Guitarist 20

1st 今井寿 BUCK-TICK

2nd 松本孝弘 B'z

3rd ken L'Arc~en~Ciel

4th 柴崎浩 WANDS

5th INORAN LUNA SEA

6	SUGIZO	[LUNA SEA]
7	HIDE	[X JAPAN]
8	星野英彦	[BUCK-TICK]
9	布袋寅泰	
10	Yoshitsugu	[Eins:Vier]
11	HISASHI	[GLAY]
12	倉田冬樹	[FEEL SO BAD]
13	瀧川一郎	[CRAZE]
14	吉田光	[DER ZIBET]
15	菊地英昭	[THE YELLOW MONKEY]
16	PATA	[X JAPAN]
17	TAKURO	[GLAY]
18	橘高文彦	[筋肉少女帯]
19	浅沼拓也	[JUDY AND MARY]
20	SEIZI	[THE STREET BEATS]

Vocalist 20

1st 櫻井敦司 BUCK-TICK

2nd RYUICHI LUNA SEA

3rd hyde L'Arc~en~Ciel

4th 稲葉浩志 B'z

5th 上杉昇 WANDS

6	大黒摩季	
7	TOSHI	[X JAPAN]
8	森友嵐士	[T-BOLAN]
9	氷室京介	
10	TERU	[GLAY]
11	大西貴美	[modern grey]
12	ISSAY	[DER ZIBET]
13	清春	[黒夢]
14	吉井和哉	[THE YELLOW MONKEY]
15	Hirofumi	[Eins:Vier]
16	坂井泉水	[ZARD]
17	甲斐よしひろ	
18	川島だりあ	[FEEL SO BAD]
19	藤崎賢一	[CRAZE]
20	kyo	

Bassist 20

1st 樋口豊 BUCK-TICK

2nd J LUNA SEA

3rd tetsu L'Arc~en~Ciel

4th 明石昌夫 AMG

5th JIRO GLAY

6	人時	[黒夢]
7	HEATH	[X JAPAN]
8	上野博文	[T-BOLAN]
9	Luna	[Eins:Vier]
10	廣瀬洋一	[THE YELLOW MONKEY]
11	HAL	[DER ZIBET]
12	沢田大司	[D.T.R]
13	大橋雅人	[FEEL SO BAD]
14	飯田成一	[CRAZE]
15	恩田快人	[JUDY AND MARY]
16	TAKESHI"¥"UEDA	[THE MAD CAPSULE MARKET'S]
17	内田雄一郎	[筋肉少女帯]
18	加藤直樹	[ZYYG]
19	栗林誠一郎	
20	HIKO	[nuvɔ:gu]

J-ROCK

5月27日から6月26日の間に寄せられたアンケートハガキを基にチャートを作成した各パート別のランキング。お目当てのアーティストは入っているだろうか？

Drummer 20

1st ヤガミトール BUCK-TICK

2nd 真矢 LUNA SEA

3rd sakura L'Arc~en~Ciel

4th YOSHIKI X JAPAN

5th 青木和義 T-BOLAN

6	菊地英二	[THE YELLOW MONKEY]
7	Atsuhito	[Eins:Vier]
8	MOTOKATSU	[THE MAD CAPSULE MARKET'S]
9	菊地哲	[CRAZE]
10	MAYUMI	[DER ZIBET]
11	樋口宗孝	[SLY]
12	山口"PON"昌人	[FEEL SO BAD]
13	宇津本直紀	[DEEN]
14	藤本健一	[ZYYG]
15	鈴木英哉	[Mr.Children]
16	中村達也	[BLANKEY JET CITY]
17	太田明	[筋肉少女帯]
18	JUNJI	[SIAM SHADE]
19	KATSUJI	[GARGOYLE]
20	まつだっっ!!	[SUPER JUNKY MONKEY]

Another Player 5

1st 木村真也 on KEYBOARDS WANDS

2nd 坂本龍一 on KEYBOARDS

3rd 西本麻里 on KEYBOARDS MANISH

4th 山根公路 on KEYBOARDS DEEN

5th 永川敏郎 on KEYBOARDS シェラザード

1995.11月号~

筋肉少女帯 / SOUTHERN ALL STARS / BUCK-TICK / BLANKEY JET CITY / FEEL SO BAD / GLAY / BOW WOW / nuvo:gu / TOMOVSKY / J-ROCK GUITARIST

L'Arc~en~Ciel / 大槻ケンヂ / 忌野清志郎 / Eins:Vier / BIG LIFE / ハイパーマニア / BLOODY IMITATION SOCIETY / THE HARPER ST. BAND / VISUAL WORK SHOCK

1996.1月号~

T-BOLAN / 黒夢 / CRAZE / DEEP / THE MODS / CHAGE & ASKA / Chap Chimes / PIZZICATO FIVE / FIX / 斉藤和義 / 明石昌夫グループ / SIAM SHADE / BEST ALBUM

X JAPAN / GLAY / DEEN / 明石昌夫 / CHAGE & ASKA / 甲斐よしひろ / Eins:Vier / THE MAD CAPSULE MARKET'S / ZYYG / GARGOYLE / LAUGHIN' NOSE / 真心ブラザーズ / ALBUM CREDIT

GLAY / X JAPAN / 筋肉少女帯 / TWINZER / TOMOVSKY / 尾崎豊 / 甲斐よしひろ / 佐野元春 / 音楽雑誌用語マニュアル

LUNA SEA / B'z / 黒夢 / JUDY AND MARY / 布袋寅泰 / SIAM SHADE / Eins:Vier / 筋肉少女帯 / 斉藤和義 / L'Arc~en~Ciel / J-ROCKの掟

BUCK-TICK / L'Arc~en~Ciel / 大黒摩季 / LUNA SEA / 斉藤和義 / 幻覚アレルギー / modern grey / SUPER JUNKY MONKEY / DER ZIBET / FEEL SO BAD / 明石昌夫 / 布袋寅泰 / バンドの名前

黒夢 / TAK MATSUMOTO (B'z) / THE YELLOW MONKEY / GLAY / SPITZ / 奥田民生 / SUPER JUNKY MONKEY / FEEL SO BAD / LA'CRYMA CHRISTI / kyo / CASCADE / modern grey / 企画アルバム検証

上記以外は売り切れです。詳しいお求め方法は下記をご覧ください。

定期購読&バックナンバーの申込方法

■本誌の定期購読を希望される方は、とじ込みの郵便払込用紙に必要事項(郵便番号・住所・氏名・電話番号)を記入の上、最寄りの郵便局よりお申し込みください。半年間(6冊)、2700円(税・送料込み)でお届けします。

■「J-ROCK magazine」バックナンバーを希望される方は、下記注意事項をご覧の上、とじ込みのバックナンバー専用払込用紙に必要事項を記入し、希望冊数分の本代と送料の合計金額を最寄りの郵便局より振り込んでください。お届けするまで約2~3週間かかります。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、返送料を差し引いて切手または小為替で返金させていただきます。ご了承ください。

※注意

◇本の価格は、95年11~96年5月号は1冊300円、96年6月号以降は1冊400円です。(売り切れもあるのでご注意下さい)

◇送料は、1冊160円、2冊220円、3~5冊600円、6~12冊850円です。

◇希望する号数(必ず何年何月号かを記入)・冊数・郵便番号・住所・氏名・電話番号を必ず振込用紙に記入してください。

◇書店でも注文によりお求めになれます。

ロック音楽ROOTS・J-ROCK ARTIST BEST 50

■TV音楽番組「ロック音楽ROOTS」(J-ROCK magazine提供、全国31局ネット)では、番組に対するご意見・ご要望をお待ちしています。官製ハガキにご意見・ご要望・住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「ロック音楽ROOTS」係宛までお送り下さい。毎月抽選で50名様に番組オリジナルグッズを差し上げます。

■「J-ROCK magazine」は、全国32局ネットで放映中の音楽番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」に協力しています。この番組は、新譜の売り上げチャートではなく、皆さんの投票によって決まるアーティストの人気ランキングを、毎回発表していく番組です。読者の皆さんも番組づくりに協力してください。投票方法は、官製ハガキに投票したいアーティストを1組と、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「J-ROCK ARTIST BEST 50」係宛お送りください。投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。

大 募 集

■J-ROCK magazineの「INDIES JUNK BOMB」コーナーでは、オリジナリティーを持った意欲あふれるインディーズのバンドやソロアーティストを紹介しています。我こそはと思う人は、編集部まで音源、プロフィール、写真、ビデオなど活動内容が詳しく分かる物を送って下さい。取材をお願いする場合は、こちらからご連絡します。推薦もOKです。

■J-ROCK magazineでは、新企画『PLAYERS FILE』を構想中。この企画は毎月1アーティスト(バンドの場合はその中の一人)に注目し、編集部や読者でそのアーティストを追求しようというものです。そこで今月もアーティストに対する読者の意見を大募集! 「この人こそは…」と自分が思うアーティストの作詞や作曲、プレイやステージングなどに対しての具体的な意見を送って下さい! 「○○という曲のこの音、この演奏がスキ」「○○という曲を聴いて、考えが変わった」という素直な意見から、「○○という曲のあの部分は一体どうやって弾いているのか。歌っているのか」などの疑問までアーティストに対するものなら何でもOK。投稿の際は、ペンネームを希望する人も、必ず住所・氏名・年齢を書いて下さい。

■「J-ROCK magazine」では、音楽にこだわりを持ったいろいろな人達が「だれかに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」「ネタ」「意見」「批判」などを発表する場になりたいと考え、VOICEというコーナーを設けています。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、アーティストへのメッセージなど、どのようなスタイルでもOK。このページ下のあて先まで本音を投稿してください。採用させていただいた方には、CD券(3000円分)を差し上げます。

【投稿規定】

◇文字数:1600字程度まで。 ◇原稿用紙での投稿を基本としますが、フロッピーディスク(MS-DOSファイル)、FAXでも構いません。 ◇ペンネームも可能ですが、必ず住所・氏名・年齢・タイトルを明記してください。

■視覚的表現から音楽へのこだわりを伝えたいというカメラマン、イラストレーター、芸術家(平面・立体)の持ち込み歓迎します。事前に電話連絡の上、編集部まで作品をご持参ください。

次 号 予 告

J-ROCK magazine 96年10月号は、8月27日発売。

登場予定アーティストは、THE YELLOW MONKEY/黒夢/L'Arc~en~Ciel/THE MODS/ZYYG/SHERBET/JOE BROWNN/TWINZER 他。

株式会社ジェイロックマガジン社・編集部 〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル8F TEL 06-214-1751 FAX 06-214-1761

ROCK'N ROLL STANDARD CLUB BAND

松本 孝弘 on Guitar

生沢 佑一(vo)from TWINZER

鮫島 秀樹(b) from HOUND DOG

黒瀬 蛙一(ds)　増田 隆宣(key)

OPEN 18:00 / START 19:00
6,000YEN(INCL.TAX, 1 DRINK)

LIVE SCHEDULE

8/22(THU)　札幌ペニーレーン24
問)ウエス　011-613-9000

8/26(MON)　神戸チキンジョージ
問)サウンドクリエーター　06-357-7500

8/27(TUE)　大阪W'OHOL
問)サウンドクリエーター　06-357-7500

8/29(THU)　名古屋ボトムライン
問)サンデーフォークプロモーション　052-320-9100

9/3(TUE)　横浜CLUB HEAVEN
問)キョードー横浜　045-671-9911

9/4(WED)　渋谷 ON AIR EAST
問)フリップサイド　03-3470-9999

9/6(FRI)　福岡クロッシングホール
問)ブレインズ　092-771-8121

ROCK'N ROLL STANDARD CLUB　NOW ON SALE

1. I GOT THE FIRE　2. FOOL FOR YOUR LOVING　3. CAUSE WE'VE ENDED AS LOVERS　4. INTO THE ARENA　5. ROCK AND ROLL, HOOCHIE KOO
6. MOVE OVER　7. LIFE FOR THE TAKING　8. SUN SET　9. WISHING WELL　10. COMMUNICATION BREAKDOWN　11. MISTREATED

BMCR-7007　2,000yen(INCLUDING TAX)　Rooms RECORDS